
不良とバカとテストと召喚獣

紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不良とバカとテストと召喚獣

【Nコード】

N5587N

【作者名】

紅

【あらすじ】

これは、転生物です。ある一人の不良が事故にあって死んでしまった！そして、転生先は“バカとテストと召喚獣”の世界だった。だが、不良であった彼のさぼり癖などは直るはずがなく、テストの日に学校へ行かなかったためにFクラスになってしまった。そんなお話です。

注（原作が崩壊していきますので、そういうのが苦手な方は引き返してください。

皆さんのおかげで、PV20000・ユニーク3000突破しま

した。

プロローグ1（前書き）

楽しく読んでくれたら幸いです。

プロローグ1

あれ？　なんでいきなり目の前が真っ白なんだ？　意味が分からない。誰か説明してくれ。納得のいく説明を。

「はあ。君、バカなんじゃないの？」

俺がそんなことを考えていると、行き成り罵倒が飛んできた。

俺は声のした方に起き上がりつつ、顔を向けた。そこには白い服を着ていて杖を持っている、見るからに危ない人が立っていた。

こいつ、殺つてやるうか？

「君、物騒なことを考えるのはやめてくれないかい？」

な、なに！　心を読まれているのか！　はあ。そんなことありえないよな？　うん！　ありえないな。そんなことができる人間なんていやしないもんな！

俺は驚きながらも自分にそう言い聞かせたが、それは無駄なことだと思い知らされることとなった。

「確かに。“人間”には無理だろうね。でも、ボクは神ですからありえるんですよねえ」

俺はしばらく意識を失った。

はあ？　こいつ、なにを言っているんだ？　まあ。言いたいことはいっぱいあるが、とりあえずこれだけは言っておこう。

「っへ？　神？　あんたが？　行き成り見知らぬ人を罵倒するよ
うな奴が？　フン。ありえないな！」

俺は人差し指を自称“神”に突きつけながら言つてやった。
どうだ。これで、こいつはどんな反応をするんだ？

「まあ。それは謝るよ」

お、以外に素直だな。しっかり謝ってきた。もしかしたら、こいつ本当に神なのか？

っと、俺が思っていると次の瞬間、俺の考えは間違っていたという事に気づかされた。

俺は痛みを堪えながら立ち上がった。だが、俺は足を生まれたての小鹿みたいにピクピクと震わせていた。

自称“神”は頭を掻きながら答えた。

「まあ。神だからかな？」

こいつ、マジで殺ってやりたい！

俺がそう思っていると、自称“神”は俺がいる場所、そして俺がなんでこうなっているかを突然話し始めた。

俺は説明を終えた時に、口を開いた。

「つまり、こういうことか？俺は、実際死ぬはずじゃなかったんだが、車に轢かれそうになっていた子供を助けたが為に死んでしまい、それを哀れんだ神共が俺をお前のもとに送り込んだと？」

「まあ。簡単に言くと、そういうことだね。性格にはパトカーに追われていた強盗の車に、子供が轢かれそうになっていた所をお前が助けたってことだね。そして、それを哀れんだ上の神共がボクのもとに君を送り込んだのさ。転生させるためにね」

俺は心の底から笑いだした。

「ップ。プハハハハハハハハハハ！ バツカじゃねーの！？
ハハハハハハハハハハハハハハハハ！ お前、絶対に病院に行つた方がいいつての！ プハハハハハ！ 腹いてえ！」

自称“神”はそれに腹を立てたらしく、行き成りこんなことを言い始めた。

「てめえ、転生する世界はこっちで勝手に決めるぞ！ 早く逝っちまえ！」

いや、百歩譲って“神”と“転生”って事を信じたとしても、いくの漢字が間違っているのだが。それと、キャラ変わってます。

そんなことを考えていると、俺の体が勝手に光り出した。

「君の世界は“バカとテストと召喚獣”の世界に決めておいたから！ スキルはまあ。色々付けておいたから。後で、君の部屋の机の引き出しを開けてごらん。マニュアルっぽい物が入ってるから。まあ。楽しい生活を送ってくれ！」

俺は質問した。

「ちよ、ちよっと待てよ！ “バカとテストと召喚獣” ってなんだよ！」

「原作は小説でライトノベルと言われている。つま、原作なんて崩していいから。好きにやっておくれ」

自慢じゃないが、生まれてこの方ライトノベル・アニメ・マンガなど見たことがない。俺は有名な家系に育ったからそんな物と縁がないのだ。ごたごた言ってみたが、実際はただ単にそんなものに興味がないだけだ。

でも、そんな俺でも言えることがある。『原作なんて崩していいから』とこいつは言ったが、“なんて” ってのは失礼だろうが！ それと、俺の心がこう言えと訴えてきている。『あんな、面白い作品を侮辱するなんてとんでもない！』 っど。

「つま、知らなくても生きていけるよ（多分） っつて、ちよっと待て！ 今、心の中で多分って思っただろ！」 ああ。君はうるさいね！ とつとつと、消えな！」

自称“神” がそう言うと、俺の意識が飛びそうになった。

俺はその瞬間に思った事がある。

本当に、神だったんだな。よし、次あったら殺つてやる！ 今までにない酷い死に方をさせてやる！ っど。次の瞬間完全に俺の意識は吹っ飛んだ。

プロローグ1（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

プロローグ2（前書き）

続きです。といっても、文字数少ないですが。楽しく読んでもらえれば、幸いです。

プロローグ2

目が覚めると、見覚えのない天井が目に入った。

どこだここ？ 俺は、いったい何をしていたんだ？

俺は記憶を辿ってみた。

…ああ。そうか。神とかほざく奴に転生させられたんだっただな。

そう言えば、引き出しがどうのこうのって言ってたっけ。

俺は机の引き出しを開け、中に入っていた手紙を手を取った。

なになに？ 『スキルは、まあ。後で話すよ。資金は、まあ。後で話すよ。君のいく学校だけど、文月学園だから。間違わないようにそれと、転生したら1からスタートと思っていたなら、それはとんだ間違いだから。なぜかって？ それは、まあ。後で話すよ。それと、学校は明日から始まるから。君は高1だから。明久君達と同じ年齢ね。それじゃ』 by 神

俺は手紙をごみ箱に投げ捨てた。

…なんだよあれは！ ほとんど、書いてねえじゃねーか！ あの神、適當すぎるだろうが！

はあ。悔やんでもしょうがないか。明日から、学校って言われてもなあ。つま、大体俺が住んでいた家と物の配置とか同じだから、その辺は気を利かせてくれたんだろ？ すると、制服はそのタンスの中だな。

俺はタンスを開けた。

ビンゴ。制服はちゃんとハンガーに掛かってあるな。

それじゃ、今日はもう寝よ。これまた、気を利かせてくれたのか、夜だしな。

こうして、俺の転生の1日目が終わったのだ。

プロローグ2（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございます。

第一問 俺は当然Fクラス！（前書き）

第一問目の問題がありません。すいません。次からは書きたいと思えます

第一問 俺は当然Fクラス！

俺が転生した日から早くも1年が経ち、俺も2年生になった。

今日はクラスが振り分けられる日らしい。俺は、絶対にFクラスだが。なぜかって、テストの日にサボってたからに決まってるだろ？ そのせいで、俺はテストを受けていないので0点なのだ。ついでに言うと、俺も“観察処分者”だ。理由は俺にも分からない。なぜなら、俺には思い当ることが何一つとしてないからだ。

俺は1年の時の行動を振り返った。

学校には週一行かずサボってたし、学校に行っても教室で寝てるか屋上で寝てるかだったな。あ、それと明久や雄二達と色々なことをやったな。没収品をとり返したりなどの騒ぎを起こしたり。だが、それだけだぞ？ なんて、観察処分者にされたんだろうか？

普通の人なら、これだけやってれば当たり前だろ。っと、思うかもしれないが、俺は転生する前も似たようなことをしていたのであまり実感がないのだ。

俺がそんなことを考えながら歩いていると、走っている明久の姿が見えた。俺は明久のもとまで走った。

「よう。明久」

明久は振り返り、挨拶を返してくれた。

「あ、おはよう。龍人」

ちなみに、今更だが俺の名前は天宮龍人だ。

俺は先ほどから、疑問に思っていたことを訊いた。

「それにしても、なんで走ってるんだ？」

「っへ？ なんて走って、遅刻しちゃうからだよ」

「ふん。遅刻ねえ」

俺は遅刻の常習犯でもある為、そういうのは気にしていないのだが、明久はバカでも、一応立派な生徒なんだな。

俺達は学校まで走り続けた。

「吉井に天宮、遅刻だぞ」

玄関の前でドスの利いた声に呼びとめられる。声のした方を見ると、そこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男が立っていた。

「あ、鉄じ　じゃなくて、西村先生。おはようございます」

「西鉄村人先生。おはようございます」

俺達は軽く頭を下げた挨拶をする。なにせ相手は生活指導の鬼、西村教諭だ。目をつけられるとロクな目に遭わない。

「吉井はまだいいとして、天宮。その名前は何だ？」

あ、ヤバイ。西村と鉄人が混ざってしまった。つま、特に気にしなくてもいいだろうけど。

ちなみに鉄人というのは生徒の間での西村先生の渾名で、その由来は先生の趣味であるトライアスロンだ。真冬でも半袖あだな
はんそででいるあたりも理由のひとつだ。

「それにしても、明久。普通に『おはようございます』じゃないだろうが！」

「あ、すいません。でも、なんで僕だけなんですか？」

鉄人が一瞬こっちを見た。

「天宮は逆にこの時刻に来ることが珍しいからだ！　天宮がこの時間にいると今日は、雪が降るんじゃないかと思ってしまう」

つまり、俺が遅刻するのはしょうがないことだと思われるのか？　それに、ものすごく珍しいらしいな。春なのに雪か！　雨じゃなくて。

「まったくお前達は……いくら罰を与えても全然懲りないな」

溜息混じりに先生がつぶやく。こう言われると、なんだか俺や明久が遅刻の常習犯のように聞こえてしまう。実際に俺はそうなのだが。だが、これだけは言っておきたい。

明久も俺と同じような感情を抱いたらしく、鉄人に話し掛けた。

「先生。僕、遅刻はあまりしてないですよ？」

俺は明久の肩をポンッと叩いた。

「そうですね先生。俺は遅刻をしてるわけではありませんよ！
ただ」

「ただ？」

俺ははつきりと言った。

「サボってるだけです！」

俺は拳骨をもらうはめになった。

「まあいい。ほら、受け取れ」

先生が箱から封筒を取り出し、俺と明久に差し出して来る。宛て
名の欄には『天宮龍人』と、大きく俺の名前が書いてあった。

「「あ、どーもです」」

俺と明久の声が重なった。

一応頭を下げながら受け取る。

俺は見なくても分かるので、明久を残して先に行くことにした。

しばらく歩いていると、後ろから『お前はバカだ』という、鉄人
の声が聞こえてきた。

第一問 俺は当然Fクラス！（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございます。

第二問（前書き）

サブタイトルが思いつかなかったので、普通に第二問にしました。

第二問

【第二問】

門 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

- 『(2) 泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

天宮龍人の答え

『(1)頭が良くても、しばらく勉強してなくちゃ点数なんて取れないぜ!』

『(2)不良に目をつけられた後に、先生に目をつけられる』

教師のコメント

解答にもビックリですが、君がテストを受けていることの方がビックリです。

「ねえ。龍人」

いつの間にか、俺の隣に来ていた明久が声を掛けてきた。

「なんだ？」

「Aクラスの設備、見に行かない？」

俺はきっぱりと言った。

「行かねー」

「な、なんでよ! どのくらい設備に差があるか知りたくないの?」

俺は明久の肩に手を乗せた。

「明久。設備の差を知って、お前はもうどうする気なんだ?」

「ど、どうするって、それは」

明久が返答に困っていたので、俺は本音を言った。

「まあ。実は俺も興味があるんだけどな。明久、行こうぜ」

「OK」

「……なんだろう、このばかデカイ教室は」
隣では明久がそんなことをつぶやいていた。

まあ。確かにデカいかもな。でも、このぐらいにならFクラスを改築できるぞ？ 俺は、月に10億円神からもらっているのだ。あいつ、どんな金銭感覚してるんだろうか？ まあ。ほとんど使っていないから、月に9億円送り返している。なので、実質は1億円しかもらっていない。

「ねえ。龍人、なにこの教室？ 通常の5倍はあるとかという広さを持つ教室が三階に足を踏み入れた瞬間、目の前に現れたんだけど。もしか、これが噂のAクラスなの？」

俺は即答した。

「Aクラスだろうな」

「そう、だよ…」

「皆さん進級おめでとうございます。私は2年A組の担任、高橋祥子です。よろしくお願ひします」

俺達が足を止めて大きめの窓から中を覗いてみると、髪を後ろでお団子状にまとめ、眼鏡をかけてスーツをきつちり着こなした知的女性の代表のような教師がいた。

彼女が告げると、黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイに担任教師の名前が表示された。なんて贅沢なんだ！
一体いくらするんだろうか？

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他の設備に不備のある人はいますか？」

教室は50人の生徒が普通に授業を受けるには過剰なほどの広さと設備があった。

畜生！ 個人エアコンだと！ Aクラスに入れば、快適に授業をサボれたじゃねーか！ しっかりと勉強しとくんだったぜ！ せっかく、神から瞬間記憶能力と完全記憶能力にも近い記憶力を授かつ

たつて言うのに！

俺はあの後、神にある程度のことは聞いた。だから、知っているのである。

俺がそんなことを考えていると、明久に声を掛けられた。

「ねえ。そろそろ僕たちの教室に行こうよ。時間的にもあれだし俺は腕時計に目をやった。へえ。結構経ってるな。明久がもつと早くに言わなかったということは、Aクラスの自己紹介なんかを聞いていたんだろうか？ まあ。今はそんなことどうでもいいか」「そうだな。そろそろ行くか」

俺達は自分のクラス、もといFクラスに足を運んだ。

2年F組と書かれたプレートのある教室の前で明久は少しだけ躊躇^{うちちよ}していた。

「どうしたんだ、明久？」

俺は明久に訊いた。

「いや、遅刻なんてしてきて、皆に悪い印象を持たれたりしないだろうか。嫌なヤツや怖いヤツはいないだろうか？、思ってたさ」

「そんなことかよ。つまらねえな」

俺がドアを開けるよりも早く、明久がドアを開けて愛嬌^{あいけう}たっぷりに言い放った。

「すいません、ちよつと遅れちゃいましたっ」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

なんてひどい方なんだだろうか？ 教師だからといって、見過ごすわけにはいかないな。

俺は明久の後ろから顔を出して、先ほどのセリフを言った人物の方を見た。その背は意外と高く、だいたい180センチ強くらい。やや細身ではあるが華奢^{わかしよ}なわけではない。むしろボクサーのような機能美を備えた細さを感じる。視線をもうちよつと上にやると、現

れたのは意志の強そうな目をした野生味たっぷりの顔。短い髪の毛がツンツンと立っていてまるでたてがみのように見える。

…そうか。先ほどのセリフを言ったのは悪友の雄二か。なら、手加減は無用だな。

「……雄二、「てめえなら手加減は無用だな！」なにやってるの」俺の存在に気付いた雄二が数歩後ずさった。

「つげ、龍人！ い、今は明久に言っただけで、お前に言った訳じゃないんだ！」

うんうん。言い訳はそれだけだな

俺は一瞬にして雄二の前まで移動した。

先ほどは言い忘れていたが、神は他にもスキルをくれた。その中のひとつに転生する前の身体能力と運動神経を×5したというものがあった。俺は、もともと普通の人の3倍ぐらいは運動ができていたのだ。それに、×5をしたとなると金メダルも余裕で取れてしまう。

俺は行き成り雄二の腹を殴った。次に、後頭部に両手を回し自分の方に引っ張った。そして、ちょうどいいタイミングで膝を顔面にいれた。そこで雄二が倒れそうになるが、手首を掴み再びこちらに引き寄せた。俺はある程度の位置で手を離れた。そして、俺は右足を軸に雄二の顔面に裏拳を走らせた。

この時点で雄二の意識は飛んでいた。

だが、ここからが本番だ。俺は再び倒れそうになった雄二の腕を掴み、俺は雄二の足と足の間に身体を滑り込ませた。そして、足払いをしたと同時に雄二を背中に乗せた。ここからは簡単だ。俺は雄二の腕を中心に身体全体を思いつきり投げ飛ばした。雄二はうまい具合に卓袱台の上に倒れる羽目になった。

「ふう。いい汗掻いたな」

俺が一人で咳いていると、教室のいたるところから声が聞こえてきた。

『おい。見たか？ あいつ、あの雄二を圧倒してたぞ』

『あ、ああ。あいつだけは敵に回さないようにするか?』

『だな』

『雄二は大丈夫なのか?』

『まあ。あいつは頑丈だからな。俺達が食らってたら死んでたかもしれないが』

明久が俺に声を掛けてきた。

「龍人、やり過ぎじゃ…」

「大丈夫だ。あいつはあれぐらいでは死なないからな」

「そ、そう?」

「えーと、ちよつと通してもらえますかね? それと、学校で死人を出しかねないことはしないでください」

不意に背後から覇気はきのない声が聞こえてきた。

そこには寝癖ねくせのついた神にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにも冴えない風体ふうていのオジサンがいた。

「それと、席についてももらえますか? HRホームルームを始めますので」

学生服も着ていないし、どう見たって10代には見えない。どうやらこのクラスの担任のようだ。

「はい、わかりました」

「へーい」

俺達は席に着いた。席は決まっていなかったので明久の隣に座ることにした。ちなみに反対側は雄二の席だ。っていうか、違っても座りたくない。なぜなら、卓袱台の上で血を吐いている雄二がいるからだ。

その後不備を申し出る者などがいたが、俺には関係ない。

少しすると、自己紹介が始まった。俺は一応はちゃんと聞いていた。そして、俺の番がやってきたみたいだ。

「俺は天宮龍人これから一年よろしく頼む。それから、俺をバカにしたりした者はその卓袱台で死んでる雄二みたいになるかもしれないぞ。まあ。なにもしなければ、俺は手を出したりしないから気軽に話しかけてくれ」

俺はそういうと、座りそのまま卓袱台に突っ伏した。

なぜかって？ 寝るからさ

俺は睡魔に逆らうことなく、眠った。

しばらくすると『大ありじゃあッ！』という魂の叫びっぽい物が聞こえてきたので起きる羽目になった。

うるさいな。何事だ？

俺は視線を泳がせた。俺は教壇にいる雄二の姿をとらえた。

「だろう？ 俺だつてこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

こいつ、なにを言っているんだ？ 寝ていた俺にしては、雄二がなにを言っているのかさっぱりだった。

『そうだそうだ！』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

『そもそもAクラスだつて同じ学費だろ？ あんまりに差が大きすぎる！』

堰を切ったかのように次々とあがる不満の声。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

級友たちの反応に満足したのか、自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが」

これから戦友となる仲間たちに野生味満点の八重歯をみせ、

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思
う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

第二問（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございます。

おまけ もう一人の転生者

今、ここにもう一人の転生者がいた。

「へえ〜。ここが、文月学園か。俺はタイミング的にテスト受けてなかったから、Fクラスなんだけどな」

僕の名前は桐谷強介きりやま かつすけさ。僕は神の手によって殺された。そう、しかも手違いで。それに、めちゃくちゃカッコ悪くさつき殺された。

僕は学校に遅刻しそうになり、走っていた。

「やばい！ 遅刻だ遅刻だ！」

信号がちょうど渡る前で赤になってしまった。

「つな！ 早く青になってくれ！」

僕はその場で足踏みをしていた。

「くそ、まだかよ！ この信号遅いんだよなあ！ しかも、さっ

き赤になったばかりだし！ 本当に不幸だあ！」

だが、本当に不幸なのは次の瞬間だった。

僕は行き成り後頭部に激痛を感じた。

な、なんだよこれ？ 尋常じゃない程に痛いぞ！ なにが起きた

んだよ？ 駄目だ、意識がもうろうとしていく…バタツ

僕は意識を無くした。

僕は意識を取り戻し、身体を起き上がらせた。

「いてててて、いったい、何が起きたんだよ？」

僕が後頭部を擦りながらつぶやくと、横から「それについてはボクから話すよ」ツと聞こえてきたので、僕は横を向いた。

そこには、白い服を着ていてなおかつ杖を持っているという、見るからに怪しい人物が立っていた。

「な、お前誰だよ？」

「ボクは神であり、そして君を殺した者でもある」

僕は呆気にとられた。

「つへ、どういうことだ？」

「それがね、さっきボクはイライラして携帯電話をこの天界から投げたんだよ。そして、学校に向かっていた君に運悪く当たっちゃったんだよ。天界から地上までは結構な高さがあるからねえ。

携帯電話といっても、人を殺してしまうだけのスピードはでたんだよ。ってなわけで、ごめんチャイ」

そうか。とりあえず、こいつに殺されたってことは分かった。しかも、物凄い殺され方を。僕はどんどんこいつに対して殺気が込み上げてきた。

「そうか。そうか。てめえが殺したのか。なるほど。じゃ、次はオレがてめえを殺す番だな？ オレは優しいからさ。てめえにどんな死に方がいいか、決めさせてあげるよ」

ついでに言うておくと、オレは怒ったり、感情が高まったりすると“僕”から“オレ”に呼び方を変える。そして、言葉使いも変わる。

「い、いや、ちょっと、待って」

なんか、言ってるみたいだけど知るか！

「そうか。そうかボコボコにされた後に、両目をスプーンで取ってあげてから、全身を刺されて死にたいのか？」

「ちよ、まだ何も言っていないよ！」

「問答無用だああああああ！」

僕は悪友だった、天宮龍人から色々な武術を教わった。なぜかって？ ム力つく奴をボコすためさ。こう見えても、不良やってたんだぜ。龍人が子供を助けるために死んだのを聞いてからは、マジメにやってたけど。でも、それで今日でおしまいだね。といっ

ても、龍人とが死んでから一週間も経ってないんだけどね

オレが顔を殴ろうとした時に、自称神がおかしなことを言った。

「わ、分かった！好きな世界に転生させてあげるから、殴るのはやめて！」

オレは拳をギリギリのところまで止めた。

「それ、本当か？」

「ああ。もとから、転生はさせる気でいたからね。僕のとばっちりを受けて死んじゃったんだし」

「そうか」

……そうだなあ。色々な小説もとい、ライトノベル・マンガ・ゲーム・アニメを読んだりやったりしてきたが、その中でもいいなと思ったのは…そうだな。バカとテストと召喚獣の世界だな。

「なら、バカとテストと召喚獣の世界にしてくれ！」

僕がそう言っていると、自称神は興味深そうにこちらを見てきた。

「そうか。君は、バカテストの世界がいいんだね。2人ずつ同じ世界に送るなんて、今までなかったけど面白そうだからいいか。それじゃ、送るよ」

神がそう言っていると、僕の体は光始めた。

僕が意識を失いそうになったときに、神がこう言った。

「君には運動神経を死ぬ前の3倍っていう、スキルをつけておいたから。それと、最初は自分の家にいると思うけど、向こうに到着したら文月学園に向かってくれ。学校側にはちよっとした都合で遅れたという、うその情報を流しておくから。それじゃ、二回目の人生を楽しんできなよ」

次の瞬間、僕の意識は完全に飛んだ。

ってな理由で、今に至るわけなんだよね。うんうん。それじゃ、早速Fクラスに向かうとしますかな。

僕は軽い足取りでFクラスに向かった。僕がFクラスに着くと、教室から『大ありじゃあっ！』っという魂の叫びが聞こえてきた。早速、始まってな。僕は教室の扉を少し開けて、先生を手招きして読んだ。

おまけ もう一人の転生者（後書き）

自分は転生者が二人いるのが好きみたいです。
読んでくださった方、ありがとうございます。

第三問 宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？（前書き）

サブタイトルが微妙ですいません。他に思いつきませんでした。

第三問 宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？

【第三問】

門 以下の英文を訳しなさい。

This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「 *
x

」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

天宮龍人の答え

「Pardon？」

」

教師のコメント

訳『恐れ入りますがもう一度』聞き直さないでください。それに、問題用紙に書いてあります。

Aクラスへの宣戦布告^{せんせんぷく}。

それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がる。

最初の二つはともかく、最後の奴はなにを言っているんだ？ 姫路瑞希がFクラスにいるわけないだろうが。きっと、バカつていうよりは、頭もとい脳に大きな病気があるのかもしれないな。

まあ。確かに誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかだった。

文月学園に点数の上限がないテストが採用されてから4年が経過した（らしい）。

このテストには1時間という制限時間と無制限の問題数が用意されている。その為、テストの点数は上限がなく、能力次第で成績を伸ばすことができる（らしい）。

また、科学とオカルトと偶然により完成された『試験召喚システム^{しけんしょうかん}』

ム』というものがある。これはテストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を喚び出して戦うことのできるシステムで、教師の立会いの下で行使が可能となる（らしい）。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒のモチベーションを高めるために提案された先進的な試み。その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争。試験召喚戦争と呼ばれる戦いだ（らしい）。

その戦争で重要になるのがテストの点数なんだが、AクラスとFクラスの点数は文字通り桁が違う。正面からやりあったとしたら、Aクラス一人に対してFクラス三人でも勝てるかどうか。いや、相手次第では四、五人でも負けるかもしれない。ちなみに、全てに（らしい）とつけたのには理由がある。それは、俺はこちらに転生してきて一年しか経っておらず、しかも学校にもほとんど来ていなかったため、学校のことをほとんど知らないのだ。

「そんなことはない。必ず勝て」

そこまで雄二が言うと、教室を先ほど出て行った福原慎こと、二年F組の担任の先生が戻ってきた。

「えーいきなり出て行ってすみませんでした。それと、坂本君一巨席に戻ってください。転校生を紹介しますので」

福原先生がそういうと、教室の中がざわめき始めた。

まあ。無理もないだろう。今頃転校生が来るなんて、おかしいのだから。

俺がそんなことを考えていると、福原先生がその疑問を答えてくれた。まあ。納得はいかなかったが

「えー彼はちょっとした都合により、遅れて転校してきました。皆さん、仲良くしてあげてください」

小学生かよ！ 仲良くしてあげてくださいって！ まあ。クラスの皆はそんなことよりも、先生の“彼”と言う一言にがっかりしているが。さすが、Fクラス。俺も、実は読んだことはないが全く知らないわけではない。悪友がバカテスの話をたまあに、してくれるのだ。まあ。神のところに行ったときには、聞いていたことを忘れて

いたのだが。俺が覚えている話はこれだけだ。Fクラスには異端審問会ことFFF団があるつと。そして、俺も楽しそうなので入っている。ちなみに、団長が俺で副団長が須川だ。

俺がそんなことを考えていると、扉が開いた。

ガラッ

「えー彼が」

福原先生が言おうとしたところで、入ってきた転校生がそれを止めた。

「自分で言います」

「そうですね」

「僕の名前は桐谷強介。これからよろしく頼むツス」

…強介？ 桐谷強介？ そして、この喋りかた、あの桐谷強介なのか！

俺は転校生の顔を見た。その顔は俺が知っている、強介の顔と同じだった。

俺は思わず心の中で笑ってしまった。

ふ、ふはははははは！ 余計に面白くなりそうだぜ！

「えーでは、彼の席は…天宮君の隣が空いてますね。では、あそこに座ってください」

「はい。分かりました」

強介は俺の隣に、座った。

あれ？ あいつつて、あんな性格だったっけか？ まあ、いいや。

それに、あいつは俺のことに気付いてないみたいだ。余計に好都合。

「えーでは、坂本君話の続きをどうぞ」

福原先生がそういうと、雄二は再び教壇に向かった。

「あー話がずれたが、改めて言おう。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

そんな圧倒的な戦力差を知りながらも、雄二はそう宣言した。

空気も、先ほどのものに戻っていた。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけがないだろう』

『なんの根拠があつてそんなことを』

否定的な意見が教室中に響き渡る。

うん。当たり前だ。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃そろっている」

こんな雄二の言葉を受けてクラスの皆が更にざわめく。当たり前だな。

「それを今から証明してやる」

雄二はそういうと、順番に人物を紹介していった。

順番はこうだ。土屋康太つちや 姫路瑞希きのしたひでよし 木下秀吉 坂本雄二（全力を尽くすと言っただけ） 吉井明久よしいあきひさ & 天宮龍人。

今から軽く説明していこう。

一番最初の土屋康太。こと、寡ムツリ黙なる性識者だ。土屋康太という名前はそこまで有名じゃない。だが、ムツリ二という名前は別だ。その名は男子生徒には畏い怖ふと畏い敬けいを（俺は別だ）、女子生徒には軽蔑けいべつを以もつて挙げられる。

姫路瑞希はなんでここにいるのかが疑問だが、Aクラス並みの実力を持っている。

木下秀吉は演劇部のホープで、双子の姉である木下優子きのしたゆうこはAクラスだ。

坂本雄二は昔は神童と呼ばれていたらしい。そして、学習能力は低い。

そして、最後の俺と明久だが、俺はなんで最後に言ったのかを知りたい。

周りをよく見る。一気に土気が下がったじゃないか。

明久も俺と同じ感情を抱いたのか、雄二に言った。ちなみに、俺も言っっちゃった。

「ちよつと雄二！ どうしてそこで僕（俺）の名前を呼ぶのさ！（呼ぶんだ！）全くそんな必要はないよね！（ないだろうが！）」

『誰だよ。吉井明久と天宮龍人って』

『聞いたことないぞ。そもそも、このクラスにそんな奴いたのか？』

『そうか。そうか。あの二人は殺られたいらしいな。よし、殺つてこよう。』

俺が立ちあがった瞬間、横にいた奴が二人に言う。

『あ、おい！ 吉井はともかく、天宮のことをそんな風に言うとかやられるぞ！』

先ほどの二人は『あつ！』っと言っていたが、そんなこと知るか。それと、最後の奴は分かかってないな。“やる”の字が間違ってるぞ。

俺は二人のもとまで行くと、二人の手首を掴んだ。

『雄二。先に進めててくれ。俺はこいつらを締めつける。そして、終わったら最後に俺の名前を出したお前をボコボコにしてやる。』

俺はそう言い残して、教室を後にした。

S I D E 吉井明久

龍人が出て行った後に聞こえてきた『ぎゃあああああああ』とつという、悲鳴は聞かなかったことにしよう。

雄二は雄二で、やってもうたという顔をしていた。僕はここまで『やってもうた』って表情が似合う表情は見たことがない。

雄二は諦めたのか、一度咳払いをしてから話に戻った。

『そうか。知らないようなら教えてやる。こいつと龍人さんの肩書は《観察処分者》だ』

あ、言っちゃった。そして、余程後で龍人に殺られるのが怖いのである。雄二が人の名前を呼ぶときに『さん』を付けるなんて。それと、決して“やる”の字を間違えてるわけではないからね。

『それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

クラスの誰かがそんな致命的ちめいてきな台詞せしごを口にする。そう。本当に致命的な発言だ。

僕がじゃないよ。口にした人が致命的なだけで。しょうがないな。僕もクラスメイトが死ぬ姿なんて見たくないからね。一肌脱いであげよ。

「ち、違うよっ！　ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」「そうだ。バカの代名詞だ」

ああ。肯定しちゃったよ。ばいばい雄二。君が死んでも一週間は忘れないからね。

僕がそんなことを考えていると、龍人がタイミングよく入ってきて雄二と先に口にした人物を廊下に連れて行った。しばらくして、雄二の悲鳴が聞こえてきた。だが、その悲鳴も数分としないうちに消えた。本当に、雄二って学習能力ないよね。

S I D E 天宮龍人

俺は葬った雄二の代わりに教壇に立った。

「えー言いくいのだが、早速死者が四名出てしまった。これは、大変残念な出来事だ」

『龍人がやったのに、よく言うよな』

誰かがそんなことをつぶやいたのを俺が聞き逃すはずがない。

俺は持っていたカッターをそいつに当たるか当たらないかのところに飛ばした。カッターはそいつの頬をかすって、そのまま床に突き刺さった。

俺はその人物のところまで行き、頭を掻きながらカッターをとり再び教壇に戻った。

「いや、その人物すまなかった。手が勝手に動いちゃった」
教室中の空気が凍りついた。

「よし。静かになったところで、本題に戻ろう。確かに俺と明久は『観察処分者』だ。それは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しむ。つまり、俺と明久はおいそれと召喚できないんだが皆も『観察処分者』の役割は知っているよな？」

「教師の雑用係だろ？ 力仕事とかそういう類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合の一人のクラスメイトが言った。」

「そうだ。本来は試験召喚獣は物に触ることができないがな。まあ、いま重要なのはそっちじゃないがな。いま重要なのは雑用係をやっていたということだ。俺達は二年になったばかりで、試験召喚獣の操作の仕方もとい、操り方をよく知らないだろう？ だが、明久はそれを大量にやってきたので、力がない分は技量でカバーできる。俺もそこそこはできるので、『観察処分者』だから役に立たないということはない」

S I D E 桐谷強介

「そうだ。本来は試験召喚獣は」
「僕は卓袱台に突っ伏しているの、今喋っている奴の顔は分からない。でも、原作が崩壊しているような気がする。僕が来たからって、そんなに早く原作が崩壊するのだろうか？ さっきの雄二やクラスメイト三人にしてもそうだ。原作ではこの時点で誰もやられないはずだ。今後の為に何かを考えておいた方がいいかもしれない。そんなことを思う僕であった。」

S I D E 天宮龍人

「つてなわけだ。皆、再び問う。この境遇は大いに不満だろう？」
『当然だ！！』

「ならば、全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！ Aクラスの個人エアコンではなく、システムデスクだ！」

ヤバイ。本音が漏れた。俺も少しぐらいは台詞を知っているので、今のところは原作崩壊はしていないはずだ。多分……。

『うおおーっ！！』

「お、お……」

クラスの雰囲気^おに圧されたのか、姫路までもが小さく拳^{こぶし}を作り掲^かげていた。だから、何故いる。

S I D E 吉井明久

「よし。意見はまとまった。よし、明久。Dクラスへの宣戦布告の死者になつてくれ。無事大役を果たせ！」

行き成り龍人がそんなことを言い出した。大役というなら自分で行けばよいのでは？ それに、“ししや”って普通『使者』って書くよね？ 龍人のは“死者”になっているのは間違っただけだよな？

「……下位戦力の宣戦布告の使者^あってたいてい酷い^{ひど}目に遭^あうよね？」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙^{だま}されたと思つて行つてみる」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思つてるんだ」

わずかな逡巡^{しゅんじゆん}すらなく、力強く断言する龍人。

そつだ。龍人はジョークを言つても嘘うそだけはつかない男だ。多分だけ。

「大丈夫、俺を信じる。俺は友人を騙だますような真似はしない」
さらに追い打ちの一言。

やれやれ、こいつはなんだかズルいなあ。……そう言われたら、信じるしかないじゃないか。

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

クラスメイトの歓声と拍手に送り出され、僕は使者らしく毅然きぜんとした態度でDクラスに向かつて歩き始めた。

S I D E 天宮龍人

しばらくして、明久が「騙だまされたあつ！」と言いながら教室に転がり込んできた。

「やはりそうきたか」

俺が平然に言い放つと、明久は「ブチ殺すぞコラ」っていう目で俺のことを睨にらみつけてきた。

「やはりつてなんだよ！ やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だろ？ それにさつき、わざと『使者』のことを『死者』つて言ったの気付かなかったのか？」

「気づいてたよ！ でも、間違えたただけかと思ってたんだよ！ それより、少しは悪びれるよ！」

第三問 宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。原作より進行速度が遅いですが、ご了承くださいされば幸いです。

第三問 屋上にて（前書き）

都合により、原作で第一問だった問題を今回載せました。

原作では屋上シーンは第三話めなので、今回も第三話と書きま
した。

では、楽しく読んでいただければ幸いです。

第三問 屋上にて

【第四問】

門 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例……ジュラミルン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（すごく強い）』

教師のコメント
すごく強いと言われても。

天宮龍人の答え

『問題点……爆発したと思ったら、アフロになっていた点
合金の例……錬金術で作ったもの』

教師のコメント

ある意味では一番の珍回答です。

僕の名前は桐谷強介。ただいま、屋上にいます。なぜかって？
早速仲良くなった明久達と昼食を食べるためだよ。でも、早速死亡
フラグが舞い込んできました。

「あ、いえ！ その、皆さんにも……」

これを聞いた瞬間、僕は後悔した。明日友達になればよかったか
もと。原作を知らない人はこれがどこが死亡フラグなんだろう？
っと、思つかもしれない。なので、一回ここまでの流れを説明した
後に説明しよう。

先ほど姫路が明久にこう言ったのだ。「……あの、良かったら私
がお弁当を作ってきましたようか？」

それに対して島田美波しまた みなみが姫路にこう言った。「……ふーん。瑞希
って随分優しいんだね。吉井だけにつくってくるなんて」っと。そ
の後、あの死亡フラグの言葉に行くのだが。

ここで、説明だ。とにかく、姫路瑞希の作る食べ物はずべてまずく
なるのだ。いや、まずいなんて物じゃない。あれを食ったら、死ぬ
かもしれないほどの凶器だ。

なのに、そのきつかけを作った明久は先ほど、天宮ってやつが一瞬に死神のような服を着て隅に連れて行った。今では、クラスのほか全員が死神の服に着替えている。

うん？ 天宮って？ あの、天宮か？ そんなわけないか。

S I D E 天宮龍人

俺は木で作った十字架に張り付いている明久に木槌をたたきながら告げた。

「吉井明久。死刑」

「ちよ、ちよと待ってよ！ いつもだったら『これより異端審問会を行う。罪状、被告 吉井明久は、女の子にお弁当を作ってもらうというFFF団の血の盟約に背く行いをした。相違はないか？』とか聞くのに、なんで今日だけ、行き成り『死刑』なんだよ！」

「皆。やってしまえ」

「ちよ、無視しないでよ！ なんでいきなり死刑なのさ！ ちよと、皆もカッターは下ろして。僕は決定的まじゃないからね。ねーだから、投げようとしないでよ！」

俺はカッターを構えている全員を止めた。

「おい。待て。間違っているぞ、皆」

明久は俺のその言葉にホツとしていた。

「須川副団長。ちよと、カッターを貸してみろ」

「分かりました」

俺は須川から受け取ったカッターを明久にギリギリ当たらないところに投げた。

カッターは明久の耳のすぐ近くに刺さった。

「皆。最初は恐怖を堪能させるのが先だろう？」

FFF団の全員の声が重なった。

『』なるほど。さすが天宮さんですな！』』』』

「い、いや、皆』なるほど』じゃないよ。誰でもいいから助けて

よー」

俺達がこんなことをしている間も、遠くにいる雄二は何故、Dクラスなのかということや作戦を説明していた。ちなみに、俺はもう聞いてある。

「よし。皆。狙いは定めたな？ 俺が三つ数える。三つ数え終わったら、明久に当たらないギリギリのところに投げろ。ちなみに、間違っても明久には当てるなよ」

『大丈夫です。間違っても一発では仕留めません』

誰かがそんなことを言うと、明久が慌てたように言った。

「ちよ、一発では仕留めない』ってどうということさ！ 明らかにおかしいよね！」

俺達がそんなことをしている間に、昼休みが終わってしまった。

ちなみに、何故Dクラスなのかということと、今回の作戦のことを明久には後で説明をしておいた。

第三問 屋上にて（後書き）

今回は字数が少なくなってしまう、すいません。誤字脱字などがありましたら、指摘してください。

第四問 Dクラス戦（前書き）

いよいよ試験召喚戦争が始まります。

第四問 Dクラス戦

【第四問】

門 以下の問いに答えなさい。

『(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、?
?の中から選びなさい。

$$? \sin A + \cos B \quad ? \sin A - \cos B$$

$$? \sin A \cos B \quad ? \sin A \cos B + C$$

$$O \sin A \sin B \quad 『$$

姫路瑞希の答え

$$『(1) X = \pi / 6$$

$$(2) ? 『$$

教師のコメント

そうですね。角度を『』ではなく『』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

$$『(1) X = \pi / 6$$

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

『(2) およそ?』

教師のコメント

先生は今までたくさん生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

桐谷強介の答え

『(1) 1』のどれか』

教師のコメント

先生は君の回答に驚かされました。そして、後で職員室に来るよ
うに。

天宮龍人の答え

『(2) ?のどれか』

教師のコメント

先生は今までたくさん生徒を見てきましたが、選択問題で君の
ように答える人はいませんでした。君も後で桐谷君と一緒に職員室
に来てください。

俺と姫路は今、回復試験を受けている。ちなみに強介は先ほどま
で俺達と同じように回復試験を受けていたが、先生に土下座をして
現代国語を5分にしてもらっていたので、先に試験を終わったよう

でどこかへ吹っ飛んでいった。

昨日勉強しただけあって、現代国語と数学それに物理はスラスラ解ける。あくまで勉強したのは現代国語と数学それに物理だ。しかも、大体ここが出るかと思っただけだ。今回はその予想が当たったから解けているようなものだ。

俺は先生に頼みこんで、この三つの科目を制限時間20分ずつにしてもらった。60分経って俺は回復試験を終了した。

「姫路。先に行ってるからな。お前もがんばれよ」
俺は姫路にそう言い残し、部屋を出て行った。

俺が明久達に合流する為に廊下を走っていると、放送が流れた。

《船越先生、船越先生》

この声は須川か？

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

こいつはなにを言っているんだ？

《生徒と教師の垣根かきねを越えた、男と女の大事な話があるそうです》
こいつ、脳に大きな障害があるかもな。

しばらくしてから、廊下に「須川ああああああっ！」ツという声が響き渡った。

S I D E 桐谷強介

発見した。僕はDクラス代表の平賀源二ひらが《げんじ》の姿をとらえた。ちなみに放課後だ。

原作では姫路がやっつけるんだけどね。一度は自分で代表を仕留めたいと思うものだ。

僕は平賀の近くに近寄った。平賀は俺の方に一度視線を向けたが、なにも無かったかのように視線を戻した。

まあ。僕は転校生だから、僕のこと自体知らないのであろう。なら、チャンスだよな

僕は一気に平賀の隣に行き、言い放った。

「Fクラス桐谷強介、Dクラス平賀に現代国語勝負を申し込む」
平賀はいきなり言われたことに、何が起きたか分かっていなかった為に、言ってしまったのだ。

「……はあ。どうも」

「では、試獣召喚」

『Fクラス

桐谷強介

VS

Dクラス

平賀源二

現代国語

400点

129点
『

「え？ あ、あれ？」

戸惑いながらも平賀は召喚獣を構えさせ、相対する。

僕の召喚獣は一瞬にしてDクラス代表を倒した。

S I D E 吉井明久

っへ？ 強介って、頭良かったの？

僕は強介と平賀君の点数を見ていた。平賀君も点数はいいけれど、強介の点数は異常だった。

なに、あの400点っての？ 何かの間違いだよな？ そうだよな？

僕の頭の中では処理しきれなくなっていた。

俺は飛び上がるようにして、起き上がった。

俺は腕時計に目をやった。

…もう、放課後じゃねえかー！！ やっべえ。昨日睡眠時間を削って勉強していたのが裏目に出たか？にしても、ここどこだ？

俺はあたりを見渡した。そこは、見覚えのあるものが多くあった。なるほど。俺の家で間違いないな。眠いからといって、勝手に家に帰ってきてしまうとは恐ろしいな。まあ。Dクラスには勝っているだろう。明日詳しく聞けばいいか。

俺は再び眠りについた。

第四問 Dクラス戦（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございます。感想などがありましたら、お願いします。

第五問 Bクラス戦（前書き）

投稿が遅れましたが、楽しく読んでもらえれば幸いです。

第五問 Bクラス戦

門 以下の文章の（ ）（ ）に正しい言葉を入れなさい。
『光は波であつて、（ ）（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント
よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント
君の回答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント
先生もRPGは好きです。

桐谷明久の答え

『サツパリワカリマセン』

教師のコメント

桐谷君、吉井君に名前を変えようとしたみたいですが、苗字は変わってません。それと、後で職員室に来るように。

吉井明久天宮 龍人の答え

『闇の波』

教師のコメント

名前を変えないでください。なんであなた達は吉井君に名前を変えようとしているのですか？ 上に書いてなかったら天宮君だと分かりませんでした。そして、また桐谷君と一緒に職員室に来てください。

今はもう、Bクラス戦が始まっている。

だが俺は今、屋上にいる。理由は簡単で今日は出番がないと思ったからだ。ついでに、強介は再び回復試験を受けに行っている。この間は現代国語しか受けてなかったようで、雄二から他のも受けるように言われたらしい。

はあ。眠。今日は、放課後まで寝ていよう。

俺はその後、深い深い眠りについた。

俺は起き上がった。

ふあゝ。よく寝てた。今は何時だ？

俺は腕時計に目をやった。時刻7時30分（注 午前中だ

「おらー」

龍人の召喚獣がBクラスにつながる壁を攻撃した。壁は予定よりも早く、壊れてしまった。

ドゴオツ

豪快な音をたて、Bクラスにつながる道が生まれた。

「コンなっ！！」

Bクラスにいた雄二と根本が驚きの声をあげた。

「龍人！！ 明久！！ 早すぎだ！！」

雄二が何やら叫んでいるが、そんなの関係ないな。

俺は根本にビシッ！と、なりそうな勢いで、指を突き出した。

そして、Fクラスのメンバーに叫んだ。

「知っているか！！ 根本がCクラス代表の……と、付き合っているのを！！」

後ろから、『Cクラス代表の名前、忘れてでしょ』と聞こえてきたが、そんなのは気にしない。なんせ、FクラスのメンバーをFF F団にする事が出来たのだから。

「な、何だとー！ー！ー！ー！ー！！」

「根本恭二、許すまじ！！」

Fクラスメンバーが殺気という名の武器を、全身から溢れ出していた。いや、凶器かな？

FクラスメンバーがBクラスの連中に突撃し始めた。近衛部隊このえもそちらに加勢していて、根本はガラ空きだ。

俺は根本のもとまで走り、告げた。

「Fクラス、天宮龍人がBクラス根本恭二に英語勝負を申し込む！！」

「ふん。いいだろ。こっちは、キサマの事をよく知ってるんだぜ。テストをサボり、0点になって、Fクラスに入っただって事も、頭が悪いつて事もな」

「ふん。お前、さつきから出ている、点数が見えないのか？」

根本が出ていた点数に視線を向ける。そこには、500の数字が

出ていた。

根本は顔をひきつらせ、驚いていた。

「ば、バカな!!!」

「終わりだ、根本!!!」

俺の召喚獣が、根本の召喚獣を一刀両断にした。言い忘れていたが、俺の召喚獣の装備は結構豪華だ。これは、のちに説明しよう。今ここに、Bクラス戦は終結した。

第五問 Bクラス戦（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございました。

第六問 Aクラス戦

【第六問】

問以下の問いに答えなさい

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『C?H?』

教師のコメント

簡単でしたかね

天宮龍人の答え

『C?H?』

教師のコメント

カンニングでもしましたか？

なんて、それは流石にないですね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『B・E・N・Z・E・N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

桐谷強介の答え

『BEN + ZEN』

教師のコメント

あなたも後で職員室に来てください。

「では、両名友準備はいいですか？」

今日はここ数日の戦争で何度もお世話になっている、Aクラス担任かつ学年主任の高橋先生たかはしが立会人たちあいじんを務める。今日も知的な眼鏡めがねとタイトスカートから伸びる脚あしがとても綺麗きれいだ。などと、明久たちなら考えるかもしれないが、俺はどうでもいいと思う。

今から俺達はAクラスに挑むのだ。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

向こうは秀吉の姉、木下優子さん。

対するこちらは、

「ん？ 早速、僕の出番みたいだな」

バカの強介だ。ちなみに順番を言っておくと、強介 俺 ムッツ
リーニ 姫路 雄二となっている。どうや、Dクラス戦とBクラス
戦の時の点数が高かったので、俺と強介を入れたみたいだ。

「えーでは、科目は何にしますか？」

「世界史で」と、木下姉が答える。

「では、それでよろしいですか？」
「もちろんさ」

ほう。あれだけ自信満々に答えるってことは、強介は結構点数を取れてるのか？

『Aクラス 木下優子 VS Fクラス』

桐谷強介

世界史 400点 VS 20点『』

「……はぁ……！！」「……」
全員が驚いている。つま、当たり前か。

「うるさいな！！ しょうがないだろ！ 社会は得意じゃないんだよ！！」

「だったら、受け入れるなよ！！ バカが！！」「バカじゃの」「バカだね」「バカよ」などと、皆から罵倒はとくされる。それに対して、強介は反論する。

「バカバカうるさいわ！！」
そんなコントみたいな事を行っている隙に、木下姉が強介の召喚獣を倒してしまった。

「……っあ」「……」

間抜けに口を半開きにしていると、高橋教師が告げた。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Aクラスからは佐藤美穂さとうみほって奴か。ふん。『物理』を選んだのを後悔させてやる。

「よし、お前の实力を見せてやれ」

「しょうがねえな。俺の实力見せてやるよ」

『Aクラス 佐藤美穂 VS Fクラス』

天宮龍人

物理 389点 VS 0点『』

「っは？ なんで俺の点数0点なんだ？」

「そういえば、回復試験を行った時に物理のテストで名無しがあ

りましたね。あれって、天宮君のでしたか」

「っな！」

待てよ。あの時テストを受けてたのは、俺と姫路と強介だけだったろうが。名無しでも、文字を見れば普通分かるだろ。

「今回は、Aクラスの不戦勝ってことで。では、三人目の方どうぞ」

勝手に話を進められ、俺は負けという事になってしまった。俺が下がるのと同時に、ムツツリー二が前に出た。

「おい、バカ二人、そこに正座しろ」

俺が戻ると、行き成り恭介と一緒に正座する羽目になった。まあ、当たり前だが。

「お前らは五戦中の二戦を無駄にした。それがどういう事か分かってるのか？」

その問いに、俺は立ち上がって答えた。

「まあ、雄二よ。ムツツリー二と姫路はどうせ勝つんだろ前から、お前が負けなければいいだけだろ。神童と呼ばれた雄二さんよ。それとも、自分がAクラスに挑んだくせに勝つ自信がないのか？」

S I D E 吉井明久

雄二が戻ってきた二人を正座させていた。なんにも、そこまでやらなくてもいいと思うけどな。

二人を正座させた状態で雄二が口を開いた。

「お前らは五戦中の二戦を無駄にした。それがどういう事か分かってるのか？」

まあ、確かにそうだけど。そこまで責めなくてもいいんじゃないかな？

そんな事を考えていると、龍人が立ち上がり、雄二に告げた。

「あのな。ムツツリー二と姫路はどうせ勝つんだろ前から、お前が負けなければいいだけだろ。神童と呼ばれた雄二さんよ。それ

とも、自分がAクラスに挑んだくせに勝つ自信がないのか？」

雄二が後ずさった。

流石は龍人。あの雄二を圧倒してるな。

「ま、まあ、そうだが……」

「だろ？ だったら、俺達が負けても平気じゃないのか？」

「……だが、俺は保険つてもものも必要だと思っがな！！」

あ、雄二が強がってる。

「ああ、確かに保険は必要かもな。でも、霧島の弱点を知っていて、お前は勝負を挑んだんだろ？ だったら、その時点で保険はすでに使ってるんじゃないのか？ ええ、雄二よ」

なんか、言ってる事はめちゃくちゃだけど、雄二はそれでも後ずさってるよ。『それとこれは別だろ』って、言えがいいと思うけどな。龍人の怖さで言えないらしいな。

「うっ」

とうとう言葉に詰まったようだ。今度、雄二に利用されそうになったら龍人に説得をしてもらうように頼もうかな。

「……あれ、何やってるんだ？」

不意に声が掛けられたので、そちらに振り返る。そこには、勝負から帰ってきたムツツリー二がいた。

「あ、お帰り。あれはね、蛇に睨まれた蛙を雄二が演じてるんだよ」

嘘は言っていないと思うよ。嘘はね。

「……姫路が戦ってる」

僕はムツツリー二の視線を辿って行った。そこでは、姫路さんが久保君と戦っていた。

S I D E 天宮龍人

「雄二、他に言う事はあるか？」

「い、いや、無い」

「そうか。だったら行って来い。とっくに、ムッツリー二と姫路の戦いは終わってるんだからよ」

「ま、マジか。行ってくる」

雄二が前に出て行った。

「教科はどうしますか？」

Aクラスは騒いだりしていない、か。その余裕がいつまで続くかな。

「教科は日本史、内容は小学校レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

雄二の宣言で、Aクラスにざわめきが生まれる。

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

「わかりました。そうなる問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

一度ノートパソコンを閉じ、高橋教師が教室を出て行った。

「雄二。俺はお前を信用してるぞ。俺は実力を出せなかったが、

お前は出せるだろ？ がんばって来いよ」

「分かってるって」

しばらくしてから、高橋教師が戻ってきて、雄二と霧島は教室を出て行った。

「皆さんはこのモニターを見ていてください」

高橋教師が機械を操作すると、壁のディスプレイには視聴覚室の様子が映し出された。

先に霧島が席に着き、続いて雄二が席に着く。

しばらくすると、あの問題が映し出された。

() 年 大化の改新

「あ……………」

出た。これで、俺達は勝ちだな。

周りからも喜びの声上がる。

「システムデスクに！」

これで、快適な環境で寝てられるんだな！

「最下層に位置した俺らの、歴史的勝利だ！」

「うおおおお！」

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

VS

《Fクラス 坂本雄二 53点》

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

第六問 Aクラス戦（後書き）

木下優子の世界史の得点は想像で書いたものです。
読んでくださった方、ありがとうございました。

第七問 『ねぎ味噌牛カルピサンドウィッチ』って美味そうじゃね？（前書き）

タイトルが長くなってしまいました。このタイトルはなにも思いつかなかったのでつけただけです。気にしないで読んでください。

それと、実際にこんな商品はないと思います。自分が知らないだけで、現実にあつたらすいません。

第七問 『ねぎ味噌牛カルピサンドウィッチ』って美味そうじゃね？

【第七問】

問 次の（ ）（ ）に正しい年号を記入しなさい。

『（ ）（ ）年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

桐谷強介の答え

『「もう、私達は会えないの？」

「そんなに悲しい顔をしないでくれ、ジヨステイ。願いつつと会えるんだから」

「いつ、会えるの？ ねえ、答えてよ」

「それは僕にも分からないよ。でも、きっと会えるから。待っていてくれ。必ず、戻ってくるから」

その後、ジヨステイは待ち続けた。しばらくしてから男は戻ってきて

たのだった。その年は1549年だったそうだ』

教師のコメント

先生もこの回答には言葉を失いました。ジョステイとは誰ですか？
それと、偶然とは怖いですね。

天宮龍人の答え

『キリスト教は未来から来たので、正しい年号は分からない』

教師のコメント

ロマンはありますが、キリスト教は未来から来ていません。

「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれこんだ俺らに対する高橋教師の締め台詞。
ええ、わかってます。俺らの負けだ。完膚かんぷなきまでに。

「……雄二、私の勝ち」

床に膝をつく雄二に霧島さんが歩み寄る。

「……殺せ」

「「「良い覚悟だ、殺してやる！ 歯を食い縛れ！」」」

「吉井君、天宮君、桐谷君、落ち着いてください！」

姫路に止められてしまった。しかも、明久だけに抱きついていてる。
流石と言えば流石だな。

「だいたい、53点ってなんだよ！ 0点なら俺みたいに名前の
書き忘れとかも考えられるが、この点数だと」

「いかにも俺の全力だ」

「「そうか。なら、歯を食い縛れ」」

「この阿呆あほうあーつがー！」

「アキ達、落ち着きなさい！ アンタ達だったら30点も取れないでしょうが！」

「「それについては否定しない！」」

いや、勉強すれば取れるぞ。だが、今は勉強してないから否定できない。

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「「くっ！ 何故二人は止めるんだ！ この馬鹿には頭をかち割るという体罰たいばつが必要なのに！」」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

姫路が必死に俺達を止める。

つち。命拾いしたな雄二。せいぜい、姫路の優しさに感謝するんだな。だが、次はこうはいかないぞ雄二。次は今回の分も含めて罰してやる。初めに全ての爪を抉り取り、その次に全ての指を切断。続いて、目玉を取り出すという体罰。最後に止めとして、頭をかち割ってやる。

「おい、天宮。皆どっかに行つたぞ」

「あつ！」

明久達がいなくなっていた。

「はあゝ。明久がいなければ面白くないのにな。今日は強介で遊ぶかな」

「なんで僕なんでよ って、今気付いたけど、天宮龍人じゃないか！ 転生する前に悪友だった！」

今頃気づいたのかよ。全然変わってないな。

「お前、気付くの遅すぎだろ。俺はお前が転校してきた時から気付いていたのによ」

「だったら、教えてくれよな！ 僕一人バカみたいじゃないか！」

「だって、知らせない方が面白いじゃん」

「あんた、相変わらずですね」

「お互い様だがな。それより、俺達も遊びに行こうぜ」
「だね。久々にゲーセンでも行く？」
「いいな、それ」

俺達学校を後にして、ゲームセンターに向かった。

「畜生。全敗かよ。龍人は相変わらず強いな」

「そうか？ お前が弱いだけだと思っただが」

「いや、龍人は強いよ。だって、僕は一撃も当てられなかったぞ？」

それが弱いつて言うんだよ。一撃も当てられないって、どんな腕してるんだ？

「それはそうと、腹減った」

「だったら、そのコンビ二にでも行くか？」

「そうしょ」

俺達はコンビ二に向かった。

入ると同時に『いらっしやいませ』と、言われた。この店はマネーがしっかりしてるな。

「なあ、なあ、これなんかうまそうじゃね？」

不意に強介が一か所を指さしながら、告げた。

俺は指の先にある商品に視線を動かした。そこには『極上牛カルビ！』 これを食って、うまいって言わない奴はどうかしてる！』の文字が書かれている弁当が置いてあった。

「確かにうまそうだが、俺はこっちの『ねぎ味噌牛カルビサンドウィッチ』でいいや」

「ずいぶんおもしろい名前だね」

「だろ？ つつか、さっさと買って行こうぜ」

「了解」

俺達は品物を買って、外に出た。出ると同時に後ろから『ありが

とうございました』と聞こえてきた。本当にマナーがいいな。

しばらく歩いてみると、不意に声が聞こえてきた。

『私たち、急いでるんだけど』

『そう言うなって、帰りは送ってってやるからさ。まあ、帰りは明日になるかもしれないけどさ』

『いやだから、ボクたち急いでるんだけど』

『そーいうなっての。兄貴がせっかく誘ってくれてるってのによ。』
などと。何だ、ナンパか？ どの世界にもああいう輩はいるんだな。困ってるし、助けてやるかな

「おい、強介。お前、缶コーヒー二つ買ったろ？ 一つよこせ」

「はいよ」

俺は強介から缶コーヒーを一つ受け取った。

「じゃー僕は、左のピアスしてる男を狙うから、龍人は右の男を狙ってくれよ」

「了解つと。強介、後れをとるなよな」

「分かってるよ。じゃ、せーのー!!」

俺達は同時に缶コーヒーを男達に投げた。缶コーヒーは見事に、男の後頭部にヒットした。

「やりー」

「おい、強介、あいつらがこっちを睨んでやがる、逃げるぞー!!」

「ほいよ」

俺達は一目散に走り出した。後ろからは、『まてや、このクソガキー!!』 『無事に帰れると思ってんじゃねーぞー!!』 などと聞こえてきたが、全て無視した。

SIDE 二人の女子

「先の、赤い髪の少年が天宮君でその横にいたのは桐谷君じゃなかった？」

「ボクもそう見えただけど、よく分からないや」

「うん。今度聞いてみる？」
「そうじゃあか」

第七問 『ねぎ味噌牛カルピサンドウィッチ』って美味そうじゃね？（後書き）

言い忘れていましたが、天宮龍人の髪と瞳は赤色です。自分はこ
ういうキャラが好きみたいです。

読んでくれた方、ありがとうございます。

過去断片へパーストピース 1 桐谷歌織

「ぜえぜえ。疲れた」

あの後、ナンパをしてた輩から逃げるのが大変だった。後ろ振り返ってみたら、人数が増えてるんだからな。なんて奴らだ。高校生二人に二人じゃ戦えないのかったの

「ああ、マジで疲れた!!」

俺は倒れる様にして、ベッドに横になった。

「はあく。にしても、強介の奴、気付くの遅すぎだろ。そういや、あいつはどこも変わってなかったけど、あの性格も直ってねーのか？」

あれは、中学生の頃だったか？

「強介、お前の妹イジメられてるんだってな？」

「そうだけど、それがどうかしたのか？」

「って事はお前、知らなかったってわけじゃないんだな」

「だから、それがどうしたんだって？」

俺は気付かない間に勢いよく席を立ちあがり、強介の胸倉を掴んで叫んでいた。

「お前、助けようとか思わないのかよ!!」

強介は俺の手を振り払いながら告げた。

「そりゃー助けようと思ったさ。でも、それじゃ、あいつの為になんないだろ？ この先、もっと辛い事があるかもしれない。苦しい事があるかもしれない。その時、僕が必ず助けられるって保証はないだろ？」

龍人は歯を噛み締めた。

ギリリ。

確かにこいつの言っている事の方が正しい。でも、それでも、許せなかった。自分の妹がイジメられてるのに、助けに行かないなんて。

こいつには俺の過去を話した。だから、分かってくれてるもんだと思ってた。

「お前には俺の過去を話したよな？」

「ああ。聞いたよ。龍人の妹は、体が弱いのに正義感が強かったんだろ？ それで、ある時事件は起きた。正義感が強い為に友達が無理矢理、学校のプールに5分間入れと言った。それを正義感の強いお前の妹は、代わりに自分がやると言い出した。そのせいで、高熱を出して……亡くなっちまったって話しだろ？」

「そうだ。その話を聞いたお前は、自分の妹を助けようと思わな
いのか？」

「僕の妹は体が弱い訳じゃないからね。龍人とは違うし……」

「ツチ。そうかよ。お前が、そんなに最低な奴だとは思わなかった。分かったよ。お前は、助けに行く気ないんだな？ だったら、俺が助けに行つてやる！！」

俺は強介から妹の小学校を聞いていた為、学校が終わるとすぐにその小学校に向かった。

俺が小学校に続く道を走つてると、近くの公園から声が聞こえた。

『なあ、兄貴。今日はどんな方法でイジめるんだよ？』

『そうだな。今日は本人に選択してもらおうぜ。一つ目は、その木にある蜂の巣を壊すで。二つ目は、俺達にボコボコにされるつてのどうだ？ なあ、本人はどつちがいい？』

『私は、どつちも嫌だ』

最後の声に俺は聞き覚えがあった。強介の妹だ。

俺は公園に飛び込んだ。すると、強介の妹の他に小学生が五人と図体のでかい奴が一人居た。図体のでかい奴はきつと、高校生だ。俺は庇うようにして、強介の妹、桐谷歌織かおりの前に出た。

「おい、ためーら。さっきの会話からして、お前達がイジメてる

奴で間違いないんだな？」

高校生はニヤリと笑い、告げた。

「ああ、そうだぜ」

龍人は心から叫んだ。

「何でこんな事するんだよ！！」

高校生は一人の小学生を指差しながら告げた。

「こいつと俺はな、家で虐待を受けてるんだよ。だから、そのストレス発散だ。なんか文句あるか？」

ブチッ。

龍人の中の何かが切れた。

「てつめー！！ ふざけてんじゃねーぞ！！」

龍人が叫ぶよりも早く、体が動いていた。龍人の拳が高校生の顔面に突き刺さった。

高校生は血の混じった唾を吐き捨てると、仕返しと言わんばかりに拳を龍人の顔面に突き刺した。

ここで、中学生と高校生の違いがでる。高校生の方は口の中が切れただけだったが、龍人は口の中が切れるだけでなく、鼻血を出し始めた。

鼻血が口の中に入り込み、鉄の味が口の中に広がる。口が切れた時の血だけだったら、少しの鉄の味だった。だが、鼻血も加わったので鉄の味はより広がったのだ。

龍人は血が混じった唾を吐き捨て、鼻血を袖で拭そでぬぐった。袖の一部が赤く染まる。

「ツペ。てめー後悔するぞ！！」

高校生はそれを鼻で笑い、告げた。

「やれるもんならやってみるよ。高校生でそいつをイジメてる奴は俺だけじゃないんだぜ？」

高校生が言うと同時に、木の後ろに隠れていた高校生がぞろぞろと出てくる。

「っな、てめー！ その人数で、たった一人の女の子をイジメて

たのかよー!!」

「ああ、そうだが。それがどうした？」

「このやるー!!!」

龍人の理性はそこで完全に途切れた。次に理性を取り戻した時は、地面に背中をくっつけ、空を見上げている状態だった。いつの間にか降り始めていた雨が、熱くなっていた俺の体を冷やす。

実に気持ちいい。でも、体のあちこちが痛かった。不意に、横に視線を動かすと、強介の妹の歌織が泣きじゃくりながら、謝っていた。

「うえーん。ごめんなさいごめんなさい。私のせいで、龍人のお兄ちゃんが怪我をおっちゃったんだよね。ごめんなさいごめんなさい」

俺は自由に動かない右手に鞭むちを打ち、やっとの思いで、歌織の頭に手を載せた。そして、そのままぐしゃぐしゃと撫でた。

「大丈夫だから。そんなに泣くなつて」

それでも、歌織は泣き止まなかった。俺はそんな歌織を撫でる事しか出来なかった。

それから数日後、強介からお礼を言われた。

「ありがとう。お前のおかげで、妹がイジメられなくなったって言った。分かったよ。僕は憶病なだけだった。だから、もしもまた、妹がイジメられてたら、僕が守るよ」

と、俺はその一言が聞きたかった。自分で助けるって言うてくれたことがともうれしかったのだ。それから俺達の絆はより深いものとなった。

あの時はあの一言が聞きたいだけだった。でも、本当にあいつの性格は直ったんだろうか？俺があの時妹を助けてなかったら、あいつが助けていたんじゃないだろうか？俺はあいつが臆病から抜け出すきっかけを、崩してしまっただんじゃないだろうか？

「ああ、もう！ 考えていてもしかたがねえ！！」

龍人は強制的に思考を遮断した。

「寝よ、寝よ」

龍人はシャワーを浴びてから、歯を磨くとベッドに横になり眠った。

過去断片へパーストピース 1 桐谷歌織（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございます。感想やアドバイスなどがあれば、よろしくお願ひします。

第八問 学園祭をめぐるといって思っている自分が、実行委員に選ばれる。いや

【第八問】

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『あなたが今欲しいものはなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良いかもしれませんね。写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

86

土屋康太の答え

『Hな本……そんな物ではなく、成人向けの写真集』

教師のコメント

書き直した意味はあるのでしょうか？ どちらも同じような気がします。

吉井明久

『カロリー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

桐谷強介の答え

『彼女』

教師のコメント

勝手に作ってください。

天宮龍人の答え

『霧島さんに頼まれたので、婚姻届』

教師のコメント

霧島さんに、気が早いと伝えておいてください。

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。

僕らの通う文月学園ふみつきでは、新学年最初の行事である『清涼祭』せいりょうさいの準備が始まりつつあった。

お化け屋敷の為に教室の改造を始めるクラス。焼きそばの為に調理道具を手配するクラス。この学校ならではの『試験召喚システム』しけんしょうかんについて展示を行うクラス。学園祭準備の為にLHRロンガーチームの時間は、どの教室を見ても活気が溢れている。あふ

そして、我らがFクラスはというと

「明久！俺に勝てると思ってるのか？」

「ふん。いくら龍人が凄いからといって、絶対に打ち取れない訳ではないんだよ！」

「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやるよ！」

準備もせずに、校庭で野球をして遊んでいた。

「言つたな！？ こうなれば意地でも打たせるもんか！」

ザツとマウンドを足で均し、ミットを構えている雄二のサインを待つ。神童とまで呼ばれるほどの頭脳を持った悪友の事だ、きつと龍人をうまく打ち取れるような指示を出してくれるに違いない。

『次の球は』

きた。雄二のサインだ。まず最初は球種の指示が来るようになってる。さて、何を投げればいい？

『カーブを』

ふむふむ。次の球はカーブを

『バッターの顔面に』

「それ反則じゃないの！？ しかも、それをやったら確実に龍人に殺されるよ！！」

確かに球が場外に飛ばされることはないかもしれないけど、代わりに僕の意識が飛んじやうよね！？

雄二の指示を無視して得意球を投げようかと思っていると、

「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか！」

「ヤバい、鉄人だ！」

S I D E 天宮龍人

良い所だったのに鉄人が来てしまった。

怒髪天をつく勢いで俺らの担任である西村教師（通称 鉄人）が校舎内から走ってきた。捕まったらヤツの鍛え上げられた拳でボコボコにされてしまう！ ここは何とか逃げ切らなければ！

「吉井！ 貴様がサボりの主犯か！」

「ち、違います！ どうしていつも僕を目の仇にするんですか！？」

明久が囷になっている隙に、逃げなければ。

「雄二と龍人です！ クラス代表の坂本雄二と天宮龍人が野球を提案したんです！」

つな、あのバカ、なんて事を。

「全員教室へ戻れ！ この時期になってもまだ出し物が決まっていないなんて、うちのクラスだけだぞ！」

魂まで届きそうな鉄人の恫喝どっかつが響き、俺らは小汚い教室へと連れ戻されてしまった。

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃならない時期が来たんだが」

野球を中断された後、Fクラスの代表である雄二は床にごさを敷いて座る俺らを見下ろしながらそんな宣言をしてきた。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

あいつ、仕事がめんどくさいからって他人に押し付けるつもりだな。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田しまだということでもいいか？」

「え？ ウチがやるの？ うん……、ウチは試験召喚大会に出るから、ちよつと困るかな？」

突然の指名に目を白黒させているのは、ドイツ帰りの帰国子女である島田美波だ。気の強そうな目とポニーテールが特徴の女子だ。

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんの方が適任なんじゃないの？」

「え？ 私ですか？」

姫路が小首をかしげていた。それはそつだ。行き成り話題が降られたんだから。

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタイムアップになる」

眠たげに返事をする我らがクラス代表。

その後色々となり、結局美波が実行委員になった。次は副実行委員を決めるみたいだな。

『吉井が適任だと思う』

『やはり天宮がやるべきじゃないか？』

誰だ。俺の名前を挙げた奴は。

『姫路さんと結婚したい』

そうか。お前は一度、病院に行つて来い。

『ここは桐谷にやつてもらつた方が』

今の奴はナイスだ。

その後結局、美波が明久を選び、明久が俺を巻き込み、俺が強介を巻き込んだ為に副実行委員が何故か三人になった。

「ウチは議事進行をやるから、三人は板書をお願いね」

三人も板書はいらないだろ、と思いつながら一応ポロポロの黒板の前に立ち、かなり短くなったチョークを手取る。

「それじゃ、ちゃつちやと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば挙手してもらえる？」

美波が告げると、数名が手を挙げた。全員がやる気なしってわけではないみたいだな。しかも横を見てみたら、強介まで挙げてるし。

「はい、土屋」

「……………(スクツ)」

名前を呼ばれて立ち上がったのは、俺の友人の一人、土屋康太だ。本名よりもムツツリスケベが由来になったムツツリーニという名前の方が有名かもしれない。

「……………写真館」

「……………土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけどうん。確かに危ないかもしれないが、一応意見だから書いておくか。」

【候補？ 写真館 変態が集う部屋】

「次。はい、横溝」

「メイド喫茶」と言いたいけど、流石に使い古されていると思うので、ここは斬新ざんしんにウエディング喫茶を提案します」

ほ。なかなか面白そうだな。まあ、着るのは俺らじゃないが。

【候補？ ウエディング喫茶『女子の憧れ（？）』】

それにしても、書きにくいチヨークだな。

「さて、他に意見は はい、須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

そう言いながら須川が立ちあがる。

「中華喫茶？ チャイナドレスでも着せようっていうの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶やむちやを出す店だ。そうやってイロモノ的な格好をしてをして稼ごうってワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉があることからわかるように、こと『食べる』という文化に対しては中国ほど奥の深いジャンルはない。近頃、ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰たうたが世間では見られているが、本来食というものは

話の途中だが、書き始めよう。全部聞いているとらちが明かない。

【候補？ 中華料理『食の起源』】

と、書き終えたところで教室の扉がガラガラと音を立てて開き、筋骨隆々のごつい身体とそれに見合った顔を持つ男が現れた。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです」

美波が言つと、鉄人はゆっくりと黒板に目をやった。

【候補？ 写真館『変態が集う部屋』】

【候補？ ウエディング喫茶『女子の憧れ（？）』】
【候補？ 中華料理『食の起源』】

「……補習の時間を倍にした方がいいかもしれんな」

なっ！ それはまずい！！ こうなったら、さつきから手を挙げている恭介に託たくそう！！

「待つてくれ。まだ、強介が手を挙げている。強介、お前の案を言うんだ！」

任せたぞ、強介。

強介は胸を張りながら告げた。

「僕は『合コン喫茶』を提案する！！ この喫茶は名前の通り、合コンをする喫茶だ。客はもちろん、僕らも合コン可能だ！！」
全てが終わった。このバカに託すんじゃないかった。

そんな事を考えていると、Fクラスが一斉に口を開いた。

『『『それだっ！！』』』

『それだっ！！』じゃねーよ。バカばかりだ。

「どうやら、補習の時間は三倍の方が良いらしいな」

その後も色々あったが、結局『中華喫茶』に決まったのだった。
ちなみに、俺はホールだ。

第八問 学園祭をめぐると思っている自分が、実行委員に選ばれる。一

読んでくれた方、ありがとうございます。

第九問 男子禁制の女子更衣室に入るのには、それ相応の覚悟が必要だ！！（前

この頃タイトルが、おかしくなってきました。そんなタイトルは
気にせずに本編を読んでください。

第九問 男子禁制の女子更衣室に入るのには、それ相応の覚悟が必要だ！！

【第九問】

以下の問いに答えなさい

『バトル三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア エストニア ラトビア』

教師のコメント

そのとおりです。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井明久

『香川 徳島 愛媛 高知』

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていない事に違和感を覚えましょう。

桐谷強介の答え

『彼女 嫁』

教師のコメント

.....もう、ほしいもののアンケートは
終わってますよ。

天宮龍人の答え

『巴国 ル国 ト国』

教師のコメント

マジメに答える気がありますか？

「つつか、ただの中華喫茶じゃアレだよな？ 久々にあれをやるか？」

「僕も考えてたよ。じゃ、当日に持つてくるっていう事でいいよな？ 久々だから」

「龍人、ちよつといいかな？」

帰りのHRホーラムも終わって放課後。とくに予定も無いので強介とくつちやべっていたところ、明久に声を掛けられた。その横には美波もいた。

「ん、何か用か？」

「用っていうか相談だよ。どうにかして、雄二を学園祭に引つ張りだせないかな？」

「うん。難しいかもしれないが、手がないわけじゃないぞ？」

「つえ！ 本当！」

「とりあえず、連絡を取るかな」

ポケットから携帯を取り出して、雄二の番号を呼び出す。教室の中にヤツの姿は見当たらないけど鞆はまだあるみたいだし、学校内にはいるだろ。つつか、見当たらない理由も大体分かるし。

Pr rrrと、呼び出し音が受話器から響く。

『もしもし』

「よう、雄二。霧島に追いかけてらるんだろ？」

『なっ！ 龍人、お前はどっかで見てるのか？』

そんな趣味はない。

「それよりお前、学園祭に出てくれないか？」

『ふん。やなことだ。勝手にやってるってんだ。それよりも、明久に鞆を持ってくるように言ってくれ！ 頼んだぞ！』

「おい。雄二？ 切りやがったか」

携帯電話からはプー、プー、という無機質な音しか返ってこない。

「雄二はなんて言ってた？」

「『鞆を持ってきてくれ』だってよ。霧島から逃げてるんだよ。つてなわけで、明久、強介行くぞ」

「ちよ、行くってどこに？」

「明久、お前も雄二が隠れてそんな場所ぐらい分かるだろ？」

明久は『あ、そうか』と言いながら着いてきた。

「『『やあ雄二。奇遇だね』』」

部屋の者陰ものかげで大きな身体を小さくしている雄二に話しかける。

「『………』という偶然があれば女子更衣室こういしつで鉢合はちあわせするのか教えてくれ」

雄二の言つとおり、ここは女子更衣室だ。雄二の性格だから、女子禁制の場所ではなく裏をかいて男子禁制の場所にいると思っってきたんだが、当たったらしいな。

「気にするな。ただの偶然だ」

「嘘をつけ。こんな場所で偶然会うワケが」
ガチャッ

音を立ててドアが開くと、その向こうには体操服姿の女子の姿があった。

「えーつと……あれ？ Fクラスの中でも問題児の四人？ ここ、女子更衣室だよな？」

「やあ木下姉。奇遇だな」

「秀吉の姉さんか。奇遇じゃないか」

「「本当に奇遇だね」」

「あ、うん。奇遇だね」

あつはつは、と爽やかに笑ってみせる。そうだ。偶然だ。

「先生！ 覗きです！ 変態です！」

「逃げるぞ明久、龍人、強介！」

「「了解っ！」」

更衣室の小さな窓から表に飛び出す。やっぱりごまかせなかったか！ まあ。当たり前だが。

「吉井と坂本だけじゃなくて、天宮と桐谷もだど!? またあの

四人かつ！」

「マズイぞ！ 鉄人の野郎だ！」

「とにかく走るんだ！」

上靴だけど、構わず外を突っ走る。相手は鉄人。捕まったら最後だ。

「見つけたぞ！ 四人とも逃がすか！」

後方から野太い声が近づいてくる。くそっ！ 流石はトライアスロンで鍛えてるだけあるな。もう追いついてきやがった！

「強介！」

「明久！」

俺らの合図を受け、二人は走りながら上着を脱ぐ。そして、その間に俺と雄二は先行する。

「そっちは行き止まりだ！ 観念して指導を受けろ！」

どンドン鉄人が近づいてくる。

「行け、強介（明久）！」

俺と雄二が手を組んで作った踏み台に二人は足をかけ、一気に飛び上がる。その瞬間に俺と雄二が勢いよく腕を跳ね上げたので、二人はなんなく開いている二階の窓に飛びつくことができた。

「くっ！ このバカども！ こういう時だけ無駄に運動神経を発揮するとは！」

舌打ちでもしそうな雰囲気鉄人をよそに、校舎に入った二人は脱いでおいた制服を窓から垂らす。

「よつと！」

「あらよつと！」

俺と雄二は壁を蹴って跳び、空中で俺が強介の制服を雄二が明久の制服を掴む。

「よいしよおつ！」

その瞬間に二人は一本釣り。ビツと制服から嫌な音が聞こえたが、俺らは無事に校舎内に侵入することができた。

『キサマら、明日は逃がさんぞ！』

流石の鉄人も独力で二階までは来れないようで、悔しそうな遠吠えが響いてきた。

「はあ……。俺まで悪評が増えちゃった」

「俺の方こそいい迷惑だ。お前らが来なければこんなことにはならなかったのに」

あ、そうだ。当初の目的を忘れてた。

「雄二、学園祭に出てくれよ」

「はあ？ なんてだよ」

「出てほしいから。つうか、雄二には拒否権はないぞ？」

「なんでだよ？」

龍人は不敵な笑みを浮かべながら告げた。

「断ったら、霧島の所へ連れて行くから。ちなみに、両手両足を縛って」

「なっ！ お前は鬼かよ！」

雄二が数歩後ろに下がる。

「さあ、どうする？ 出るか出ないか？ どっちだ？」

「うっ！」

雄二は一瞬言葉を詰まらせたが、すぐに口を動かした。

「分かったよ。出ればいいんだろ？ 出れば！？」

「はい、任務完了つと。明久、俺らは帰るからな。あれの練習を
したいからな。強介、行くぞ」

「ほいよ。じゃあな二人とも」

俺らはそう言い捨てる、強介の家に向かった。

「ふう。結構感覚は戻ったな」

「そうだね」

俺らは持っていたものを床に下ろした。

「あ、もうこんな時間じゃねーか。俺は帰るぞ」

「ほいほい。持ってくるの忘れるなよ？」

「それはお前だろ？」

俺は強介の家を後にして、自分の家に帰った。

シャワーを浴びて、カップラーメンを食い、歯を磨くとベッドに
ふらふらと倒れ、眠りについた。

第九問 男子禁制の女子更衣室に入るのには、それ相応の覚悟が必要だ！！（後

読んでくれた方、ありがとうございました。

過去断片へパーストピース 2 違い

龍人は練習が終わり、自分の家に帰った。それを僕は見送った。

この間、龍人と気付いたばかりけど全然変わってない事が分かって安心した自分がいる。その対照的に、うらやましいと自分がいる。あいつは本当にすごいよな。

僕は昔のことを思い出した。

中学二年の時の僕のクラスの委員長は、皆から嫌われていた。何事にもマジメで、サボっていたりふざけているといちいち注意してくる。皆も、委員長が正しい事は分かっているんだ。

そんな委員長がある時、プリントを教壇の周りにばら撒いた。誰ひとり手伝おうとしなかった。でも、龍人は違った。僕の横から委員長のもとまで歩いて行くと、一緒にプリントを拾い始めた。

龍人は全部集め終わると、トントンとプリントを揃え、委員長に手渡しながら告げた。

「お前、普段がんびりすぎなんだっての。少しは休めよな」

委員長はそれに対して、静かに頷いた。それを龍人は確認すると、僕の所まで戻ってきた。

「皆も薄情だよな。手伝ってやればいいのに」

龍人はそういうと、自分の席に着いた。僕はその言葉を聞いた時、自分に言われてるのかと思った。その時、胸にチクリとした痛みがしたのを今でも覚えている。

龍人は僕と同じ不良だ。でも、龍人の周りには絶えず人が集まっていた。勉強以外は何でもできる奴だった。と言っても、龍人は頭が悪いのでなく、勉強してないだけだ。

僕はそんな龍人がうらやましかった。僕もあんな風に来たらいい

いのにと、思う時が多くある。でも、思うだけで行動には移さなかった。いや、移せなかった。

自信がなかった。僕はスポーツは確かに得意だ。でも、皆をまとめる事ができない。些細な違いのようにも思えるが、この違いは大きい。

だから、僕は行動に移せなかったのだ。

いつもそうだった。僕は思うだけで、行動に移した事がない。そんな自分が嫌いだった。でも、今も直っていない。それも事実だ。

「はあく。本当に自分が嫌だ」

僕は大きな溜息をついた。

「もう、寝よう」

僕はシャワーを浴び、歯を磨くとベッドに横になり、眠った。

過去断片へパーストピース 2 違い（後書き）

文字数は少なくなってしまうましたが、感想などがあればお願いします。

第十問 Fクラスの営業妨害をすると、とんでもない交渉術が待っている！！

本当にタイトルがおかしくなってきたように感じますが、どうか指摘しないでください。

では、本編をお楽しみください。

第十問 Fクラスの営業妨害をすると、とんでもない交渉術が待っている！！

【第十問】

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の協調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのもを用意し裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを』

教師のコメント

裏面までびっしりと書き込まなくても。

吉井明久

『ブラジャー』

教師のコメント
ブレザーの間違いだと信じています。

桐谷強介の答え

『制服なんてどうでもいいです。だってそうでしょ？ 人間は中身なんです。制服がどんなに可愛くなくても、僕は中身を見ますんで関係ありません。なので、どんな制服でもいい と言いたいのですが、やはり外見も大事なので水着をお願いします』

教師のコメント

一瞬あなたを見直した先生がバカでした。

天宮龍人の答え

『そんなものに興味はない と言いたかったが、横で強介がうるさいので水着をお願いします』

教師のコメント

他人を巻き込まないように伝えてください。

「おい、強介急げ！！」

「分かってるよ」

清涼祭初日の朝。

俺らは廊下を全力で走っていた。

「お、我らがFクラスの扉が見えてきた」

俺は扉の前まで全力で走り、扉を開け放った。

「ぜえぜえ。疲れた」

俺は教室に入ると、扉の傍で膝に手を置きながら息切れをしている。横では恭介も同じように息切れをしていた。流石にあれを持って走るのはきつかった。

「二人とも、どうしたの？」

俺らの存在に気付いた明久が声をかけてきた。

「いや、な。これが結構重かったもんでな、遅れちったんだよ。俺は持ってきたギターを見せながら告げた。

「龍人はギターでなにやるの？」

「客寄せだよ。強介と一緒にな。だから、ホールにはほとんど顔を出さない。召喚大会にも出るしな」

「えっ！ 龍人たちも出るの？」

「そうだが……なんかまずいのか？」

「いや、まずくないけど……ちよつとごめん」

明久はそう言い捨てると、雄二のもとにそそくさと言ってしまった。そして、何かを話し始めた力と思つたら、試験召喚大会に行つてしまった。

俺らはまだなので、客寄せを開始する事にした。

「強介、やるぞ。まずは廊下だ」

「OK」

龍人たちは廊下に出るなりギターを弾き始めた。龍輝はそれにプラスして同時に歌い始めた。最初はだれも気にもとめなかったが、一人の男子生徒が『なんだなんだ？』と言いながら近寄ってくるのを初めに、徐々に龍人たちの演奏を聴き、聞き終わると流れる様にしてFクラスに入つて行つた。

S I D E 吉井明久

僕らが試験召喚大会から戻つてくると、Fクラスの周りには大勢の人がいた。そして、Fクラスにも行列が出来ていた。

「雄二、人多くない？」

「確かに多いな。一体何が起きてるんだ？」

僕らは人込みをかきわけ、一番前に進んだ。そこからは、龍人と強介が演奏しているのが分かる。

「龍人、歌うまいね」

「うますぎだ。ここに集まってる奴らは演奏を聴きに來てるらしいな。つで、演奏を聞き終わるとFクラスに行くから、行列もできてたんだな。納得だ」

僕らが感心していると、龍人らは『一時中止します』と、告げると演奏を中断して試験召喚大会に向かったようだ。

しばらくして、戻ってきた龍人らに尋ねる。

「あ、龍人。試験召喚大会どうだった？」

「どうもこうもあるかよ。相手は不戦勝だったよ。不戦勝とはうらやましい。」

「そうなんだ。あ、それはそうと龍人と強介も聞いてよ。客に営業妨害をしてる連中がいるんだよ。今雄二がそいつらの所に向かっているけど……」

龍人は雄二の歩いて行く方へと視線を向けた。そこには、二人の男がいた。片方は中肉中背の一般的な体格と、小さなモヒカンという非一般的な髪型をしている。もう一方も175センチくらいの普通の体格で、こちらは丸坊主だ。なんとも面白い、もとい覚えやすい髪型の二人だ。

「よし。俺もいつちよ暴れてくるか」

「暴れるって、加減してよね。それと、いつの間に店の服に着替えたの？」

「細かい事は気にするな。じゃ、行ってくるわ」

龍人は僕に告げると、雄二の傍まで早歩きで近づいた。二人の男に聞こえないような声で雄二と話すのが分かった。

(雄二、俺も手伝ってやる)

(お、悪いな)

「まったく、責任者はいないのか！ このクラスの代表ゴペツ！ 不意に男の一人が口を開いた、が。龍人と雄二で、同時に男の顎にアツパーを炸裂させた。

「私が代表の坂本雄二です」

「私は代表をサポートする者です」

「何かご不満な点でも御座いましたか？」

ホテルのウェイターのように恭しく頭を下げる二人。話し掛ける前に相手にアツパーを炸裂させていなければ、まるで模範的な責任者のようだ。

「不満も何も、今連れがアツパーを食らわされたんだが……」
殴られていないソフトモヒカンの男が驚いている。無理もない。

僕だっていきなり友達がアツパーを食らわされたら驚くだろう。

「それは私達のモットーの『ダブルアツパーから始まる交渉術』に対する冒ですか？」

凄く痛いような交渉術だ。

「ふ、ふざけんなよこの野郎……！ なにが交渉術ふざやあつ！」

「そして『ダブルキックでつなく交渉術』です。最後には『ダブル回し蹴りで締める交渉術』が待ってますので」

「わ、わかった！ こちらは夏川を交渉に出そう！ 俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」

「ちよ、ちよっと待てや常村！ お前、俺を売ろうと言うのか！？」

慌てているのは坊主頭の夏川と呼ばれた男。覚えにくいから、
夏坊主、常モヒカン』で覚えよう。

「それで常夏コンビとやら。まだ交渉を続けるのか？」
とうとう雄二の仮面が外れた。どうやら慇懃な態度はあまり継続しないみたいだ。

それにしても、常夏コンビとは巧い命名だ。座布団一枚。

「雄二、交渉はもういいじゃないか」

「「そ、そうだぞ。交渉はもういい!!」」

龍人の言葉に常夏コンビが同意している。いつもの龍人らしくないな。交渉術を止めようって言い出すのは。

「次からは体罰にしないと」

あ、いつもの龍人だ。

「そうだった。交渉じゃなくて、体罰だな」

「い、いや、待て。俺達が悪かごぺっ!」

龍人の右拳が常夏コンビの夏川の方に突き刺さった。

「これぐらいにしといてやるから、さっさと消え失せろ」

龍人がモヒカン先輩を睨みつけた。モヒカン先輩は龍人が怖かったのか、倒れた相棒を抱えて教室から逃げる様に出て行った。これで問題は片付いた。

『流石にこれじゃ、食って行く気はしないな』

『折角美味しそうだったんだけどね』

『食ったら腹壊しそうだからなあ』

というわけにはいかなかった。

クロスの中を目の当たりにし、ガタリ、と音を立てて一人目が席を立つ。あれは教頭の竹原先生か。うちのクラスに来ていたのか。こういった催しものが好きそうには見えなかったけどなあ。

『店、帰るか』

『そうしようか』

「あ、お客さん!」

一人目が席を立つと、次々とお客さんが席を立ってしまふ。集団心理ってやつだろう。こうなると悪評は風に乗るように学校中に広がってしまう。

「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていた
ので、暫定的おんてい的ににこのような物を使ってしまいました。ですが、たつた今本物のテーブルが届きましたのでご安心ください。それでもお客様は納得いかないかもしれません。なので、演奏をさせていただ

きます。強介！！」

「ほいよ」

頭を下げた龍人は再び顔を上げると、強介からギターを受け取った。龍人はギターを弾きながら歌い始めた。その後ろには、秀吉や男子数名が立派なテーブルを運んでいる姿があった。

だが、今この場にいる全員はテーブルよりも龍人らの演奏に聞き入っていた。当たり前だけど。

「あれ？ テーブル入れ替えてるの？ それと、この歌声はなに？」

そんな時、後ろから女子の声が聞こえてきた。

「あ、おかえり。美波に姫路さん。今、龍人たちが客を呼びとめる為に演奏をしてるんだよ」

「へへ。龍人が。うまいわね」

「本当にお上手です」

うん。本当にうまいよ。絶対に今度、カラオケに誘おう。

その後、僕らはテーブル調達に向かったり、二回戦を行ったりした。相手は根本君で、作戦勝ちした。龍人も同じぐらいに二回戦に向かい、一撃で相手を倒していた。流石だね。僕らは一緒に教室に戻る事にした。

第十問 Fクラスの営業妨害をすると、とんでもない交渉術が待っている！！

読んでくれた方、ありがとうございます。

第11問 昔の事ってついつい忘れがちになってしまつのは、誰しも一緒だと信じてください。今度から、第 11 問の 問題を数字に変えます。あまり気にしないでください。

第11問 昔の事ってついつい忘れがちになってしまつのは、誰しも一緒だと信

【第十問】

以下の問いに答えなさい。

『PKOとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希の答え

『Peace-keeping Operations（平和維持活動）の略。』

国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動のこと』

教師のコメント

そうですね。豆知識ですが、United Nations Peacekeeping Operationsとも呼ばれたりします。余裕があれば覚えておくと良いでしょう。

土屋康太の答え

『Pants Koshitsuki Oppaiの略。』

世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体のこと』

教師のコメント

君は世界の平和を何だと思っているのですか。

吉井明久

『パウエル・金本・岡田の略』

教師のコメント

それは世界を守る人たちです。

桐谷強介の答え

『Pants Koshit-suki Oppaiの略。
世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体のこと』

教師のコメント

まさかもう一人いるとは……。

天宮龍人の答え

『答えたくないです。つつか、答えたら人間的に終わりそうな気がします』

教師のコメント

もしかしてあなたも土屋君、桐谷君と同じ答えに行きついたので
すか？

「ただいま……って、あんまり客がないじゃないか！」
テーブルが綺麗になったにも関わらず、喫茶店に客が殆どいなか
った。

「お、戻ってきたようじゃの」
あまり仕事が無いようで、ウェイトレス役の秀吉も暇そうだ。
「無事勝ってきたぞ（きたよ）」

「それは何よりじゃ。ところで、雄二の姿が見えんが？」

「ああ。トイレに寄ってくるそうだ」

喫茶店が気になるんじゃないのかよ。

「それより秀吉、これはどういうことだ？ 客がいないじゃんか」

「……むう。ワシはずっとここにおるが、妙な客はあれ以降来ておらんぞ？」

秀吉が首を傾げる。

「ってことは、教室の外で何かが起きているのか？」

「かもしれないのう」

「そうなんだ……」

「まあ、僕は何かが起きてるとすればさっきの常夏コンビだと思っけど……」

そうやって四人で考え込んでいると、

『お兄さん、すいませんです』

『いや。気にするな、チビツ子』

『チビツ子じゃなくて葉月ですっ』

雄二と小さな女の子の声が聞こえてきた。

「雄二が戻ってきたようだな」

「あ、本当だ。でも、話し相手は女の子みたいだけど一体誰だろうっ？」

「確かに。誰だろうな？」

俺は神から色々なスキルをもらい、その中には瞬間記憶能力と完全記憶能力にも近い記憶力のスキルもある。だが、興味のない事や自分が覚えようとしないと覚えられないようだ。

『んで、探しているのはどんなヤツだ？』

ガラスと音を立てて教室の扉が開き、雄二の姿が見えた。話し相手の女の子は小柄なのか、雄二の陰になっていて姿が見えない。

『お、坂本。妹か？』

『可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ』

二人はあつという間にクラスの野郎どもに囲まれてしまった。どうやら、このクラスにはロリコンもいるようだ。

『あ、あの、葉月はお兄ちゃんたちを探してるんですっ』

どうやら女の子は人を探していて雄二に声をかけたようだ。雄二って面倒見めんどづみがいいからな……。

『お兄ちゃんたちってことは二人か？ 名前はなんて言うんだ？』

『あう……。わからないです……。』

『？ 家族の兄じゃないのか？ それなら、何か特徴は？』

名前が分からない相手でも探してあげようとするのか、意外と子供好きかもな。

『えつと……。二人ともバカなお兄ちゃんでした！』

雄二が首を巡らせて、該当する人物を探している姿が人垣ひとがきの間から見える。

『あ、あの、そうじゃなくて、その……。』

『うん？ 他に何か特徴があるのか？』

『その……。二人ともすごくバカなお兄ちゃんだったんです！』

『『吉井と天宮だな』』』

俺は行動がバカなだけで、頭は悪くないぞ。

「全く失礼な！ 俺（僕）に小さな女の子の知り合いなんていないぞ（いないよ）！ 絶対に人違い」

「あつ！ バカなお兄ちゃんたちだっ！」

小さな子が掛けてきて、いきなり明久に抱きついた。

「絶対に人違い、がどうした？」

「……人違いだと、いいなあ……」

本当、人違いであつてほしかった。俺が本当にすごくバカだと思われちまうじゃないか。

「つて、キミは誰？ 見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の

知り合いはいないよ？」

明久がひとまず顔を見る為に女の子を引き剥がす。

「え？ お兄ちゃん……。知らないって、ひどい……」

「そうだぞ明久。忘れたのか？」

「つえ、龍人は覚えてるの!？」

いや、まあ。正直覚えていないんだが……。なんか、このまんまだと女の子が泣いちゃいそうだしな。あ、もしかあの子か？

「ああ、明久もちろんだぞ。この子はな、去年道端で転んでいた女の子だぞ」

「あ、なるほど」

つて、自分で言つといて何だが、そんな子いたか？

「本当にバカなお兄ちゃんたちは覚えてないの？ ひどい……」
女の子の表情が歪む。あ、マズい！ 間違つていたか！

「バカなお兄ちゃんたちのバカあつ！ バカなお兄ちゃんたちに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんたちを知りませんか?』つて聞きながら来たのに！」

なんだろうな。学校中で俺はバカつてことになってそうな気がするな。

「明久と龍人　じゃなくて、バカなお兄ちゃんたちがバカでごめんな？」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんたちはバカなんじゃ。許してやつてくれんかのう?」

「そうなんだよ。バカなお兄ちゃんたちは大バカなんだよ」

ここまでバカを連呼された人間は俺と明久だけかもしれないな。だが、何よりも強介に『大バカ』つて言われたのが嫌だな。

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに

」

女の子は明久を指さしながら告げた。俺じゃなくて良かった。

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「「殺るわよ!」」

「つて、待て！ それじゃいくらなんでも明久が可哀そうだ！」

龍人は明久を殺ろうとしていた姫路と美波を止めた。

「あ、ありがとう龍人。龍人だけが僕の味方だよ」

明久が泣きそうな声で言ってくる。まあ、そりゃーな。訳も分からず殺されたんじゃないか……。

「つで、この女の子は誰なんだ？ 明久、思い出したか？」

「いや、全然」

「そ、そんな。酷いですつ。ふえええんつ！ ファーストキスもあげたのにーっ！」

再び女の子が明久に告げる。

「坂本は包丁を持ってきて。五本あれば足りると思う」

「いやいや。だから待ってっの！ 明久が可哀そうだったの！」
再び龍人は止める。つうか、包丁で何をする気なんだ？

「あ、そうだ。この女の子は明久、あの子だよ」

俺はある事を思い出した。前に小さな女の子がぬいぐるみを買おうとしていたけどお金が足りない、なんて哀しそうにしてたから手伝ったんだつた。

「ぬいぐるみの子だよ」

「ああ、そういえばそんなことあったね」

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月です」

女の子がぷうつと頬を膨らませる。なんか、妹のことを思い出すな。悲しくなってきた。

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

女の子もとい、葉月ちゃんが美波に向かってそう告げた。

「へえ〜。美波の妹だったのか」

「あ、じゃーあの時のお姉ちゃんつて、美波のことだったんだね」

「あ、確かにそうなるな。じゃーあのぬいぐるみは、明久 葉月ちゃんじゃなくて、明久 葉月ちゃん 美波になるから、明久が美波にあげた事になるんだな」

「あ〜。確かにそうなるね」

俺らが二人して納得していると、横に居た姫路が「吉井君はずるいです……。美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いで、しかもぬい

ぐるみまであげるなんて……」

などと、意味分らない事を言っていた。ほしいなら姫路も、買ってもらえばいいのに。

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

と、教室内を見まわす雄二。そういえば、俺らもそれを考えていたんだっただな。

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

「ん？ どんな話だ？」

雄二が屈みこんで葉月ちゃんの目線に合わせる。

「えつとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、って」

なるほど。どうせ、まだあの常夏コンビの妨害が続いているんだろう。一回、探し出して立ち直れなくなるほど殴るか？

「葉月ちゃん、さっきの話はどの辺で聞いたのか教えてくれるか？」

俺も雄二のように目線を合わせて尋ねる。

「えつとですね……短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店」

「「なんだって！？ 雄二に龍人、すぐに向かわないと！」」

おお凄い。強介と明久のタイミングがピッタリだ。

「そうだな明久、強介！ 我がクラスの成功のために、低いアングルから綿密に調査しないと！」

本当にFクラスって、女好きが多いよな。

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです……」

「お兄ちゃんたちのバカ！」

いや、俺は別に女子を見る為に行くのではないんだが……。そんなこんなで、その店に向かう事になった。

第11問 昔の事ってついつい忘れがちになってしまつのは、誰しも一緒だと信じてくれた方、ありがとうございました。

第12問 『メイド喫茶』を『冥土喫茶』と呼ぶ者はそうでもない、と思う

今回は初めて(初)と(終)に別れます。では、本編をお楽しみ
ください。

第12問 『メイド喫茶』を『冥土喫茶』と呼ぶ者はそうでもない、と思う

【第十一問】

以下の問いに答えなさい。

『人が生きて行く上で必要となる五大要素を全て書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？タンパク質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

桐谷強介の答え

『彼女』

教師のコメント

後で職員室に来てください。5時間先生とみっちり話しましょう。

天宮龍人の答え

『？仲間　？絆　？思い出　？愛　？やさしさ（仲間が悲しんでるときに、一緒に悲しめるやさしさなどなど）』

教師のコメント

この回答は先生個人としては正解にしたいです。

Fクラスの営業妨害をしている連中もとい、常夏コンビがいたとされるAクラス前で雄二が入るのを抵抗している。

「頼む！　ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

目的の桃源郷は、我らが宿敵のAクラスに「メイド喫茶　『ご主人様とお呼び！』」という名前で存在していた。

「雄二、いくら大好きな霧島翔子きりしましょうこがいるからって、逃げなくていいんだぞ？」

「そうだよ雄二。いくら大好きな霧島さんがいるからって、逃げちゃ駄目だよ？」

「そうですよ。逃げ回るなんてダメですよ？」

雄二が妙な抵抗をしているうちに女の子三人も追いついてきたみたいだ。

「雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだから」

「お前の場合は趣味じゃないのか？」

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

「見てみると、指が擦り切れんばかりにシャッターを切っている男が二人。」

「……………ムツツリーニ強介は一体何をやってるんだ？」

「……………人違い」

「厨房責任者のクラスメイトである、土屋康太と強介はカメラ片手に否定のポーズを取っていた。」

「どこからどう見ても土屋と桐谷でしょうが。アンタたち何してるの？」

「……………敵情視察」

「こいつらの敵情視察はローアングルから女子を撮影することを指すのか。世界でこの敵情視察が認められたら、きっと人類は変態ばかりになるな。」

「ムツツリーニダメじゃないか。盗撮とか、そんなことをしたら撮られている女の子が可哀想だと」

「お、明久がまともなことを。」

「……………一枚百円」

「2ダース貰おう 可哀想だと思わないのかい？」

「ダメだな。明久はまともになれないらしい。」

「明久、普通に注文してどうする って雄二、どさくさに逃げようとしてんじゃねーよ」

「俺は逃げようとしていた雄二の右肩を掴んだ。」

「は、離せ！ 離してくれ！ 俺からしたらここは、『メイド喫茶』じゃなくて『冥土喫茶』なんだよ！」

「知るか！ さつさと、入りやがれ！ そして、明久もムツツリーニから貰った写真を見る前に、入れよ」

「俺は雄二と明久を無理矢理、Aクラスへ入らせた。ちなみに、強

介とムツツリー二はどこかに消えた。

「……おかえりなさいませ、雄二パパにご主人様
出迎えたのはクールで知的な美人メイド、霧島翔子だ。

「おい、待て。何で俺だけ『パパ』になっっているんだ？」

「……???」

「なんでそこで疑問顔ができるんだよ？」

「……ダーリン？」

「おい、俺の言いたい事が分かってないな
これって、

「……夫婦漫才か？」

「違うわー!!」

「……(ポツ!)」

「おい、待て。なんでお前は顔を赤らめるんだ？」

「……だって、『結婚おめでとう』って天宮が言ったから」

「どうやったたら、『夫婦漫才』を『結婚おめでとう』に変換出来る
のかが不思議だ。

「分かった。お前はまず、病院に行つて来い。耳と脳に大きな障
害がある可能性があるからな」

「……妊娠はまだしてないから病院に行つても意味がない」

「オーケー。問題なのは耳と脳だけじゃなくて、コミュニケーション
能力もだということがよく分かった」

「この遣り取りはいつまで続くんだろうか？ 早く座って何か食べ
たいんだが。

などと思っていると、

「代表、夫婦漫才してないで席に案内してあげて」

「誰かがそんな事を言ってくれた。ナイスだ。誰かは知らないがと
りあえずナイスだ。

「……分かった」

「おい、なんで全員、夫婦漫才だと言うんだ？」

「……こちらにお座りください」

「つて、無視か！」

「雄二、うるさいぞ。早く座れよ」

俺は横の椅子を引き、雄二を呼ぶ。

「ツチ。分かったよ」

雄二はドカツつと、椅子に座った。

「……では、メニューをどうぞ」

霧島さんが立派な装丁のメニューを渡してくる。凄い。最優秀クラスは学園祭まで手を抜かないみたいだ。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー！」

女子の三人はシフォンケーキ。

「僕は『水』で。付け合わせに塩があると嬉しい」
貧相だな。

「俺はブラックコーヒーと『チョコバナナパフェ』で。明久も食うか？」

「つえ！ いいの！」

「ああ。いいぞ。じゃー『チョコバナナパフェ』を二つ。会計は
お金ではなく、雄二で」

「つて、待てやコラアツ！ おかしいだろうが！」

雄二が立ち上がりながら叫んだ。

「うるさいぞ雄二」

「そうだよ雄二。少しは静かにしなよ」

「坂本うるさいわよ」

「おい、誰ひとりおかしいとは思わ

「……ご注文を繰り返します」

遮るような霧島の声。

「……『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『水』を一つ、『コーヒー』が一つ、『チョコバナナパフェ』が二つ、『メイドとの婚姻届』が一つ。以上を全て、『坂本雄二』で払うと言うことでよろ

しいでしょうか？」

「全然よろしくねえぞっ!？」

動揺した叫びをあげる雄二。うるさいな。

「……では食器をご用意致します」

女子のところにはフォークが、明久のところには塩とスプーンが、俺の前にはスプーンが、雄二の前には実印と朱肉が用意された。

「しよ、翔子! これ本当にうちの実印だぞ! どうやって手に入れたんだ!？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください
霧島は優雅にお辞儀をしてキツチンと思しき方向へ歩いていった。

「……明久。俺はどうしても召喚大会に優勝しないといけないんだ……!」

「あ、うん。それはもちろん僕もそうだけど」

「じゃー俺らがそれを邪魔してやる!」

「てめーは悪魔か! 悪魔なのか!？」

いや、悪魔ではないんだが……。

「それより葉月ちゃん。キミの言っていた場所ってここでよかったです?」

「うんっ。ここで嫌な感じのお兄さん二人がおつきな声でお話してたの!」

嫌な感じの二人か。それってやっぱり……。

第12問 『メイド喫茶』を『冥土喫茶』と呼ぶ者はそうでもない、と思う

読んでくれた方、ありがとうございます。感想などがあれば願
いします。

第12問 『メイド喫茶』を『冥土喫茶』と呼ぶ者はそうそういない、と思う

す。今回はバカテスはありませんが楽しく読んでいただければ幸いです。

第12問 『メイド喫茶』を『冥土喫茶』と呼ぶ者はそうでもない、と思う

嫌な感じのお兄さんが二人か。それってやっぱり、

『おかえりなさいませ、ご主人様』

『おう。二人だ。中央付近も席は空いてるか？』

と、聞き覚えのある下品な声が聞こえてきた。この声は常夏コンビだな。

「あ、あの人達だよ。さっき大きな声で『中華喫茶は汚い』って
言ってたの」

そうかそうか。一度地獄に突き落としてほしいのか。分かった。
殺ってやるう。

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！』

『そうだな。さっきいった二・Fの中華喫茶は酷かったからな！』

『テーブルが腐った箱だったし、虫も湧いてきたもんな！』

人の多い喫茶店の中央で、わざわざ叫び合う。上等だコラア。

「待て、龍人」

俺が立ちあがろうとすると、雄二に止められた。

「雄二、なんで止めるんだよ？」

「落ち着け。こんなところで殴り倒せば、悪評は更に広まるだけ
だ」

雄二の目が鋭く連中を睨みつける。

「だったら雄二、霧島からブラジャーと瞬間接着剤を借りてくれ
ないか？」

「ん？ 何をするのか分からないが分かった。おーい、翔子！」

「……なに？」

は、早！ さっきまで厨房と思しき場所にいたよな？

「余ってるブラジャーと瞬間接着剤を貸してほしいんだが？」

「……雄二のエッチ！」

「違う。俺がほしいんじゃない。龍人に考えがあるそうなんだ」

「……わかった」

「あ、霧島先に言っておくが、ここで自分の取るってのはなしな」

「……わかってる。今、持ってくる」

霧島はそれぐらいやりかねないからな。

霧島が去っていく。

気付けば注目的的になってるが、次は常夏コンビがなる番だな。

『あの店、出している食い物もヤバいんじゃないか?』

『言ってるな。食中毒でも起こさなければいいけどな!』

『二・Fには気をつけろってことだよな!』

ふん。好き勝手言ってられるのも今のうちだ。

「……雄二、これ」

と、霧島がブラジャーと瞬間接着剤を雄二に手渡す。

「サンキュー。ほら、天宮」

それを雄二から受け取る。

「ありがと。じゃ、俺はあいつらを黙らせてくるぜ。あいつらに

とってここは『メイド喫茶』から人生の『冥土喫茶』に変わるかも

しれないがな」

S I D E 吉井明久

龍人がブラジャーと瞬間接着剤を持って常夏コンビに歩み寄った

と、思ったら一瞬のうちにブラジャーに瞬間接着剤をつけ、

坊主先輩の頭に付けてから叫んだ。

『おい!!! この先輩、ブラジャーを付けているぞ!!! 変態

だ!!!』

と、常夏コンビは何が起きているのか分かっていない様子だ。常

夏コンビは口を半開きにして視線をさまよわせていた。

『……っへ? あれ? なんで俺、ブラジャーなんか付けている

んだ?』

しばらくしてから、坊主先輩が頭についているブラジャーを触りながら口を開く。

『お、お前、ついに手を出してしまったのか!?!』

龍人が犯人だとわかっていないモヒカン先輩が告げる。

『ち、違う!?! いつの間にかくっ付いていたんだ!?! 俺は無実だ!?!』

『変態は誰しもがそう言うんだよ!?!』

『そうだぞ、夏川。変態は大抵そう言うんだ。罪を認めるよ』
モヒカン先輩も龍人に同意していた。っていうか、龍人がいる事を怪しまないのが凄い。

『いや、だから俺はやってないっての!?!』

『往生際が悪い先輩だな。早く認めちまえよ』

『そうだぞ夏川。早く罪を認めてブラジャーを返して来いよ』

『つ、常村、信じてくれ。俺はやってないんだ!』

『ば、バカ。近寄んな!?! 俺まで変態だと思われるだろうが!?!』

『だ、だから、誤解なんだあああああー!?!』

『あ、おい、ちよつと待てよ!』

坊主先輩はそう叫びながら教室から走り去った。それを追いかけるようにしてモヒカン先輩が教室を出た。

常夏コンビが去っていくと、辺りから声が漏れた。

『さっきのFクラスがどうたらって話はでたらめなんじゃないか?』

『ああ、あり得るな。ブラジャーを頭に付けてるような変態の言う事だもん』

『そうよね。変態の言う事だもん』

『もしかして、実はもの凄くかわいい子がいて、その子を一人占めにしたかったんじゃないのか?』

『あ、その可能性は高いな。後でFクラスにでも行ってみるかなどなど。悪評はすっかり消えたようだ。』

龍人は悪評が消えていくのを確認すると、僕らの所へ戻ってきた。

S I D E 天宮龍人

俺が戻るなり、雄二が背中を叩いてきた。

「あははははははは。面白いものを見せてもらった。二人を追い返すだけでなく、Fクラスの悪評まで消しちまうとはな。しかも少しばかり宣伝にもなったようだしな。流石だ！」

「本当、龍人は流石だよ。あの先輩達も、当分はここに来れないね。だって、『メイド喫茶』から人生の『冥土喫茶』に変わっちゃったんだもんね」

「ああ、あいつらも少しは懲りたたる。だが、まだ油断はできないからな。あの二人の事を追うぞ！」

「了解」

「いいぜ。次はもつと面白い事やってやるよ！」

「そうしてくれ」

雄二がにやにやと笑いながら返答した。さてさて。次はどんな方法で人生を狂わせてやるうか？ 男物の下着でも頭に付けてやるかな？ まあ、これをやったら間違ひなく常夏コンビは不登校になるだろうけどな。それもそれでいいかな？ 営業妨害したんだし。

「島田とチビツ子、それから姫路は教室に戻れ。俺らは常夏コンビを追う」

俺がどんな方法で懲らしめてやるか考えていると、雄二が告げた。「分かったわ。あの先輩達は坂本達に任せるわ。葉月、瑞希、戻るわよ」

「あ、はい。気を付けてくださいね」

「バカなお兄ちゃんは、どこかに行っちゃうですか？」

葉月ちゃんが明久を見上げながら告げた。なんか、捨てられる時の子犬に近い表情だな。

「うん。でも、心配しないでね。すぐに戻るから。だから、おと

なしく戻っててよ?」

明久がしゃがみ目線を合わせながら答えると、葉月ちゃん表情が晴れた。

「分かったです。葉月、おとなしく待ってるです!」

「じゃ、アキ。気をつけてね」

「明久君、くれぐれも気を付けてくださいね?」

「うん。姫路さん達も気をつけてね。もしかしたら、常夏コンビがFクラスに行くかもしれないから」

「はい。分かりました」

三人は軽く頷くと、教室を後にした。

「よし。俺達も行こうぜ。早くしないと逃げられちまうからな」

「「だな(だね)」」

「……天宮、ちよっと待って」

俺らが教室を出ようとしたところで、俺は霧島に呼び止められてしまった。

「ん? なんだ?」

「……優子と愛子が話があるって」

「どうやら、龍人は来れないらしいな。こっちは任せておけ」

「悪いな雄二に明久。行けるようだったら後から追いかける」

「分かった。明久、行くぞ」

「オーケー」

明久達は教室を後にした。俺は霧島に連れられて工藤と木下姉の近くに近寄る。

この二人と顔を合わすのはAクラス戦以来だな。木下優子は秀吉の姉だ。工藤愛子は色の薄い髪をショートカットにした、ボーイッシュな女子だ。

「何か用か?」

俺は二人に尋ねた。

「あ、いや、用ってほどの事でもないんだけど、この間ボク達を助けてくれたのって天宮君達だよな?」

「この間って？」

「ボク達が男の人達に絡まれてた時のことだよ」

うん。この二人を助けた覚えはないんだが……。

「人違い、じゃないか？」

「人違いじゃなかったと思うわよ。私達が男の人達に絡まれてる時、缶コーヒーを男の人達に当ててたのは天宮君達でしょ？」

……ああ。この間のやつか。あの二人が木下姉と工藤だったとはな。

「ああ、それは間違いない俺らだわ。まあ、好きでやった事だから気にするな。それじゃ、俺は雄二達を追いかけるしかないから、行くわ」

俺はそう言い捨てると、Aクラスを後にした。

早くしないと。面白い事ができなくなっちまう。

そんな事を思いながら雄二達と言ったと思われる方向に走り出した。

第12問 『メイド喫茶』を『冥土喫茶』と呼ぶ者はそうでもない、と思う

読んでくださった方、ありがとうございます。感想などがあれば
待っています。

第13問 バレない反則は高等技術と言つが、やっぱり反則は反則だ！（前書き

今回もバカテスはありません。

第13問 バレない反則は高等技術と言うが、やっぱり反則は反則だ！

俺は不機嫌なままFクラスに戻っている。あの常夏コンビだけが少し前に俺の横を通り過ぎ、俺はそれを約50分近く追いかけた。その結果、召喚大会には出れず、負けてしまった。

「くそっ！！ せつかく勉強したつてのにっ！ これも常夏コンビのせいだ！ しかも、取り逃がすし！」

ドガッ！！ 俺は近くにあつた他のクラスの看板を力強く蹴っ飛ばした。看板が倒れたが、俺は無視してFクラスに歩く。

龍人はFクラスの扉を開け放つた。
がらららら。

「あ、龍人お帰り」

龍人が戻ってきた事に気付いた明久が言う。龍人は明久達のもとに近寄った。どうやら、強介に始まり葉月ちゃんまで全員そろつてるようだ。

「よう、召喚大会3回戦はどうだった？」

「もちろん勝ったよ。龍人はどうだった？」

「常夏コンビを追いかけてたら、召喚大会の存在を忘れててな。負けにされちゃった」

「あ、そうなんだ。大変だったね」

「マジで大変だったよ。つうか、そろそろ準決勝じゃないのか？」

「あ、そうだった。雄二、行こうよ」

「ああ、そうだな。念のために龍人も来てくれないか？ もう、ムツリーニと秀吉、強介には声を掛けてある」

何か作戦があるのか？ 思えばムツリーニと秀吉はいないようだしな。大戦票を見た限りだと霧島と木下姉のチームだったからな。普通にやったら勝ち目がないだろう。

「別にいいぞ」

「悪いな。それじゃ、俺らは準決勝に行ってくる」

「分かったわ。アキだけなら不安だけど、坂本がいるから平気よね。絶対に勝ってくるのよ」

「あいよっ」

俺らは会場に向かって歩き出した。雄二と明久はステージの上上がり、俺と恭介はステージ脇の一角で待っている。一応、もしもの時の為に作戦は聞いておいた。

『……雄二。邪魔しないで』

不意に遠くの声が聞こえてきた。

『そうはいくか。俺にはまだやりたいことが沢山あるんだ！』

雄二が嫌がつてるのは如月ハイランドに霧島と行くことか？もしそうだったとしたら、明久と組んで絶対に行くように仕向けてやる。

『……雄二、そんなに私と行くのが嫌？』

「な、霧島さんが上目遣いをしているだつ！これは強力だ！横では強介がなやら言っているが、気にしないでおこう。バカがうつるからな。」

『ああ。嫌だ』

「なつ！あれを断るなんて、雄二は人間じいやないな！」

お前は黙っててくれよ。うるさいから。」

『……やっぱり、一緒に暮らしてわかり合う必要がある』

霧島も流石だな。あそこまできっぱり拒絶されたのに全然気にしないとはな。

『ハッ！残念だったな！そんな寝言は俺たちに勝つてから言うことだ！』

『……わかった。そうする』

やっと終わったか。長かったな。なんであんなに真剣なんだろうか？俺には分からないものでもあるのか？俺に分らないものか。いったい何なんだ？

『秀吉？秀吉って、あのゴミのこと？』

俺が考えていると、木下姉がそう言いながら、俺らが居る所と別

のステージ脇の一角を指さしていた。

龍人は視線を木下姉が差している方に動かす。そこにはボロボロにされた拳銃手足を縛られた秀吉の姿があった。なんと哀れな姿に「ちや、チャイナドレスで縛られてるだと。目に悪すぎる!!」「横ではバカが何かを呟いていると、一瞬のうちに現れたムツツリ―二が縄を解いた。

「なっ！　なんてことをするんだ!?　せつかくの目の保養が…
…っ！」

さつきは目に悪いって言ってなかったか？　なのに今度は目の保養とか、矛盾してるような気がする。

そんなことを考えていると、再び四人が会話を始めた。

「おとなしくギブアップしてくれると嬉しいな。弱いものいじめは好きじゃないし」

「つけ！　言ってる！　実力で勝負してやるよ！　明久！」

「そうだね。もとから僕達にはこんな作戦入らなかったしね」

「ああ、その通りだ！」

「Fクラスのくせして言うてくれるじゃない！　代表、行くよ！」

「……わかった」

雄二のやつ、平気で嘘をつくな。本当は予備の作戦があるっていうのに。それに引っかけた二人も二人だけだな。

『「……試獣召喚」』

『明久』

『わかてるって』

『「新巻鮭」』

明久たちが叫ぶと同時に、遠くにいたムツツリ―二と強介は静かに告げる。

『「……試獣召喚」』

喚び声に応え、出現する召喚獣。それはたとえAクラスの二人でも太刀打ちできない強さを持った

『え!?　それ、土屋君と桐谷君の……!!』

ムツツリー二と強介の召喚獣だ。強介の召喚獣はムツツリー二の召喚獣と同じ格好をしている。違うのは服の色が緑ってことだけだ。ちなみに、腕輪も同じだ。男子で保健体育が得意だと、ああなるのか？

男子の中で、強介はムツツリー二の次に保健体育が得意だったりする。工藤とどっちが上なんだろうか？

『「……加速」』

「ほ、本当に卑怯　　きゃあっ！」

初撃から腕輪の力を発動させて勝負を決める。これが予備で考えといた秘策の『代理召喚（バレない反則は高等技術）』だ。

『Aクラス 保健体育	木下優子 321点	&	Aクラス &	霧島翔子 3
65点			VS	

『Fクラス 保健体育	土屋康太 511点	&	Fクラス &	桐谷強介 4
85点				

『よしっ！　僕と雄二の勝ちだ！』

明久が物言いがつく前に勝鬨からどきを上げた。

『……ただいまの勝負ですが』

それでも物言いがつきそうだ。つま、当たり前だがな。仕方ない。強介にやってもらうか。

「なあ、強介。『彼女になってくれる方はいませんか？　自分は可愛い子なら誰でもOKです』って叫んでくれ」

「なんでだよ？」

「お前みたいなイケメンじゃないと無理なんだよ。つな、頼むよ」

「ふん。しょうがないな。やってあげるよ」

なんて、扱いやすい奴なんだろうか？

「よし、強介、やるんだ」

「OK。スウー」

強介がめいっばい息を吸いこんでから叫んだ。

「『彼女になってくれる方はいませんか？ 自分は可愛い子なら誰でもOKです！』って、これ、どう考えても変態の発言だよな！？」

強介が俺に問う。

俺はさわやかに言ってやった。

「そうだけ。だから、お前じゃないとダメだったんだ」

「それって、僕が変態ってことですかねっ！？」

「今頃気づいたのか？ お前は変態だろうが」

龍人たちの遣り取りをここにいる全員が漠然と眺めていた。もちろん、教師もだ。よし、教師も何が何だかわかっていない。チャンスだ。

「先生、結局どっちが勝ったんですか？」

俺に突然訊ねられて先生が困りながら、口に出した。

『か、勝ったのは坂本・吉井ペアですが……あっ』

先生は自分が言った重大さに気づいたようだ。取り消される前に言わなくては。

「そうですね。雄二に明久よくやった。さて、勝負が付いたみたいだから喫茶店に戻ろうぜ」

と、それに対して明久たちは頷いた。

「そうだね。そろそろ戻ろうか」

「だな。喫茶店のほうも気になるしな。ってなわけで、俺達ももう行きます」

雄二は教師方にお辞儀した。それに続く形で俺達もお辞儀をした。俺達はお辞儀を済ませると、会場を後にした。

第13問 バレない反則は高等技術と言つが、やっぱり反則は反則だ！（後書き

読んでくださり、ありがとうございます。感想やアドバイスを待
っています。

第14問 最初っから完璧な人間なんて存在しない!!

【第十三問】

以下の文章の（ ）に入る正しい物質を答えなさい。

『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である』

姫路瑞希の答え

『水塩化カルシウム』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

土屋康太の答え

『塩化吸収剤』

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように。

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

桐谷強介の答え

『水塩化カルシウム』

教師のコメント

桐谷君は熱でも出していたのですか？

天宮龍人の答え

『ハーバー法は“ハーバー・ボッシュ法”の略である』

教師のコメント

何の略なのかを聞いてるわけではありません。

俺達が廊下を歩いていると、雄二が不意に口を開いた。

「ところで姫路や島田は教室にいるのか？」

「え？ まだ確認してないけど、いるんじゃないの？」

この時、龍人は一瞬だが強介が肩を震わせたのを見逃さなかった。

「多分、そろそろ仕掛けてくるはずだと思うんだが……」

雄二が不穏な言葉を口にする。そろそろ仕掛けてくるってなんだ？
また妨害でも始まるのか？

「……………雄二」

教室の前まで戻ると、ドアの前に立っていたムッツリーニが駆け寄ってきた。

「ムッツリーニか。何かあったのか？」

「……………ウェイトレスが連れて行かれた」

「ええっ！？ 姫路さんたちが！？」

龍人は歯を強く噛み締めた。

ギリリ。このことを原作を読んでる強介は知っていたはずだ。
なのに、なんで助けようとしなかったんだ？

俺の頭の中は『強介に対する怒り』で埋め尽くされた。

「強介！」

龍人は隣にいた強介の胸倉を勢い良く掴んだ。それを見ていた明
久らが止めようとする。

「龍人、落ち着きなよ」

「そうだ。これぐらいは予想の範疇はんちゆうだったんだからな」

と、だが俺の怒りは治まるどころかどんどん強くなっていく。

「強介、おまえは何が起きるかわかってたんだよな！？ だつたら
なんで、助けに行こうとしなかった！？ なんで、姫路たちの傍
にいなかった！？ なんで、俺たちに相談しなかった！？」

強介は龍人の手を振り払うと叫びだした。

「お前に、オレの何がわかるんだよ！？ オレも最初は言おうと
思っただよ！ 相談しようと思っただよ！」

「じゃーなんで、言わなかったんだよ！」

「言ったら、明久たちの“ため”にならないだろーが！？ それ
に、オレは龍人とは違うんだよ！ 龍人みたいに何でも出来るわけ
じゃないんだよ！？」

龍人は強介の言葉を聞いた瞬間、怒りが心の奥から込み上げてき
た。

「強介！ お前は自分の妹が俺に助けられた時、思っただよじゃな
いのかよ！？ 『臆病じゃなくなる』つてよ！？」

「ああ、思っただよ！ でも、オレには出来ないんだよ！ オレは
お前みたいにケンカが強いわけでもなかった！ お前に武術を教わ
つてからは少しマシになった！ でもな、オレ達は主人公ヒロキではない
んだよ！ 怖ければ足も震え、時には逃げ出したくもなるんだよ！

お前にオレのこの気持ちが分かるのかよ！？」

龍人は歯を噛み締めた。

ギリリ。

「おまえの気持なんてわからねーよ！ わかりたくねーよ！ お前は逃げてるだけだろ！ 自分の弱さに勝とうとしないだけだろーが！ そんな奴の気持ちなんてわかりたくねーよ！ お前はさっき『オレ達は主人公じゃなく』って言ったな。確かに、俺たちは主人公じゃない。だがな、脇役わきやくでもねーだろ！ 人はな、選択によつては主人公にも脇役にもなれるんだよ！ 一度脇役になったら、自分を変えればいい。主人公になれるようにすればいい。簡単なことだろうが！」

「そんなのキレイごとじゃねーかよ！？ どれだけ努力をしても報われるって保証がないってのと同じだろうが！ それにもしもオレが助けていたら、さっきも言ったように明久達のためになんねーだろうが！」

強介がそう言い捨てた瞬間、龍人は強介の頬に拳を叩き込んだ。

強介は尻餅をつくようにして地面に崩れ落ち、殴られた頬を撫でた。その強介を見下ろす感じで龍人は言い捨てた。

「それが変わろうととしてないってんだよ！ お前は昔から『誰かのため、誰かのため』と言ってるが、それはいいわけじゃねーか！ お前は自分が臆病って認めたくないから『誰かのため』って言って、自分を守ってただけじゃねーかよ！」

強介は無言だった。それを見た龍人は最後の言葉と言わんばかりに吐き捨てた。

「ツチ。これだけ言ってもわからねーのかよ！？ もういい、一生そついう生き方してやがれ！！ 一生、自分を守るように生きていきやがれ！？」

龍人がこの場を去ろうとしたところで、さっきまで龍人と強介の怒鳴りあいを見ていた雄二が訊ねた。

「どこに行くんだ？」

「姫路達を助けに行くんだよ！！」

「場所をわかってるのか？」

「わからねーよ。だが、動かずにはいられないんだよ！？ 止め

たつて無駄だぞ!？」

龍人はそう言い捨てると、この場を後にした。

「あ、おい、待てよ!？」 ムツツリー二、行くぞ」

「……………わかった」

龍人を追い掛けるようにして、雄二とムツツリー二もこの場を後にした。

S I D E 吉井明久

龍人がこの場から龍人たちが居なくなり、この場にいるのは僕と強介だけとなった。

僕は未だに頬をさすっている強介の傍に行き、訊ねた。

「強介と龍人って、昔からの知り合いなの?」

強介はゆっくりと口を開いた。

「そうだよ。僕と龍人は知り合いだよ。転生する前からね」

「転生?」

僕はその単語を聞きなおした。転生って生まれ変わるってことだよね? どういうことだろ?

「明久、誰にも話さないって誓えるか?」

「もちろんだよ」

僕は心から頷いた。どんな事情があっても、僕たちはもう友達だからね。言わないでって言われたら言わないよ。

「そうか。なら、話してもいいかもね。僕たちは一度死んでいるんだよ」

僕は『一度死んでる』って言われた瞬間、嘘かと思った。だが、強介の顔が嘘をついていないと教えてくれた。

「どういうこと?」

「そのままの意味さ。僕達は一度死んでるんだよ。そして、神が僕達をこの世界に転生させたんだよ。僕と龍人は前の世界から知り合いだったんだよ。龍人が言った通り、僕は憶病だったんだ。妹が

イジメられてても助けられなかった。本当、バカ、だよな」

強介の目から一滴の涙が垂れ落ちた。

「龍人が殴ってくれたおかげで気づけた。自分は逃げてただけだつてね。でも、もう、遅いよな。本当、僕って最低だよな。笑いたいなら笑えよ、明久」

強介が言う。でも、笑えるはずがなかった。信じられない真実を打ち明けられてビックリしてるってのもあるけど、今はもつと違う何か僕の中にはあった。僕はそれを強介に言うことにした。

「笑わないよ。僕もどこかで間違ってたなら、強介みたいになつてたかもしれないからね。それよりも僕は、強介が自分の間違いに気づけたのはすごいと思うよ。誰しも最初っから完璧な人間なんていないんだから。もしも最初っから完璧奴がいたら、そいつは人間じゃないんで神かなんかだよ。人は失敗をすることによって成長するんだから。だから、後で龍人に謝ろう。このまま二人が、口をきかなくなつたら、僕もつまらなくなつちゃうからね」

僕は強介に手を差し伸ばしながら言葉を紡いだ。

「ほら、僕達も行こうよ。姫路さん達を助けに、主人公になりに行こうよ」

強介は自分で立ち上がり、眼元に残っていた涙を裾で拭い、大きく頷いた。

「そうだな。最初っから完璧な人間なんていないよな。よし！

姫路たちを助けに行こうぜ！」

僕は頷いた。正直、嬉しかった。強介が元気になつてくれたことが。間違いに立ち向かつてくれることに。

僕たちは龍人達を追いかけるように、この場を後にした。

第14問 最初っから完璧な人間なんて存在しない！！（後書き）

なんか、説教じみた話になってしまったような感じがします。どうか、気にしないでください。自分は他人に説教を言えるほど偉くないので。

それでは、アドバイス等がありましたら待っています。

第15問 主人公になる為に (初) (前書き)

原作が崩壊していきます。今回バカテスは無しです。

第15問 主人公になる為に (初)

場所は文月学園から歩いて五分程度のカラオケボックス。そのパーティールームに姫路は連れて行かれたらしい。

にしても、強介にきつく言いすぎたか？ 後で誤っておこう。でも、その前にやることがあるな。

「よし、入って姫路たちをさらった奴らをぶっ飛ばすことにするか」

「ちよ、待て」

後ろから雄二の声が聞こえてきたが無視。とりあえずドアを開け放つ。

「よう、てめーら覚悟は って、おい雄二にムツツリーニ。どうなってるんだ？ 誰もいないぞ？」

部屋の中には誰もいなかった。代わりに、テーブルの上に紙が置いてあったので手に取る。雄二とムツツリーニも横から覗く。

「えーっと、何々。『残念だったな。お前らがここに来ることはわかってたんだよ。三人の女を助けたければ、このカラオケボックスから歩いて十分程度の廃ビルに來い。女には手を出さないから安心するんだな』っか。よし、こいつらを殺しに行こう」

龍人は爽やかに言い放つ。

「ま、待てよ龍人。これは畏だぞ！ 姫路たちには手を出さないらしいから、一回作戦を っ」

「人をさらうような奴が守ると思うのか？」

「うっ！」

雄二が言葉に詰まる。

「なっ？ 雄二も守るとは思わないだろ？ だったら、早く行くことにしようぜ。姫路たちが危ないからな」

俺達はカラオケボックスを出て、廃ビルに向かって走り出した。

僕と強介は龍人たちを追いかけている時に、姫路さんたちを連れていく輩を見つけた。指揮を執っているのは僕たちと同じ年ごろの少年だ。

『おい、その女たちには手を出すなよ!! 手を出すようなやつがいたら、迷わず俺が殺るからな!』

『分かってるつうの。うるせー奴だな! 自分がリーダーに任命されたからって、いい気になるんじゃないっての!?!』

『おい、てめー今なんつった?』

少年は自分の悪口を言った男に近づいて行き、腹にナイフを突き付けながら告げる。

『次言ったら、お前を最初に殺ってやるからな!』

『わ、悪かったよ。もう、言わないからこのナイフをしまつてくれよ春岡』

『分かればいいんだ』

少年はナイフを懐にしまうと、先ほどまでとは別人のように爽やかに告げる。

『おい、お前ら、早くしろよ! もう、文月学園の連中は書置きを見てるだろうからな!』

『『『わかりましたっ!』』』

男達は何処かに歩いて行く。僕らは男たちをつけることにした。

男達は廃ビルに姫路さんたちを連れて入って行った。こんな廃ビルあつたっけ?

「明久、春岡とか言われた奴は迷わずにナイフを突き付けた。これは危ないかもしれないよ」

不意に隣にいた強介が話しかけてきた。

「だね。ああいう輩は何をするか分からないからね。さつきは姫路さんたちに手を出さないようなこと言ってたけど、本当に手を出さないかは怪しいところだよな」

「だよな。早く助けたほうがいいかもな」

「じゃーそうと決まれば、乗り込む？　ざっと見た感じでは7・8人だったし」

「よし、そうと決まれば行こうぜ！　主人公ヒロになりにな」

「オーケー。遅れないでよね」

「ふん。僕のほうが強いってことを見せてあげるよ」

強介はめちやくちや爽やかに答えた。正直うざいと思った。でも、今はあのクソ野郎共を倒すほうが先決だよな。

「よっしゃー行くぞー！！」

僕達は廃ビルに乗り込んだ。

「アキ！？」

「吉井君！？」

姫路さん達は手足を縛られ、廃ビルの隅に座らされていた。

春岡と呼ばれた少年は一人だけ椅子に座りながら、乗り込んだ僕達に告げた。

「よく来たな。でも、二人つてのはバカのことじゃないか？

こっちは、これだけいるってのにさ」

春岡は言い終わると、指と指を弾いた。廃ビルの中にパチンと、音が響き渡った瞬間にあつちこつちから男が出てきた。僕らが入ってきた場所も男たちによつて通れなくなる。

「さーこれから楽しい時間の始まりだ！　野郎共、やっちなえ！」

「……おおっ……」

男たちは僕達に迫ってくる。その中には、鉄パイプを持っている者、ナイフを持っている者、金属バットを持っている者がいた。

なんて汚いやり方なんだ！？　姫路さんたちもこうやって捕まったのかな？　だとしたら、許せない！

ブチッ。僕の中の何かが切れたみたいだ。いや、僕だけでなく強

介の中の何かも切れたみたいだ。

「てめーら！？ オレに勝てるでも思ってたのか！？ アア？」
「どうやら強介は感情が高まったりすると、一人称が『僕』から『オレ』に変わるみたいだ。」

男達は強介の言葉で、数歩後ろに下がった。どうやら、怖くなつたみたいだ。これはチャンスかもしれない。

「強介」

「ああ。わかってるよ」

僕達は頷き合つと、前に走り出した。

「こ、こつちに来たぞ！？ 全員で畳み掛ける！？」

一人の男が叫ぶと、僕達に最も近い二人の男が鉄パイプを振り上げた。だが、振り上げる時に隙が生まれる。僕と強介は互いに別の男の腹に拳を叩き込む。

二人の男は膝から崩れ落ちた。なんだ。あんまり強くないや。これだったら、行けるかも。

僕達は邪魔になる男を全て一撃で仕留めながら、春岡って言うリーダーのもとに走る。後、50メートル。あいつさえ倒しちゃえば、他の男たちも逃げていくだろう。

後、10メートル。手を伸ばせば届きそうな距離。なのに春岡は笑っていた。まるで、すべてが計算通りのように。

瞬間、僕と強介はいきなり横から現れた男たちに顔面を殴られた。僕と強介は同時に膝から崩れ落ちた。

春岡はそんな僕らを見下ろしながら告げる。

「本当、馬鹿だね。もつと賢くなれよ。おい、てめーら！ こいつらをやっちまえ！？」

僕らを男達を取り囲んだ。これは、絶体絶命だ。

一人の男が鉄パイプを振りかざし、僕に振り下ろす。もう、駄目だな。もつと、遊んでおけばよかったかな？ おいしいものを食べとけばよかったかな？

僕がそんなことを考えている間にも、鉄パイプは迫っていた

o

第15問 主人公になる為に (初) (後書き)

読んでくれた方、ありがとうございました。

第15問 主人公になる為に (終) (前書き)

第15問 主人公になる為に (終)

鉄パイプが僕に当たりそうになった時にそれは起きた。鉄パイプを振り下ろすよりも先に、男が崩れ落ちたのだ。

「よう、明久に強介。無事で何よりだぜ」

男が崩れ落ちたことよって現れた人物、それは龍人だった。

「さてっと、てめーら！ 覚悟は出来てるよな！？ 俺の仲間に手を出したんだ。無事に帰れると思うなよな！？ 雄二にムツツリー二！ お前らは姫路たちを助けることに専念しろ！？ 俺は片っ端から倒すからよ！！」

龍人はそう叫ぶと、一瞬のうちに左右にいた男の顔面に拳を突き刺していた。

S I D E 天宮龍人

こいつらだけは絶対に許せねー！ 姫路たちをさらっただけでなく、明久達に怪我を負わせようとしたんだからな。生きて返すもんか！？

龍人は左右にいた男の顔面に拳を突き刺した。男は顔面を抑えながら倒れた。それを見ていた他の男がナイフを龍人に向け、走り出す。龍人は男のナイフが自分に届く前に、男の腹を殴る。男はナイフを落とし、腹を押さえながら崩れ落ちる。

「どうした！ こんなもんか！？」

「く、くそー」

男たちは龍人に襲いかかる。龍人の前には鉄パイプを振りかざす男。後ろにはナイフを持って走ってくる男がいる。

「そんなんじゃ、俺は倒せないっつーの！？」

龍人は地面に両手をつくつと、その手を軸に体を回した。前と後ろにいた両方の男に回し蹴りが炸裂する。龍人は二人の男が崩れ落ち

るのを確認すると、地面を力強く押し、飛ぶようにして足を地面につけた。

龍人の圧倒的な強さを目の当たりにした男たちが数歩後ろに下がる。それを見ながら、首をポキポキと鳴らす。

「お前ら、全員でかかってきたほうがいいんじゃないのか？ まあ、どつちにしろ結果は同じだろうがな」

不敵な笑みを浮かべながら告げる。男たちはそれが気に入らなかつたのか、『なめんじゃねー』と言いながら龍人目掛けて走りだす。それを待ってましたと言わんばかりに龍人は再び笑みを浮かべる。

横からナイフを持って走ってくる男の顔面に拳を叩き込み、後ろから来る男は右足を後ろに飛ばすようにして蹴りつける。前から来る男にはそのまま右足を前に飛ばすようにして蹴りつける。

三人の男が倒れても、まだ男は沢山いる。再び前から走ってくる男の頬に裏拳を叩き込むと、そのままの勢いで後ろの男にも裏拳を叩き込む。

何度も似たようなことを繰り返すうちに、あっという間に残ったのは春岡と言う人物だけとなった。

春岡は完璧だった作戦を狂わされたかのように、慌てて椅子から立ち上がる。春岡は立ち上がると、懐に隠してあったナイフを取り出した。

「く、来るんじゃない！ 来たらお前の顔面を刺すぞ!？」

春岡はナイフを向けながら告げる。だが、龍人は右から左に聞き流して春岡に近づく。後、10メートルの位置まで龍人は迫る。

「ち、畜生!？」

春岡は叫びながらナイフを龍人の顔面に走らせた。

瞬間、龍人は拳を力強く握りながら数歩顔を右にズラした。ナイフは龍人の頬をかすり、龍人の拳は春岡の腹に突き刺さった。春岡はナイフを落とし、そのまま気絶する。

龍人は春岡を地面に放り投げると、明久たちが集まっている方向に歩み寄った。

「ふう。姫路、美波、葉月ちゃん。大丈夫だったか？」

龍人は雄二とムツツリー二により助け出された三人に問う。

三人は静かに首を縦に振った。

「そうか。それはよかった。よし、次はっと」

龍人は強介の方に振り返り、告げた。

「強介、悪かったな。さっきは言いすぎた」

強介は自分が謝られたことに一瞬驚いたが、すぐにいつもの調子に戻り、龍人に言った。

「僕こそ悪かったよ」

と。その後全員は話しながら、学校に戻った。それぞれの思いを抱いて。

今、Fクラスには俺と明久、雄二しかいない。強介はいつの間にか帰っていたため、いない。

「おい、ババア。何か隠してるだろ？ 誘拐まで起きたんだから

話してもらっぞ」

雄二が呼び出した学園長に問う。

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったか……すまなかつたね」

と、突然学園長が俺らに頭を下げてきた。どうやら、心から詫びてるようだ。もしかしたら、以外と責任感が強いのかもな。年下の俺らにきちんと頭を下げるのだから。

その後、俺らは学園長から事情を聞いた。本当の狙いは如月ハイランドのペアチケットではなく、もう一つのほうの『白銀の指輪』だということ。それは一定の点数を超えると暴発するってことも。暴発させるために教頭が今回の一連の事件を行ったということも。

こうして学園祭初日は幕を閉じた。

S I D E 桐谷強介

僕はいち早く家に帰った。

何かがおかしいと思った。原作では春岡って奴は誘拐事件の時に出てこなかった。もしかしたら、原作が崩壊してるのではないか？

「はあゝ。崩壊したらどうしよう……」

強介は一人呟く。誰もいないってことはわかってる。でも、口に出さずには入れなかった。

「はあゝ。今日はもう、考えるのは止めて、シャワーを浴びて寝よ」

こうして、強介の学園祭初日は幕を閉じた。

第15問 主人公になる為に (終) (後書き)

読んでくださった方、ありがとうございます。それと突然ですが、自分はメインヒロインを工藤愛子が木下優子のどちらかにしようと思っっています。

失礼しましたそれだけです。感想などがあれば待ってます。

第16問 花火は時に凶器となる(前書き)

今回はどこで区切っているのかが分からず、長くなってしまいました。それでも読んでいただければ幸いです。

第16問 花火は時に凶器となる

【第十四問】

以下の問いに答えなさい。

『冠位十二階が制定されたのは西暦（ ）年である』

姫路瑞希の答え

『603』

教師のコメント

正解です。

坂本雄二の答え

『603』

教師のコメント

一体どうしたのですか？ 驚いたことに正解です。

吉井明久の答え

『603』

教師のコメント

君の名前を見ただけでバツをつけた先生を許してください。

天宮龍人の答え

『603』

教師のコメント

あなたも正解ですか。この調子で行くと珍しく全員正解みたいです
すね。

桐谷強介の答え

『645』

教師のコメント

先生の期待を見事に裏切ってくれましたね。645年は大化の改
新が起きた年です。この間の坂本君たちの対決を見ていて、間違っ
たのですか？

学園祭二日目。龍人と強介は校門の前に立っていた。今朝Fクラ
スに脅迫じみた手紙が送られてきたのだ。

内容は以下のものだ。【もしもFクラスコンビが優勝するような
ことになれば、Fクラスの出し物を妨害してやる】と。

中は鉄人にパトロールをお願いしてあるので平気だが、極力は学
校の外で終わらせたい。だから龍人たちは校門に立ち、大人数の不
良などが来ないように見張ってるのだ。

「まさか、お前がこの役割を買って出るとはな
不意に龍人が呟いた。

「ははは。僕もいつまでも臆病じゃないってことさ
強介は笑いながら告げる。

「ふ〜ん、なるほどね」

「それよりも、明久たちは大丈夫かな？ そろそろ決勝が始まる
みたいだし」

「あ、そうだったな。向こうには向こうで頑張ってもらわないとな」

「そうだね。負けたらあれだしね」

「つつても、原作では明久達が勝ったんだろ？ だったら、負ける心配はしなくていいんじゃないか？」

「まあ、そんなんだけど。この頃、原作が崩壊し始めてるんだよね。もしもって事もあり得るし」

強介がマジメに告げる。

「そうなのか。まあ、でも、あいつらなら心配ないだろ」

「だよな。それよりも、僕たちの方ががんばらないとね。どうやら、お出ましのようだし」

俺は強介の視線を追う。そこには、鉄パイプや鉄バットをからんからんと、音を立てさせながら近づいてくる男が10人いた。

「さうて。あいつらには生きたまま地獄を体験してもらおうかな」

「はは。それはいいね。でもどうせなら、社会的に終わらせてあげようぜ。丁度ここに、女物の下着と男物の下着が丁度人数分あるからね」

強介がそう言いながら後ろに置いてあつた下着を指さす。

「そりゃーいいな。丁度ここに、瞬間接着剤もあることだしな」

龍人は懐から瞬間接着剤を2つ取り出し、一つを強介に渡した。

「サンキュー。じゃー僕は男物の下着を担当するから」

「いや、俺が男物の下着を担当しよう」

もしも、女物の下着を持っているところを通行人見られてしまったら、俺の人生が終わってしまう。

「いや、いいよ。僕が男物で」

強介も俺と同じことを考えていたのか、食い下がる。

「いや、いいっての。お前は女子が好きだろ？ だから、お前に女物の下着は譲ってやるよ」

「いや、龍人に譲るよ」

二人はお互いの顔を見合い、笑い出した。

「元からお前には当てるつもりはなかったんだよ。本当の狙いはお前をこの場から遠ざける事さ」

龍人は横に置いてある男物の下着を手に取りながら告げる。

「なっ！ 龍人ずるいぞ!？」

「勝負にずるいもへつたくれもあるかよ!? じゃー俺は先に不良共の頭に男物の下着を被せてくるから、お前は女物の方をよろしくな」

「あ、おい!? はあ、仕方ないな。僕はこっちにしといてあげるよ」

それから数十分後

『『『覚えてろよおおおおおっ!』『』『』』』

10人の不良は頭に男物の下着・女物の下着を被せられた状態で走り去って行った。

しばらくしてから、パトカーのサイレンと不良共の叫びが聞こえたが気にしないでおう。

「間違いなくあの不良達の人生は終わっただろうね」
不意に強介が口を開いた。

「だな」

俺は強介に同意した。

本当、これからあの不良共はどうするのだろうか? もしかして学校でイジメられるんじゃないだろうか? まあ、仕方ないことかもしれないがな。それでも気の毒だと思う、

P r r r r r r

そんな事を考えていると、不意にケータイが鳴りだした。

俺はポケットにしまっていたケータイを取り出した。

「なんだ?」

『大変なんだよ龍人。僕らに負けた常夏コンビが学園長との話を録音して、学校中に放送するつもりなんだよ!』

「ま、マジかよ。っで、常夏コンビはどこに向かったんだ？」

『それが分からないから大変なんだよ。とりあえず、龍人達も探して』

「分かった。見つけたら知らせるから、お前達が見つけても知らせてくれ」

『オーケー。じゃー頼んだよ』

「ああ。任せておけ」

俺は強介に事情を話した。

「ってなわけなんだ。俺はあっちこっち探しまわるから、お前は原作の時にあいつらがいた場所に行ってくれ」

「了解つと。じゃー居たら知らせるよ」

「頼むぞ」

俺は外に居たので、グラウンドの隅などの人目につきにくいところを探す。しばらく探していると、明久達と合流した。

「マズイな……。随分時間をロスした」

「そうだね。あいつら一体どこに　ん？」

「くそっ。時間が　ってん？」

何か見慣れないものが校庭の隅に置いてある。あれはなんだ？

「見つけたか？　……。なんだ。ただの打ち上げ花火じゃないか」

「あ、恒例の締めに使っちゃつか？　ほあゝ。こんなところに保管してたんだな」

なんか、危ないところに保管しているな。盗まれたらどうするんだか？

「さすが試験校、お金があるね。こんなに大きな打ち上げ花火を用意しているなんて」

「本当だな」

「明久に龍人、感心してる場合か？　そろそろ向こうも何か動き出すはずだと　」

P r r r r r ! P r r r r r !

と、無線質な着信音が二つ響く。発信源は俺と明久のズボンのポケットに入っている携帯電話だ。

「なんだ？」

『見つけた。やっぱり、原作と同じ所に居たよ』

「そうか。つで、場所は？」

『新校舎の屋上だよ』

「本当か。つで、お前はどこに居るんだ？」

『見つけてからAクラスに移動して、今はコーヒーを飲みながらくつろいでるけど……』

「そうかそうか。屋上ってわかってたのにAクラスか。しかも言いようだと、結構前に見つけてたらしいな。本当、役立たずだな」

『なっ！ そんなこと』

プチ。ぷーぷー。

俺は話の途中でケータイを切った。

さてどうする？ 残る方法は ん？ 優勝したって事は白銀の指輪を持つてるんだよな？ だったら、

「……雄二に明久」

「……やっぱりお前も考えたか」

「……僕も同じことを考えたよ。どうやら、皆同じことを考えてるらしいね」

「それはそうだろ。他に手はないしな」

「そうだよな。他に方法ないよね。それじゃ、雄二お願い」

「了解だ。」

アウェイクン
起動」

「夏川、そつちの準備は大丈夫か？」

「大丈夫だ。へへっ。これが流れりや俺たちの逆転勝利だな」

「そうだな。これで受験勉強なんかしなくても おおおおっ

!？」

「なんだよ常村。何をそんなに驚いて　　ゲエツ!?　マジかよおっ!?!」

「とにかく伏せるおおっ!?!」

ドオンドオン!　パラパラパラ

「二人とも外したぞ!　龍人はもうちょい右斜め下だ。明久はそのままもうちょい下だ」

双眼鏡を覗き込んでいる雄二から指示が出る。ツチ。外したか

『Fクラス　吉井明久　&　天宮龍人

現代国語　70点　&　450点　』

ランダムで教科が選ばれるらしいな。今回は現代国語だ。

「よし明久。もういっちょ行くぞ!?!」

「オーケー」

さっきの感覚を思い出して微調整せいちょうせいを行う。

「いけ、点火っ!」

「了解!」

そしてライターで導火線に着火し、屋上目掛けて投げつける。

ヒュッ……　　ドオン!

屋上まで飛んでいき、打ち上げ花火が炸裂する。

「よし!　スピーカーと放送機材の破壊を確認!」

「今度は成功したか」

これが俺らの最後の手段。観察処分者の俺と明久の召喚獣で屋上まで打ち上げ花火を飛ばすのだ。

「明久、最後に常夏コンビに一発ぶちかまそうぜ」

「オーケー」

俺らが同時に一発ずつぶちかまそうとしたところで、

「貴様らあっ!　何をやっているかあっ!」

突然背後からドスの利いた怒鳴り声。まずい、召喚獣の制御が！

ヒュ〜……

ドオン！

「あ、明久に龍人！ 学校にブチ当たったぞ！？」

「なんだとお！！ 学校がまるでごみのおうだとお！？」

狙いのずれた花火は見事校舎の一角に激突した。

「き、君達！ よりによって教頭室になんてことをしてくれただ！」

ああ、やつちまったよ。これほどの事件は文月学校創設以来初だろ。

「吉井に坂本おっ！ それに天宮あつ！ 貴様ら無事に帰ることができると思うなよ！」

そしてお馴染みの低い声。この声は聞きなくなかったな。

「鉄人だ！ 雄二を生贄にして逃げるぞ！」

「そうだね。雄二、さようなら」

「な、お前ら」

言葉を遮るようにして二人で雄二の背中を蹴り飛ばす。

「西村先生！ 雄二が俺らの分まで罰を受けるそつだ！？」

「な、ちよつと、お前ら待ちやがれ！！」

雄二が先に走り出していた俺らに追い付く。

「逃がすか！ 今日絶対帰らせん！」

「ツチ！ 雄二ではダメだったか。だったら今度は明久が行け！」

「なんで僕が！？」

「うるさい！？ さっさと行きやがれ！」

「嫌だよ！ 龍人が行けばいいじゃないか！？」

「ふん。だったら強制的に生贄にしてやるぜ！」

俺は足を明久の前に出した。明久は俺の足に自分の足を引っ掛け、
転んだ。

「ははは。さらばだ明久！」

「無事に生きて帰って来いよ明久！」

「ちょ、先生！ 二人が逃げましたよ！ 追いかけていんですか？」

「あいつらは後だ。まずは貴様だ吉井いっ！」

後ろからそんな叫びが聞こえてきたが、そんなものは無視して走り続ける。だが、途中で明久が追い付いてしまった。

こうして鉄人との耐久マラソンが幕を開け、学園祭の思い出は恐怖と筋肉痛で埋め尽くされることになった。

第16問 花火は時に凶器となる（後書き）

長いのに読んでくれてありがとうございます。

この間言った通り自分はメインヒロインを工藤愛子と木下優子のどっちにするか悩んでいます。ここでひとつお願いがあるのですが、どっちがいいかを皆さんに決めてもらいたいと思います。

送られてきたものを読み、多かった方をメインヒロインにします。
×切は明後日の19日にします。どうかご協力ください。

第17問 打ち上げ(前書き)

今回バカテスはありません。

第17問 打ち上げ

「痛てて……。随分と殴られたよ……」

「くそつ、鉄人め。あの野郎は手加減を知らないのか」

「まっただけだぜ。手加減しろつてんだ」

結局逃げきれずに捕まった俺と明久と雄二。あれだけの騒ぎを起こしたのだから、良くて停学悪くて退学　　と思っていたんだが、実際は嚴重注意げんじゅうちゅういという拍子抜けするほど軽い罰だった。まあ、相手が鉄人だったせいで思いつき殴られたが。

ちなみに普通だったら俺は逃げ延びられていたはずだったのだが、明久達と喧嘩していたせいで捕まった。

「ババアが手を回してくれたんだろつな」

「今回の処分のこと？　そうだろうね。そうじゃなきゃこんなに軽い処分なわけないもんね」

「まあ、確かに明久達は学園長を助けたんだが……俺は何もしてないぞ？　なのに俺まで軽いのか？」

「多分それはあれだろう。龍人は姫路達を助けたし、教頭室に花火を打ち込んだからじゃないのか？　お前らのおかげで教頭室を調べることができるようになったんだしな」

雄二が俺の疑問に答えてくれた。

確かに教頭室があんな風になったら修繕しゆぜんするしかないからな。その時に学園長は徹底的に教頭室を調べ、その尻尾を掴むんだろつ。やつと納得できたな。

「む。やつと来たようじゃな。遅かったのう」

「……………先に始めておいた」

「ああ、ゴメンゴメン。ちよつと鉄人がしつこくてさ」

「そうなんだよ。鉄人がしつこくてよ」

集合場所である近所の公園は、既にFクラスメンバーで一杯になっている。特に店も取らずに、お菓子とジュースを用意しての公園

での打ち上げ。これはこれで楽しそうだな。あまりお金もかからないしな。でも、やっぱり出前ぐらいは取りたいな。出前を取るか。
「お主ら、もはや学園中で知らぬ者はおらんほどに有名になってしまったのう」

「……（こくこく）」

「……こいつと同じ」

「ちよつと静かにしてくれ」

俺は遮るように告げる。雄二は『ああ、悪い』と言って謝っていた。だがそんな者は聞き流し、携帯電話を取り出してピザ専門店に掛けた。

「もしもし。出前を取りたいんですけど」

『あ、はい。分かりました。場所は？』

「公園です」

『公園ですね。分かりました。何人分にしますか？』

「うーん。50人分で」

『かしこまりました。5分ほどでお届けにまいります』

「はい。よろしくお願いします」

プチ。プープー。

「ねえ、龍人なんの話？」

携帯電話を切ったところに明久が問う。

「ん？ 出前だよ出前。最後はパーッとやった方がいいだろ？」

「まあ、それはそうかもしれないけど……支払いはどうするの？ 結構頼んだみたいだけど」

「支払いのことは気にするな。俺の自腹だからな」

「っへ？ 大丈夫なの？ 全部支払えるの？」

「まあな」

実際、本当の目的はこつちにあつたりしなくもない。神がめちやくちや金を送ってくるので、増える一方で困っていたのだ。

「龍人はお金持ちなんじゃな」

「まあ、金持ちと言ったら金持なのかもしれないな」

俺は秀吉の問いに曖昧に答えておいた。

「じゃが、あんなに頼んでどうするのじゃ？ この人数では食べきれんような気もするのじゃが」

「あつ！？」

確かにそうだな。あんなに頼んで食い切れるか？

「うん。しょうがねえ。Aクラスの女子でも誘うか」

俺がAクラスの女子の電話番号を呼び出していると、雄二が何かに気付いたらしく口を開いた。

「ま、待て。Aクラスの女子って、まさか……？」

「そのまさかだぜ」

俺は不敵な笑みを浮かべながら告げる。

「や、止めてくれ！ 最後ぐらいは」

俺の携帯電話を奪おうとしている雄二の言葉を遮るようにして、明久に告げた。

「明久、雄二を捕まえてくれ」

「ん？ オーケー」

明久は雄二のことを羽交い締めにする。

「は、離せ！？ 離してくれ！！ 最後ぐらい翔子と離れさせてくれ！」

「明久、ちよつと雄二を黙らせる」

携帯電話を耳に当てながら告げる。

「ほいほい。ムツッリーニ」

「……………了解」

「む、ムツッリーニ了解するなうぐつ！？」

ムツッリーニが雄二の口を塞ぐ。乗りのいい奴らで助かるな。

『……………もしもし』

そうこうしている間に繋がったらしい。

「あ、霧島か。今な、公園で打ち上げをしてるんだが、出前を頼み過ぎちまったんだよ。雄二も居るから来てくれないか？」

『……………わかった。他にも連れて行っていい？』

「ああ、構わないぞ。つていうか、そうしてくれると助かる」

『……わかった。5分後にはつくと思う』

「了解。待ってるぞ」

プツプツ。電話が切れたらしいな。

俺は携帯電話をポケットにしまいながら告げた。

「もう、雄二を離していいぞ」

「了解」

「ぶつはあ。死ぬかと思った」

口だけでなく、鼻も塞がれてたらしいな。雄二の顔色が悪いな。

「雄二、喜べ。霧島を呼んでおいてやったからな」

「誰が喜ぶか！！ つつか、なんで龍人が翔子の電話番号知ってるんだよ？」

「あ、確かにそうだね」

「ん？ メールアドレスも知ってるぞ。それに俺だけじゃなくて、あいつも知ってるしな」

俺はジュースを飲みながら須川と会話している強介を指さしながら告げる。

「っへ？ 強介も？ 一体どうやってお教えてもらったの？」

「ん？ 知りたいかって、うわっ！」

『天宮会長。教えてくれ！』

『そうです。ぜひ我らに教えてくださいっ！！』

いつの間にか、Fクラスの半分以上が周りに集まっていた。

「あ、ああ。いいが」

『ありがとうございます！』

『天宮会長、最高！』

霧島のメアドを聞く方法を教えるだけなのに、最高つて……。まあ、面白いからいいか。

「じゃー教えてやるから聞き流すなよな。つっても、めちゃくちゃ簡単に手に入るがな。俺が手に入れるきっかけになったのはだ……」

『おい、全員静かに聞け!? 今から神のお言葉が聞けるぞ!?』
『そうだ。今から喋ったやつには死を持って償つぐなってもらうからな
!!!』

なんて恐ろしいクラスだ。

「……霧島のメアドを知るきっかけになったのはだな、俺が一言
（面白そうだからってのは省こう）雄二との関係を応援してやる」
って言ったらな、霧島の方からメアドを交換しようって言ってきた
んだよ

「ちよ、龍人！ なんてことを！」

雄二が何やら言っているが、Fクラスメンバーの『その手があつたか!?』と言う叫び声に消されてしまった。なんと哀れな。

「あ、そうこうしている間にピザが届いたようだな。明久、ムツツリーニ、秀吉、強介、その他数人手伝ってくれ」

「了解」

「……了解」

「了解じゃ」

『天宮会長からは霧島さんからメアドを教えてもらう方法を聞いたんだ、皆手伝いに行こうぜ!』

『『おおおお!』』

いや、数人でいいんだが。つま、楽になる分にはいいか。

俺達はピザをジューズがまとめられている近くに置いて行く。

「よし、ピザ運び完了」

『……天宮』

不意に声が掛けられた。俺は声の主の方に振り返る。そこには、霧島翔子、木下優子、工藤愛子がいた。

「お、こっちこっち」

俺は霧島たちを呼びよせる。

「ねえ、ボクと優子も来てよかったの？」

「ああ、気にするな。それに俺が呼んでくれと頼んだんだしな」

「そうなんだ。アタシ達も呼んでくれてありがとね」

木下姉が満面の笑顔でお礼を言ってくる。その笑顔を隣で見ていると、た明久とムツツリー二が『な、なんて破壊力なんだ』……これは反則』などと言っていたが、気にしないでおこう。

その後明久は姫路と美波に捕まり、雄二は手足を霧島に縛られていた。ムツツリー二は工藤に遊ばれていた。秀吉は木下姉に何かを言ったらしく、どこかに連れて行かれていた。Fクラスメンバーと強介は楽しく会話をしている。

その中で俺は木に寄りかかり、寝ようとしていた。

「金が減ったからいいや。後は勝手に楽しんでもらおう」

俺は金を減らすことが出来ただけで満足だった。

「ふあ〜」

欠伸を一つ洩らすと、目を瞑る。寝てる時が一番幸せだもんな。

俺の意識が完全に闇の中に落ちようとした時、

『天宮君起きてよ』

『そうだよ。言いたいことがあるんだから寝ちゃダメだよ』

などと聞こえてきた。眠い。正直言って、ほっというてほしいんだが。しょうがねえ、話ぐらい聞いてやるか。

俺は起き上がり、声を掛けてきた人物の方に視線を動かした。そこには木下姉と工藤が居た。

「ん？ なんか用か？」

「いや、この間はちゃんとお礼をできなかったからさ……」

ああ、そんなことか。別に気にしなくてもいいんだがな。

「別に気にしなくていいって」

俺は素直に告げた。

「それだと、アタシ（ボク）が納得行かないのよ（いかないんだよ）」

「そ、そうなのか？」

俺は同時に言われたので驚いた。

「うん。だから、愛子と一緒にお礼を言いに来たのよ」

「そう言うことなんだよね。ってなわけで」

「この間はありがとう（ね）」

二人は頭を下げた。

「な、そこまでしなくていいっての」

俺は二人の頭を上げさせた。

「あのな。この間も言ったが、俺はお礼とか見返りを求めてやった訳じゃないんだよ。だから、気にしないでくれ。そして、眠らせてくれ」

俺は再び横になり、目を瞑った。俺はすぐに闇の中に吞まれることになった。闇に吞まれる前に、うっすらと二人の会話が聞こえたような気がした。

『天宮君って、かっこいい方だよね……』

『そう、だよね……』

などと。だが、俺の意識は遠のいていたので次起きる時には忘れてる。

こうして俺の学園祭二日目は幕を閉じたのだった。まあその後起きて家に帰り、再び眠りについたんだが。

第17問 打ち上げ（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございます。アンケートにも協力してくれると嬉しいです。

第18問 四人とラブレターとFクラス (初) (前書き)

今回もバカテスはついていませんが、楽しく読んでもらえれば幸いです。

第18問 四人とラブレターとFクラス (初)

学園祭から数日経ち、普通の学校生活を楽しんでいる僕と強介はいつもより1時間早くに学校に来ていた。それには理由があるのだ。

「明久、僕は龍人の靴箱に入れるからな」

「じゃー僕は雄二だね」

「ああ、入れ終わったら。言ったん家に帰るぞ。普通に登校してきたように思わせるんだ」

「了解」

僕たちが早く来た理由はこれだ。雄二と龍人の靴箱に自作したラブレターを入れる為だ。今日一日が楽しくなりそうだよ。

「よし、こっちは入れ終わったぞ。明久、そっちはどうだ？」

「こつちも終わったよ」

「よし。家に帰るとしよう」

「だね」

僕たちは家に帰った。

S I D E 天宮龍人

学園祭から数日経ち、普通の学校生活を楽しんでいる俺と雄二はいつもより30分早くに学校に来ていた。それには理由がある。

「雄二、俺は強介の靴箱に入れるからな」

「じゃー俺は明久だな。それにしても、龍人は面白いことを考えるな」

「だろ」

俺は強介の靴箱に自作のラブレターを入れながら不敵な笑みを浮かべていた。

そう。俺らが朝早くに来た理由はこれだ。強介と明久の靴箱に自作のラブレターを入れる為だ。

「よし。雄二も終わったな？ 校門の近くに隠れていようぜ」
「ああ、そうするか」

学校

SIDE 天宮龍人 / 30分後の

俺と雄二はいつもより早く来た明久と強介が校門をくぐり、しばらく歩いたところで自然に後ろから合流した。

「「よう、明久に強介」」

「「あ、雄二に龍人。おはよう」」

四人はこの時知るはずもなかった。この後に大変な目に合うことを。

四人はそれぞれの靴箱に置いてあったラブレターで一瞬意識をなくした。

「こ、これはどういうことだ？ なんで俺のところにも『ラブレター』もとい、『地獄への招待状』が届いているんだ？ こ、こうなったら

SIDE 坂本雄二

ど、ど、ど、どういうことだ。なんで俺のところにも『ラブレター』もとい、『地獄への招待状』が届いて居やがるんだ？ こうなったら

SIDE 吉井明久

ど、ど、ど、どうして、今日に限って僕のところまで『ラブレター』もとい、『地獄への招待状』が届いているんだろ？ いつもだったら、嬉しいかもしれないラブレター。でも、今日はまずいよ。こうなったら

ど、どうして、今日に限って僕のところまで『ラブレター』もとい、『地獄への招待状』が届いているんだろうか？ 普段なら叫びながら喜ぶところだが、今日はまずい。こうなったら

／Fクラスの教室

「工藤」「はい」「久保」「はい」

Fクラス全員がそろうと同時に鉄人がやってきて出席を取っている。いつもなら眠くなるのだが、今日はそれどころではない。この危険物ラブレターをどうにかしなくてはいけない。

多分、今のがしたら言う機会がなくなってしまう。

（（（よし！ 言ってる））） 四人の心が一つになった。

四人は同時に立ち上がった。

「ん？ どうかしたのか？」

鉄人が問う。だが、今はそんなの無視だ。

「「「皆、聞いてくれ！！ 実は」」」

四人は互いに指差す。龍人は雄二を。雄二は明久を。明久は強介を。強介は龍人を。そして、四人は同時に告げた。

「雄二が」「明久の野郎が」「強介が」「龍人が」

「「「ラブレターを貰ったそうだ！！ って、はあ！？」」」

四人は互いに顔を見合う。だが、時はすでに遅かった。

『『『殺せえええええっ！！』』』

Fクラスに怒号が響き渡る。

『なんで、あの四人なんだ！？』

『待て！ 一先ず落ち着くんだ！！』

『そうだ。全員、自分の周囲をくまなく探せ！！』

Fクラスメンバーが一斉に自分の周囲を探し出す。

『ダメだ！ 近くにはエロ本しかない！』

『貴様、それは没収だ！』

鉄人が一人の男子生徒に近づき、エロ本を没収する。

『あ、鉄人待ってくれ！ 俺の大事なコレクションなんだ！』

『では補習を受けるか？』

『そ、それは勘弁してくれ』

『なら、返さん』

『ちくしょー！！ 俺の大事なコレクションがチンパンジーに奪われてしまったー！！』

『貴様はやはり補習だつー！！』

『り、理不尽だー！っ！』

男子生徒は頭を押さえながら叫ぶ。当たり前だろ。

『おい、他の奴はどうだ？ 何か見つかったか？』

『ダメだ。この間Dクラスの女子と交換したメアドの紙しか入ってねえ！』

『そうか。お前も後で異端審問会に掛けてやるっ！』

『な、なんだとおおおおっ！ 須川副会長、許してくれ！』

『ダメだ。異端者には全員平等に罰を与えてやるっ！』

『そんなあああああっ！』

お前には同情するな。って、同情してる場合じゃねえっ！

『どうだ？ 他の奴は何が見つかった？』

『ダメだ。鞆の中にはCDとDVD以外入っていない』

『貴様、教科書とノートと筆記用具はどうした？』

『そんな物、今日は持ってきていない』

『お前も補習だー！』

『なんだとおおおおっ！』

『つぶ。チンパンジーの前でそんな事を言うからそうなるんだよ』

『おっと。貴様も補習に連れて行ってやる』

『な、なんでだあああああっ！』

どんどん補習送りになっていく。これで少しは敵が減らせそうだ。

その後、なんとか出席を取り終わった。その頃には5・6人が補習室送りになっていた。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉強に励むように」
出席簿を閉じ、教室を後にしようとする鉄人。この男には教室内に漂う殺気が感じられないのだろうか。

「ま、待つてくれ先生。俺らの命が危ないんだっ！」

「そ、そっただぞ西村先生。俺らの命がどうなってもいいのか？」

「そ、そうです。僕らを置いて行かないでくださいっ！」

「ど、どうか僕らを助けてください！」

俺に続くように雄二、明久、強介の順で鉄人を呼び止めようとする。

「貴様ら、何を言っている？」

鉄人が扉に手をかけたまま告げる。鉄人は何が言いたいんだ？

「問題児が居なくなってくれば楽じゃないか」

こいつ、本当に教師なのだろうか？ 人の皮をかぶった悪魔なんじゃないか？

「授業は真面目に受けるように」

「おい、この状態で真面目に受けられるとでも って、先生
行かないでくれ！」

必死の呼び止めもむなしく、鉄人は教室を出て行ってしまった。

この怒り狂ったFクラスに俺らを置いて。

「ツチ。こうなったら、明久逃げるぞ！」

「了解！」

俺は盾、もとい明久仲間にすることに成功した。

「強介は俺と来い！」

「了解！」

雄二は雄二で盾、もとい強介を仲間にすることに成功していた。

俺&明久と雄二&強介は別々の方向に逃げた。

『四人を逃がすなあっ！ 絶対に仕留めるんだっ！ 追撃隊を素早く組織しろ！』

『サーチ&デス』

後ろからそんな声が廊下に響いてくる。その声を聞きながら思った。Fクラスは嫌な団結力を持つてるんだな。

第18問 四人とラブレターとFクラス (初) (後書き)

呼んでくれた方、ありがとうございます。感想やアンケートを待っています。

第18問 四人とラブレターとFクラス (中)

『おい、四人は見つかったか?』

『まだです。見つけるどころか、誰一人姿を確認していない様子です』

『なつ、なんだと! 隠られる場所は限られているはずだ!

見つけれないことがあるか! 全員目を凝らして徹底的に調べろんだ!』

『了解です!』

俺と明久が女子更衣室に隠れていると、廊下から話し声が聞こえてくる。

「どうやら龍人と一緒に来て正解だったようだね。まさか、女子更衣室に隠れるとは思わないだろうからね」

「だろ? この間雄二が隠れていたことからヒントを得ただけだな」

「それでも凄いよ。龍人と一緒なら逃げ延びられるかもね」

「それはどうだかな。あいつら、こつこつ時だけ信じられない行動力やまとまりを見せるからな」

「そ、そうだった……」

明久が心の底から落ち込んでいる。これはうまい具合にはめられるかもしれないな。

「なあ、明久」

「ん? なに?」

「俺、もう行くよ」

「っへ? どこに?」

「廊下だよ。じゃーな」

「ちよ、ちよつと龍人。本気なの?」

俺は明久の肩を掴み、真剣に告げた。

「どつちかが生き残るにはこれしかないんだ」

そう。俺が生き残るにはこれしかない。

「わかったよ。でも、だったら僕が行くよ」

ツチ。このバカ、何か気付きやがったな。

「いや、いいって。俺が行く」

「いやいや。僕が行くよ」

ツチ。こうなったら

「あ、明久、お前の後ろで秀吉のスカートが大変なことに！」

俺は明久の後ろをビシッと、なりそうな勢いで指さし、告げてみたけど……流石に引かからないだろうな

「え！？ 秀吉のスカートがどうなってるの！？」

そうだよな。お前はそれほどまでにバカだったよな。

俺は明久が後ろを振り返り、きよるきよるしている間に廊下に出た。どうやら、この近くにはFクラスが居ないみたいだな。これは好都合。

「吉井明久が、女子更衣室に隠れているぞおおおおっ！」

俺は思いつきり叫んだ。俺の声が廊下に響き渡ったせいか、前方から地響きまで聞こえる。って、地響き？

俺は前方をよ〜く、見た。すると、黒い服をはおった見るからに怪しい奴らが近づいてきていた。

あ、あれはFクラス！俺が叫んでから一分も経っていないのに、何て速さだ。こうしちゃいられない。早く逃げなければ！

俺はすぐさまFクラスメンバーがくる方向とは逆の方向に走り出した。

後ろから「龍人！ やつてくれたなっ！」と叫びながら明久が追いついてきた。ツチ。もうすぐで明久だけが、^{ターゲット}標的になっていたものを。

「よう。明久。どうかしたのか？」

俺は追いついた明久にめちやくちゃ爽やかに告げる。

瞬間、明久が俺に跳び蹴りを走らせた。俺は跳び蹴りをしゃがむことによって回避。

「明久！ 何しやがるっ！？」

「ふふふ。まずは龍人から息の根を止めてあげるよ」

「ふん。お前には無理だな」

「なッ！？ どういうことだよ？」

「こっぴつことだ！」

俺は空いていた窓の体を乗り出し、飛び下りる。

上から『ふん。僕を甘く見ないでよね』と、聞こえてきたかと思っ
たら明久が俺の隣に飛び下りた。

「お前、正気か？」

横に飛び下りた明久に問う。

「もちろん正気だよ。っていうか、2階から飛び降りただけじゃ
怪我は負わないって」

「それは間違ってるぞ。きつと、平気なのは一部の人間だけだ」
と、つつこみたくなったが心のうちだけで堪える。

「それより、Fクラスメンバーが外に出てきたらどうするのさ？」
咄嗟に飛び下りた僕は何も考えてないよ」

怒りが収まったのか明久が問う。

「ん。そうだな。とりあえずAクラスにでも逃げこむか？」

「それが出来たら苦労しないよ」

「だよな。だったら一旦、我らがFクラスに戻ろうぜ」

「あ、それいいかも。逆転の発想だね」

俺と明久はFクラスに戻ってきた。

「思った通り、誰もいないようだね」

「そうみたいだね」

Fクラスには俺と明久以外は居ない。全員追うのに必死になって
いるのだろうな。

「ツチ！ 明久！ 窓から逃げるぞ！！」
「了解！」

俺らは窓に向かって走り出す。後、10メートル。間に合
「……………逃がさない」

わなかつた。ムツツリー二が行く手を阻む。こうなったら
仕方無い。あの手を使おう。

「わかつた。明久を生贄にささげよう。だから俺のことは見逃し
てくれ」

「ちよ、龍人！ また僕を生贄にする気！？」

「だからそう言ってるだろうが。さあ、三人ともどうだ？」

「そ、そうね。それなら天宮は見逃しても……………」

「そ、そうですね。天宮君は逃がしても……………」

「……………俺には関係ない。どちらも殺る」

ツチ。ムツツリー二の野郎、どうしても退かない気らしいな。だ
つたら

「食らえ！ アキミサイル！」

俺は明久の足を掴みながら言う。

「ちよ、ちよっと待って！ それだと、僕が一番ダメージを受け
るよね？」

「そうだが、それがどうかしたか？」

「どうもこうもあるか！ 結局、僕が生贄みたいなものじゃない
かよ！」

「みたいじゃなく、生贄そのものだ！」

「りゅ、龍人！ 後で覚えてるよ！」

俺らのそんな遣り取りを見ている三人は口を半開きにしていた。
チャンスっ！

「明久、今のうちに逃げるぞ！」

「オーケー」

俺らは扉の前で固まっていた姫路の横をすり抜け、廊下に出た。

「流石は龍人。生贄って言うてるわりには、ちゃんと僕と一緒に

逃げられる作戦を立てていたなんて」

さっきのは偶然だったのだが……黙っておこう。

「それより明久！ 屋上に行くぞ！」

「ん？ 了解」

俺らは屋上に向かったのだった。

第18問 四人とラブレターとFクラス (中) (後書き)

呼んでくれた方、ありがとうございます。アンケートの方ですが、10月21日の午後3時まで延長します。アンケートに答えてもらえると思います。

第18問 四人とラブレターとFクラス (終)

「ここに居れば安心だな強介」

俺たちは今、プールの男子更衣室で息を潜めている。

「いや、そうとも言い切れないよ雄二」

強介からは意外な答えが返ってきた。

「それってどういう意味だ？」

「そのまんまの意味だよ。だって僕らの敵はFクラスだけじゃないんだから」

「っは？ どういうことだ？」

「だからそのまんまだって。Fクラスよりももっと恐ろしい龍人が居るじゃないか」

「あっ！」

そう言えばそうだ。今回の明久と強介に自作のラブレターをあげようと言いだしたのもあいつだった。

「だ、だが、いくら龍人でも追いかけてるんだから」

ピンポンパンポーン《連絡致します》

そこまで口にしたところで、突然聞き覚えのある声で校内放送が流れ出した。

こ、この声は龍人か！？ 一体何をやるつもりなんだ！？

《Fクラスの野郎ども、聞きやがれ！ 今からAクラスの霧島翔子さんからありがたいお言葉が聞けるぞっ！ では、霧島お願いな》

《………わかった》

この声は間違いなく翔子だ！ 嫌な予感がする。

《………雄二にラブレターをあげたのは私》

「あ、あの野郎！！ なんてことをしてくれるんだっ！？ なっ
！ 強介離しやがれ！ 俺は今から龍人の野郎をぶち殺さなきゃいけないんだっ！！」

あの野郎。校内放送でなんてことを言いやがる。この気持ちを強

介は分からないのか!?

《……ついでに言うつと、龍人と強介にラブレターを渡したのも私。明久は先に瑞希があげ》

《おい、秀吉!! なんてことを言いやがるんだっ!?! 作戦が台無しだろうが!!》

《そうだよ秀吉!! 作戦が無駄になっちゃったじゃないか》

《な、なんじゃなんじゃ? なにゆえ、ワシがそこまで攻められなければならんのじゃ!?!》

《どう考えても、お前が作戦を無駄にしたからだろうが!》

何やら面白いことになってきやがった。翔子の正体は秀吉だったのか。

《貴様らあ! 放送室を勝手に使っんじゃないっ!》

《げっ! 鉄人! 何故ここにっ!?!》

《貴様らを連れ戻しに来たんだ! Fクラスは全員補習室に来るようにっ! 貴様らも行くんだ!》

《ま、待て! 最後にこれだけは言わせてくれ! Fクラスの野郎ども! ラブレターは俺ら四人が仕組んだ遊びだっ! 本気にするんじゃない!》

そこで放送は途切れ、俺らも補習室に行く羽目になった。

/ 補習教室

ラブレターの件は話したら分かってもらえた。だが、鉄人には分かってもらえず、Fクラスはめでたく補習を受けている。

俺の目の前には大量の問題集が積まれていた。といっても、後2冊なんだが。

「おい、チンパンジー! この問題集の量は多すぎるだろうっ!」

「天宮。お前にはもう一冊プレゼントしよう」

ドス、と目の前に問題集が一冊追加される。

「ひ、酷いぞー!」

「龍人。チンパンジーに何を言っても無駄だよ。日本語が分かるわけないんだから」

「そうだぞ龍人。チンパンジーには日本語は通じない」

「そうだよ龍人。チンパンジーなんだから僕らの言葉が通じるはずないじゃんかよ」

「吉井、坂本、桐谷。お前らにも一冊プレゼントしよう」

ドス、と三人の前に問題集が一冊追加される。

「酷いっ！ このチンパンジー、人間じゃない」

「明久、当たり前だよ。チンパンジーなんだから人間ではないんだよ」

「それよりもこのチンパンジー、俺たちを帰さない気だな」

「明久、桐谷、坂本。お前達には更にもう一冊くれてやるっ」

三人の前に更に一冊ドスン、と問題集が積まれる。その間に俺は残りの問題集も解き終わった。

「西村先生、終わったぞ」

俺は鉄人に全ての問題集を手渡す。

「ほう。早いな」

鉄人はぺらぺらと問題集を読んでいく。さて、このうちに逃げるとするか。

「それでは西村先生。さようなら」

俺が回れ右をしたところで鉄人に肩を掴まれた。

「待て。ほとんど『わかりません』と書いてあるぞ。これはどういうことだ？」

「あ、あははははははは。もう一冊追加してください」

ドスン、と俺の前にもさらに一冊積まれた。畜生。初めのうちだけ真面目に解いとけば、バレないと思っただが。

もうダメだ。この鬼教師には勝てない。

「四人ともバカだな。あのチンパンジーに逆らうなんて」

「俺みたいにおとなしくチンパンジーの目を盗んでエロ本を読ん

でいればいいものを」

はい、そのキミは病院に行つて来た方がいいよ。

『そうだよな。エロ本を見ていれば元気も出てくるのに』

はい、あんたも病院に行こうか。

『違うだろ。問題集をエロ本だと思つて解いてればいいんだよ』

お前は問題集をどうやってエロ本だと思つて解いているんだ？

『それよりも、ギャルゲーやってた方がいいぞ』

とうとう、二次元にも手を伸ばしたか。

『『『そ、そうか！ 二次元は裏切らないものなツ！？』』』

はい、Fクラス終了。

「お前ら、一体補修中に何をやっている！？ 一気に問題集を15冊増やしてやる！」

『『『うぎいいい つー！』』』

うぎいいい つー！ じゃねーよ！ 鉄人の監視がある時までそんな事をやるなよな。

この頃一段とFクラスがバカになったような気がする。

その後もどんどん問題集が増やされ、帰れるのは5時過ぎとなった。

第18問 四人とラブレターとFクラス (終) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございます。

第19問 現地集合はある意味一番楽だ！！

()内の『私』がなぜこのような痛みを感じたのか答えなさい。
父が沈痛の面持ちで私に告げた。

『彼は今朝早くに出て行った。もう忘れなさい』

その話を聞いた時、(私は身を引き裂かれるような痛みを感じた。
(彼のことはなんとも思っていなかった。彼がどうなるうとも知ったことではなかった。私と彼は何の関係もない。そう思っていたはずなのに、どうしてこんなにも気持ち揺れるのだろう。)

姫路瑞希の答え

『私にとって彼は自分の半身のように大切な存在であったから』

教師のコメント

そうですね。自分の半身のように大切であった為、いなくなったことで『私』はまさに身を引き裂かれたかのような痛みを感じたという事です。

吉井明久の答え

『私にとって彼は自分の下半身のように大切な存在だったから』

教師のコメント

どうして下半身に限定するのですか。

土屋康太の答え

『私にとって彼は下半身の存在だったから』

教師のコメント

その認識はあんまりだと思えます。

天宮龍人の答え

『彼のことが嫌い嫌いでしょうがなく……強介に続きます』

教師のコメント

テストなのに二人の回答が続くのはおかしいと思えますよ。

桐谷強介の答え

『……彼のことを大好きで大好きでしょうがないのに、彼が出て行ってしまったから』

教師のコメント

全然繋がっていませんね。それどころか、真逆のことを書いています。

新学期になって二カ月が経過し、日没の時刻にはつきりとした変化を感じ始めるこの時期。程よい気温で眠りやすかったのか、寝坊してしまった。

「お、龍人も寝坊？」

外履きから上履きに履き替えているところで後ろから声が掛けられた。そこに居たのは「頭の頂点から足の指先までバカでできている男、桐谷強介だった」のだ。

「それって、口に出して言うことじゃないよね……」

「ああ、俺も寝坊だぞ」

「いや、会話の内容が遅れてるから」

「やつぱり、口に出して言わない方がいいのか？」

「はい。もういいです。好きしてください」

強介がため息交じりに呟く。そんな強介を置き去りにするように、さっさと行ってしまう。

『つて、先に行くなよ！』

後ろから何やら聞こえてくるが無視。俺は早歩きでFクラスの扉の前に立ち、一気に開け放つ。

俺が入ってから数秒もしないうちに鉄人も入ってくる。

「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。HRを始めるから席についてくれ」

そう告げる鉄人は手に大きな箱を抱えていた。きっと今言っていた強化合宿のしおりが入っているのである。

俺は鉄人に言われたとおり、席に着く。他の連中も次々に席に戻っていた。

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まあ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば特に問題はないはずだが」

前の席から順番に冊子が回されてきたので、俺も一冊取って残りを後ろに回す。

「集合の時間と場所だけはくれぐれも間違えないように」

鉄人のドスの利いた声が響き渡る。

確かに集合時間と場所を間違えたらシャレにならない。学力強化が目的とはいえ、皆で泊まり込みのイベントに参加できないなんて寂し過ぎる（実際はめんどくせえから行きたくない）。一応チェックしておこう。

パラパラと冊子を捲って集合時間と場所の書かれている部分を探す。

今回俺らが向かうのは卯月香原という少し洒落た避暑地で、この街からは車だとだいたい四時間くらい、電車とバスの乗り継ぎで行くと五時間くらいかかるところだ。

「特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとでそれぞれ違うからな」

AクラスやBクラスはきつとりムジンとかで快適に向かうはずだ。まあ、どれだけ酷くても自腹で勝手にやるから構わないが。

「いいか、他のクラスと違って我々Fクラスは 現地集合だからな」

『『『案内すらないのかよっ!?!?』』』』

あまりの扱いに全級友が涙した。あ、俺はしてないぞ。現地集合の方がやりやすいからな。

第19問 現地集合はある意味一番楽だ!! (後書き)

読んでくれた方、ありがとうございます。

第20問 電車の中が一番盛り上がる気がする(前書き)

今回バカテスはなしです

第20問 電車の中が一番盛り上がる気がする

車窓を流れる緑の多い風景を見てみると、いつもの街から遠く離れた土地に來ていることが実感できる。電車に乗ってたったの一時間で随分と景色は様変わりて見えた。

「あと二時間くらいはこのままですね」

僕の正面に座っている姫路さんが操作していた携帯電話をポケットにしまう。乗り換えの案内でも見っていたのだろうか。

「二時間か。眠くもないし、何をしようかな」

狭い車内で行えることなんて限られている。携帯ゲーム機は没収されちゃうから持ってこなかったし、以外とすることがない。

隣の雄二と強介も欠伸をしているし。その雄二の隣の龍人はさっき『もつと金を消費させてほしかった』と言ったきり、会話に参加してこないと思ったら寝てるし。

「強介、何か面白いことはない？」

「ふ、ふふふふふ。やっと聞いてくれたな。面白いことならあるよ」

強介は不敵な笑みを浮かべながらトランプを取り出した。

「ん？ ババ抜きでもするの？」

「まー何をやるかは勝手に決めてもらっても構わないけどね。その後の方が面白いと思うよ？」

「っへ？ どういうこと？」

「明久はバカだな。強介が言いたいのはな、勝敗が決まった時の方が面白って言いたいんだろ？」

隣の雄二も話に参加してきた。よく言ってる意味が分からないや。

「まー明久、つまり、罰ゲームありってことだ」

首を傾げている僕に雄二が言う。なるほど。罰ゲームありか。それは面白そうだ。

「雄二、いい遊び知らないか？」

強介が雄二に問う。

「うん。そうだな。普通にババ抜きでいいんじゃないか？」

「そうだよな。皆知っているし」

「なら、そうするよ。やる人は集まってよね」

強介が皆に呼び掛ける。集まったのは僕と雄二、姫路さん、美波、秀吉だ。ムツツリー二と龍人は寝ている。

「それじゃ、始める前に確認するよ。『トップの人がビリの人に一つ、命令を下して不可能なことじゃなければやる』って罰ゲームで言い？」

「いいわよ」

「いいぞ」

皆が賛成する。一つ思ったけど、それって内容によっては罰ゲームじゃないよね？

「じゃー配るよ」

強介が全員にカードを配り、数分後、僕と強介の戦いになった。

強介の手元にカードが二枚、僕のところ一枚だ。

「明久、ババは右のカードだけ」

「ふん。その手には乗らないよ」

僕らはこの遣り取りをすでに5回行っている。絶対に負けられない。なんせ、一抜けが雄二の野郎だから。

「明久早く引けよ。次の勝負が出来なくなるだろ」

一人の阿呆が僕の集中を妨げる。雄二め。とんでもない命令をする気だな。

「そうじゃぞ明久。早く終わりにしてくれんと次の勝負が出来ないんじゃないぞ」

「そうよアキ。早くひきなさい」

さらに秀吉と美波までもが僕の集中を妨げてくる。しょうがない、神頼みでもするか。神様、僕に勝利を

『右がババだぞ。スウー』

龍人が告げる。皆の視線が集まった。龍人はまだ寝ているままだ。

今のつて、なに？ とりあえず、左のカードを引いてみよう。

「あ、そっちは」
左のカードはスペードの6。見事に僕の勝利。龍人、ありがとう。君はいつでも僕の味方なんだね。

「ちょ、龍人！！　なんで右側がババだつてわかるんだよッ!?」
寝ている龍人の胸倉を掴みながら強介が叫ぶ。本当にどうやって右側がババだつてわかったんだろうか？

その後もワイワイ盛り上がりながら何度かババ抜きをやってみる。ちなみに、罰は無しだった。

そうこうしていると、
「トントントン」
不意に両肩を叩かれた。

「あ、龍人にムツツリーニ。おはよう」

「目が覚めたようじゃな」

「……………空腹で起きた」

「同じく」

「あれ？　もうそんな時間？」
携帯電話を取り出して現在時刻を確認する。今は1時15分。いつもならとくに昼食を済ませている時間だ。

「確かに言い頃合じゃの。そろそろ昼にせんか？」

「そうだね。あまり遅くなると夕飯が入らないし」

滅多にありつけない貴重な栄養源だ。食べきれないなんて勿体無い真似はできない。

「あ、お昼ですね。それなら」
と、姫路さんが傍らに置いてある鞆を手繰り寄せて中から何かを取り出すようにしていた。嫌な予感が全身を駆け巡る。

「じつは、お弁当を作ってきたんです。良かったら……………」
予感的中。姫路さんが取り出したのは大きなお弁当箱だった。彼女の好意はともありがたい。けど、その料理は残念ながら命

に関わる新感覚テイストで出来てしまっている。

「姫路。悪いが　　って、うわっ！」

「すまぬ。ワシも　　な、なにごとじゃ！」

「……………調達　　やられた」

即座に自分の昼食を見せようと取り出したところで、全て龍人と強介が落とし、蹴り飛ばした。何て早業だ。

「いや〜。悪い悪い。お前らの弁当は俺らが食っというてやるから、お前らは姫路の弁当でも食べておけ」

「こっちは責任もって食べておくよ」

二人はあははと笑いながら三人の昼食をあっという間に完食し、姫路さんから弁当を受け取り、

「さあ、ムツツリーニ、雄ニ、秀吉、明久。食べるんだ」

「……や、やめ　　がくん」「」

龍人は無理矢理三人の口の中へ姫路さんの料理を放り投げた。そして、

「次は明久だな」

僕の方へ振り返る。

「ふん。口を開けなければ済む話だよ」

僕が口を閉じ様とした瞬間、何かが口の中に投げ込まれた。

そこで僕の意識は途切れた。

第20問 電車の中が一番盛り上がる気がする(後書き)

読んでくれた方ありがとうございました。

第21問 濡れ衣から覗きへ。それと

(初)

強化合宿一日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌

『電車が止まり駅に降り立つと、不意にめまいのような感覚が訪れました。風景や香り、空気までもがいつも暮らしている街とは違う場所で、何か素敵な事が起きる様な、そんな予感がしました』

教師のコメント

環境が変わる事で良い刺激を得られたようですね。姫路さんに高校2年生という今この時にしか作ることのできない思い出がたくさんできることを願っています。

土屋康太の日誌

『電車が停まり駅に降り立つと、不意に眩暈の様な感覚が訪れた。あの感覚はなんだったのだろうか』

教師のコメント

乗り物酔いです。

坂本雄二の日誌

『駅のホームで大きく息を吸い込むと、少し甘い様な、仄かに酸っぱい様な、不思議な何かの香りがした。これがこの町の持つ匂いなんだなと、感慨深く思った』

教師のコメント

隣で土屋君が吐いていなければ、もっと違った香りがしたかもしれませんね。

「ここって、どこ？」

明久が目を覚ました。どうやら電気ショックが効いたようだ。ちなみに雄二らは勝手に目を覚まし、今は隅で何かを話している。さつき聞こえた。犯人は女子生徒でお尻に火傷の跡がある。『つてのは知らない奴が聞いたらどん引きするな。』

ついでに言うと、俺らはさつき事情を聴いている。

「明久心配したよ。それと抱き枕まくら」

強介が明久に言う。ちなみに『抱き枕』を言うように仕向けたのは当然俺だ。にしても、語呂が悪い。今度変えさせよう。

「強介。それって本当に心配してる？」

明久が首をかしげながら問う。それに対して強介は爽やかに言う。

「もちろんさ。それと抱き枕」

「なに？ 僕の命は抱き枕と同等なの！？」

「そんなわけないだろ。それと抱き枕」

「絶対に、心配してなかったよね！？」

「まあまあ。それよりも僕らは六人でこの部屋を使っらしいよ。

それと抱き枕」

「へえそうなんだ。確かに部屋は八人で寝られそうだよ。もしかしたらこの部屋に問題児を集めたのかな？」

とうとう『それと抱き枕』を無視し始めたな。次はどんな言葉を言わせるか……。

「明久が起きたみたいだな」

不意に声が掛けられた。

「なんだ、雄二か。明久に用でもあったのか？」

「まあな。だが明久だけでなく、この場に居る全員にこれを聞いてもらいたい」

「……………（こくこく）」

雄二の隣に居たムツツリーニが取り出したのは小さな機械。これは？

「……………小型録音機。昨日学校中に盗聴器を仕掛けた」

「ま、マジかよ！ それと抱き枕」

お前はもう黙っててくれ。そろそろウザくなってきた。

ピッ 《 らっしゅい 》

スイッチを押すと、内蔵されている音源からノイズ混じりの声が部屋に響いた。

「随分と音が悪いね」

「校内全てを網羅（まじら）したのなら仕方ないだろう。音質や精度に拘る余裕はないからな」

「それアウトだよっ！ それと抱き枕」

だからお前は黙ってる。

かろうじて女子の声はわかるが、人物は特定できそうにないな。

《……………雄二のプロポーズを、もう一つお願い》

対する女子の声。話し方からしてこっちは霧島だな。プロポーズって言うと、この間秀吉に『雄二がプロポーズしたらどうなるか？』みたいな話になり、秀吉が真似していた奴か？

「しよ、翔子……………！ アイツ、『俺のことをそこまで』もうって、変な言葉を入れんな！」

強介が面白いことをし始めた。俺も混ぜろっ。

「よっほど早く『雄二の』『自由を』手に入れたいんだねって、変な……………これは間違ってないか」

「俺の自由はあいつに握られてるのか？」

「……………続きは？」

ムツツリーニが問う。

「ああ、霧島のはどうでもいい。犯人のヒントがわかるのを願います」

「俺的にはさっきの続きが気になるんだが……………」

「……………わかった」

ムツツリーニが機械を操作する。

《 相変わらず。凄い写真ですね。こんな写真を撮っているのがバレたら酷い目に遭うんじゃないですか？ 》

《ここだけの話、前に一度母親にバレてね》

《大丈夫だったんですか？ 》

《文字通り尻にお灸を据えられたよ。全く、いつの時代の罰なんだか》

《それはまた……………》

《おかげで未だに火傷の痕が残ってるよ。乙女に対して酷いと思わないかい？ 》

それ以降は他愛もない商談がいくつか続いた。

「……………わかったのはこれだけ」

「なるほどね。それでお尻に火傷の痕が」

「まあ、乙女と自分で言っていたから女子だろうな」

皆で女子の見る方法を考えてからしばし（俺は別のことを考えていた）、明久が言う。

「そうだ！ もうすぐお風呂の時間だし、秀吉に見てきてもらえばいいのか！」

「明久。なぜにワシが女子風呂に入ることが前提になっておるのじゃ？」

本当、明久はバカだな。

「それは無理だ、明久」

雄二が何かを明久に放つてよこす。

「どうして無理なのさ？」

「いや、じゃからワシは男じゃと」

「3ページ目を開いてみる」

雄二に言われたとおり明久が3ページ目を見る。俺と強介も3ページ目を覗き見る。

合宿所での入浴について

・ 男子 A B C クラス	: 2 0	∪	2 1	: 0 0	大浴場 (男)
・ 男子 D E F クラス	: 2 1	∪	2 2	: 0 0	大浴場 (男)
・ 女子 A B C クラス	: 2 0	∪	2 1	: 0 0	大浴場 (女)
・ 女子 D E F クラス	: 2 1	∪	2 2	: 0 0	大浴場 (女)
・ F クラス 木下秀吉	: 2 0	∪	2 1	: 0 0	個室風呂?

「……くそっ！ これじゃ秀吉に見てきてもらうことができない

」！

その発想自体が間違いだぞ。

「そっいうことだ」

こっいうことじゃなくても無理だぞ。

「どうしてワシだけが個室風呂なのじゃ!？」

もっともな意見だな。

その後も六人でうんうんと唸っている時のことだった。

ドバン!

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい!」

凄いい勢いで僕らの部屋の扉が開け放たれ、女子がぞろぞろと中に入ってきた。

「な、なんだ!？」

「な、なにごとじゃ!？」

「木下と天宮はこっちへ! そっちのバカ四人は抵抗を止めなさい」

い！」

先頭に立つ島田美波が、咄嗟に窓から脱出しようとしていた明久、雄二、ムツツリー二、強介の機先を制した。

「なんで逃げる必要があるんだ？」

ひとり呟く。

「仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ？」

窓を閉めながら女子勢に向き合う雄二。他の三人も貴重品の入った鞆を下ろしながらそちらを向いた。

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。あなたたちが犯人だつてことぐらいすぐにわかるというのに」

島田の後ろから出てきて高圧的に言い放つたのはCクラス代表の……… 小山だ。後ろで並んでいる大勢の女子もうんうんと頷いている。

「犯人？ 犯人つてなんのことさ？」

「コレのことよ」

小山が明久達の前に何かを突きつけた。

「…………… CCDカメラと小型集音マイク」

その手にやたらと詳しいムツツリー二が言う。

「女子風呂の脱衣所に設置されていたの」

ふむふむ。あれが女子風呂の脱衣所に

「え！？ それって盗撮じゃないか！ 一体誰がそんなことを」

「とぼけないで。あなたたち以外に誰がこんなことをするつていうの？」

この台詞を聞いて、秀吉が小山の前に歩み出した。

「違う！ ワシらはそんなことをしておらん！ 覗きや盗撮なんてそんな真似は」

「

友の無罪を立証しようとして、秀吉が声を荒げていた。

「天宮はどう思う？」

不意に島田が俺に問う。

「ん？ 俺か？」

「そう、天宮よ」

「そうだな。強介」

俺は強介に向き直り言う。

「お前の好きなものはなんだ？」

「っへ？ 僕の好きなものは……寝ることと遊ぶことと女子。それと抱き枕」

強介が爽やかに言う。

「皆、やっておしまい」

普通に考えてそうなるよな。

素早い動きで周りを囲まれ、明久とムツツリー二と強介は石畳の上に乗らされていた。これは大変なことになったな。

「龍人頼むっ！ この場をなんとか収めて」

「嫌だ」

「な、なんで！」

「面白いことが大好きだからさ」

不敵な笑みを浮かべながら告げる。

「な、何て薄情　ぐふっ！」

三人の膝の上に重石が載せられた。

三人の拷問はその後も続きましたとさ　ちなみに言っと、雄二は霧島に捕まってました　マジでこの世界は楽しいわ

第21問 濡れ衣から覗きへ。それと

(初) (後書き)

アドバイスなどがあれば待っています。

第21問 濡れ衣から覗きへ。それと

(終)(前書き)

アンケートは今日で終了します。今回は両者一票ずつで決まりましたので、日を改めてから再びアンケートを取ります。
それでは本編をお楽しみください。

「なんか、今日はいつもより更に生命の危機が多いよ……」
拷問に遭うこと三十分。明久らは証拠不十分という形で解放されることになった。あれだけやっというて今更証拠不十分っておかしいような気がする。

「それよりなんで龍人は拷問受けなかつたんだよ？」
強介が言う。

「……………龍人は普段から女子に興味を示さないからだと思う」
ムツツリーニが俺の代わりに答えた。

「なるほど」

「龍人はいいのう。ワシは被害者扱いじゃつたのじゃぞ」

「それは当たり前だよ。だって秀吉は美少女なんだからね」
明久は男女の区別もつかなくなったらしいな。

と、そういえば雄二は無事なんだろうか？ 返事がないけど。

「雄二、大丈夫か？ さっきから黙っているけど」

話しかけると、雄二は何かを決意したかのようにその場で立ち上がった。

「……………上等じゃねえか」

少し怒りを孕はらんだ低い声が部屋に響く。

「雄二どうしたんだ？」

「どうせここまでされたんだ。本当にやってやるうじゃねえか」
その目には強い光が宿っている。どうやら何か火がついたみたいだ。

「まさか、本当につて……………」

「ああ。そのまさかだ。あっちがそう来るなら、本当に覗いてやるうじゃねえか」

よりのよってコイツはなんてことを言い出すんだ。

「雄二。霧島の裸が見たいからって覗きはダメだぞ」

「そうだよ。そんなに霧島さんの裸が見たいなら、個人的にお願いしたらいいんじゃない？」

明久も同意した。

「バ、バカを言うな！ 翔子の裸なんかに興味があるか！」

「僕は興味あるけどなあ」

明久がおかしなことを言っているが無視しよう。

「ふむ。もしか、例の尻に火傷のある犯人探しかの？」

「そうだ。流石に覗きなんて真似はやりすぎだと思って遠慮していたが……向こうがあんな態度で来るなら遠慮は無用だ。思う存分覗いて犯人を見つけてやろうじゃないか」

意味が分からん。もつと頭を使えばいくらでも方法はあるんだが

……面白そうだから放っておこう。

「……さっきのカメラとマイクは、脅迫犯の物と同じだった」

「なんじゃと？ それは本当かの、ムツツリー二」

「……間違いはない」

「そうか。それは嬉しい事実だな」

「そうじゃな」

「……………（こくり）」

雄二、ムツツリー二、秀吉が腕を組んで頷き合っている。どうやら明久は会話についてこれなかったらしいな。

「つまり、どういうこと？」

「はあ。つまりだな明久。お前と雄二が捕まえようとしている人物は同じで、なおかつ風呂場にカメラを設置したのも同じ犯人なんだよ。だから、火傷の痕のある女子を見つけたら全て解決するってことだ」

まあ、お前らが覗きをしたらそれは解決しないがな。

「ああ、なるほど！ その火傷の痕がある人を探したら全部解決するってわけだ！」

だからそう言ってるだろうが。明久は本当にバカだな。

「これでもう迷う余地はないな」

いや、迷えよ。本当に覗きをしたら警察に突き出されるんじゃないか？

「そうだね！ やってやるう！」

もう、警察に突き出されちまえ。つつか、後は勝手にやってもらおう。

俺はそう思い、先程から一言も言っていない強介の方へ近寄った

「どうしたんだ強介？」

「あ、龍人。やっぱり覗きはダメだよな？ 明久たちが覗きに行ったら止めないと！」

「……どうせお前は覗きを止めて、好感度を上げようとしてるだけだろ？」

「な、なんでそれを」

わかるっての。こいつ、こういう時だけ頭がキレる（？）んだよな。どんだけ彼女欲しいんだか？

「つま、それよりも強介。『それと抱き枕』を止めて次からは『それとラバーカップ』と言ってくれ」

「ん？ いいけど。ラバーカップってなに？」

こいつ、ラバーカップも知らないのかよ。

「ラバーカップとは清掃用具の一つでトイレや風呂場、台所の流し台の排水管の詰まりを直すための器具のことだよ」などとは言わずも無く。

「ラバーカップてのはな、女子にもてるための合言葉キワードだぜ。これを日ごろから使っていればもてること間違いなしだ」と嘘を教えってみる。

「ま、マジかよっ！？ そんな合言葉があつたなんて！ ありがとう龍人。僕に合言葉を教えてくれて」

強介が俺の手を取り、ぶんぶんと上下に振る。何でこんなに喜んでるんだ？ つま、面白いからいいか。

「つつか、明久達はどこに行った？」

よく見てみればこの部屋に明久達の姿がなくなっていた。

「覗きに行ったんじゃないの？ それとラバーカップ！」
さっそく使い始めやがった。また飽きたら違う言葉を言わせるこ
とにしよう。

その後しばらくしてから、明久達が帰ってきたのであった。

第21問 濡れ衣から覗きへ。それと

(終)(後書き)

読んでくれた方ありがとうございました。
感想を待っています。

第22問 明久らの覗きがFクラスを巻き込んで！ (初)

強化合宿二日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌

『今日は少し苦手な物理を重点的に勉強しました。いつもと違ってAクラスの人たちと交流しながら勉強もできたし、とても有意義な時間を過ごせました』

教師のコメント

Aクラスと一緒に勉強する事で姫路さんに得られるものがあつたようだなによりです。今度の振り分け試験の結果次第ではクラスメイトになるかもしれない人たちと交流を深めておくと良いでしょう

土屋康太の日誌

『前略。夜になって寝た』

教師のコメント

前略はそうやって使う物ではありません

吉井明久の日誌

『全略』

教師のコメント

あまりに豪快な手抜きに一瞬言葉を失いました。

天宮龍人の答え

『飽きました』

教師のコメント

早すぎです。

桐谷強介の答え

『好感度アップを狙うぜ　それとラバーカップ』

教師のコメント

何を言っているのですか？

「……雄二。一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当然のように俺の膝に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

強化合宿二日目。今日の予定はAクラスとの合同合宿となっていた。

学習内容は基本的に自由。質問があれば周囲や教師に聞いてもOK。要するに自習みたいなものだ。その為、机の並びも生徒同士が向かい合う形になっている。

「でも、なんで自習なんだろう？　授業はやらないのかな？」

わざわざこんなところまで来て自習なんて勿体無いような気もする。僕としては望ましい事でもあるけど。

「授業？　そんなもんやるわけないだろ」

そんな僕の独り言を聞きつけて、これ幸いと雄二が霧島さんを置いて隣にやってきた。膝の上に座ろうとする霧島さんとそれを押し

のけようとすする雄二の攻防は見ていて面白かったから少し残念だ。

「やらない？ どうして？」

「明久。お前はAクラスと同じ授業を受けて内容が理解できるのか？」

「むつ。失礼な。雄二にはそうかもしれないけど、僕にとってはFクラスもAクラスも大差はないよ」

「どちらも理解できないから。」

「……この合宿の趣旨は、モチベーションの向上だから」

雄二を追って霧島さんも僕がいるテーブルにやってきた。ポジションはきつちりと雄二の隣だ。流石に膝の上は諦めたらしい。

「翔子、それだけじゃ明久にはわからんだろ。つまり、AクラスはFクラスを見て『ああはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考える。そういうたメンタル面の強化が目的だから、授業はさして問題ではないということだ」

霧島さんの言葉の続きを雄二が説明してくれる。確かにAクラスはFクラスを見て『ああなるまい』って思うかもしれないけど、Fクラスはどうだろう？ 多分

「ねえ雄二。FクラスはAクラスを見ても何も思わないと思うよ」

「何故だ？」

「だって、あれ見てみなよ」

僕はある一か所を指さした。そこには枕を頭の下に敷き、眠っている男子が二人。龍人と強介だ。教師もいるっていうのに二人とも凄いな。

「あいつらは怖いもの知らずか？ 鉄人に見つかったらどうするんだ？」

「さあね？」

そんな何気ない会話をしていると、

「あ、代表ここにいたんだ。それならボクもここにしようかな？」
そこに聞き慣れない声が聞こえてきた。いそいそと僕の正面の席に勉強道具を広げている彼女は、確か……

「工藤さん、だっけ？」

「そうだよ。キミは吉井君だったよね？ 久しぶり」

ニツと歯を見せて笑う工藤さん。ボーイッシュな雰囲気と相まって、その仕草はとても爽やかに見えた。

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Aクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」
「なんだ！？ 最後の方に魅惑的な台詞が混ざってたぞ！？」
「ん？ どうしたの吉井君？」

「いや、別に工藤さんの特技を疑ってるわけじゃ

S I D E 天宮龍人

「ふあゝ」

龍人は伸びをしながら首をポキポキと鳴らした。

「よく寝たな。強介を起こして明久達のところに戻るか」

龍人は強介の体を擦った。

「おい、起きろ。明久達のところに戻るぞ」

「ふあゝ。わかったよ」

強介と俺は立ち上がり、明久達のところに歩きだす。何やら人が増えてるような気がするが。まあ、別におかしなことじゃないよな。俺らが明久らにある程度近寄ると会話が聞こえてきた。

『キミが 僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！』

……明久がぶっ壊れた。

『……ぶっ。あははっ。吉井君はお尻が好きなの？ それともボクの胸が小さいから気をつかってお尻にしてくれたのかな？』

セクハラ宣言を笑って流すとは何処の強者だ？

「はあ。お前らは一体何をやってるんだか？」

俺は明久達のテーブルに行くなり言う。

「りゅ、龍人。助けてよ」

「っへ？ 天宮君？」

「よう。起きたのか」

俺らの存在に気付कि、皆が言う。

「よ。っで、一体どうしたんだ？」

「本当にどうしたんだよ？ いきなりセクハラ宣言が聞こえてきたし。それとラバーカップ」

強介も会話に参加する。つつか、ラバーカップのことをすっかり忘れてた。

「それが (事情説明中)」

「はあ。お前らは一体何やってんだよ。工藤、その辺で明久をからかうのは止めてやれよな。代わりに雄二をからかうのはオーケーだ」

「おいこら。俺をからかうのはオーケーってどういうことだ？」

「ん？ そのままの意味だぞ。例えば」

俺はポケットから小型録音機を取り出した。

「なんでお前がそんな物を持つてるんだ？」

「ん？ 楽しいし面白いからに決まってるだろ」

俺は不敵な笑みを浮かべながら録音機を再生した。

《俺は翔子よりも島田の方が好きだな》これは秀吉にお願いしてやっってもらったものだ。他にも色々録音してある。

「……………」

この場にいる全員が口を開かない。いや、開けない。皆どうしていいのか分からずに雄二を見ている。

「他にもあるぞ」

《俺は翔子よりも姫路の方が好きだな》

「……………」

又もや沈黙。

「他にも」

《俺は翔子よりも根本恭二の方が好きかな？》

「最後のはゼー……ったいにねーよ！」

雄二がキレる。当たり前だが。もしも俺がまったく同じことをやられていたら、間違いなく俺は自殺をしている。

「……『最後の』ってことは、瑞希と美波には興味があるってこと？（ガシツ）」

霧島の手が雄二の頭にめり込んでいく。凄い技だな。

「いてててててて。おい、翔子。お前は何か勘違い　ぎゃ

あああつ！（ずるずる）」

雄二がずるずるとどこかに引きずられていった。

「……」

又もや沈黙。全員、雄二を温かい目で見守っている。

「……雄二、大丈夫かな？」

明久が言う。

「無傷では帰ってこれないかもな」

「あ、あははははは。代表は手加減しなさそうだもんね」

「そうだな。相手が雄二じゃなおさら……それとラバーカップ」

「……雄二も苦労してる」

「そうじゃのう。まあ、今回ばかりはワシの責任でもあるのじゃ

が」

明久に釣られるようにして全員が言う。ところで、『ラバーカッ

プ』も飽きたな。今度は、もっと面白い言葉を言わせよう。

……雄二が居なくなちつまたな。これじゃつまらない。今度は明

久の声で録ったものを流すか。

《僕はAクラスに好きな人がいるんだよなあ……おっと、声に出

しちゃまずいよね》

不意にこの場に声が流れる。もちろん俺の仕業だが。

「……アキ、もっと詳しく聞かせて」

「……私も詳しく聞きたいです」

いつの間にか近くに来ていた姫路と島田が言う。

「……誤解だよ。今のは龍人が勝手にやった事であって《僕は》

《雄二》《が好きなんだ》　って、なに今の？　今度は一体だ

れがやったの!？」

「……………龍人。お前はまだ甘い。うまく明久を追い込めていない」
ムツツリー二が俺に向き直りながら告げる。流石だ。だてにおかしな世界で生きていないな。

「ちよ、ちよつと。ムツツリー二まで何て事を！ しかも最後にはつきりと『追い込めていない』って言ったよね！ キミたちは僕を追いこんで楽しいのっ!？」

明久が俺、ムツツリー二、工藤を見ながら叫ぶ。

「……………つふ。何を今更言ってるんだか」「俺とムツツリー二。」

「一生恨んでやるっ！ 僕の人生を捨ててでも恨んでやるっ！」
自分の人生は大切にされた方がいいと思うんだが……………。

「君たち、少し静かにしてくれないかな？」

そんな中、凜とした声が響き渡った。知的に眼鏡を押し上げるクールな声の主は学年次席である久保利光ものだった。

「あ、ごめん久保君」

「悪かった。ちよいとはしゃぎ過ぎたらしい」

「……………すまない」

彼だけじゃなく、この部屋にいる全員に対して頭を下げる。本当にやり過ぎた。

「吉井君たちか。とにかく気をつけてくれ。まったく、姫路さんといい島田さんといい、Fクラスには危険人物が多くて困る」

危険人物が多いのは否めないな。だがなんで、姫路と島田の名前が先に挙がったんだろうか？

「まったく」

久保はそれだけを言い捨ててこの場から去った。

「はあ。注意されちゃったね。僕は《秀吉》《が》《好き》なにもしないのにつて、ちよつと今のは誰？ 龍人？ ムツツリー二？ 工藤さん？ もう、誰でもいいから三人ともとにかくその機械をこっちに渡しなさい！ 僕を取り巻く環境が変わらないうちに！」

「あ、明久……。ワシはどんな返事をしたら良いのじゃ……。？」
「しまった！ もう手遅れ！？ こうなったら、《雄二と》《久保君に》《愛の告白を》《しに行かなければ》《違う！ どうしてこんな場面で雄二と久保君に告白しに行くのさ！》」
「アキ、アンタやっぱり女より男の方が……。？」
「だからどうして皆僕をソツチの人にしようとするの！？ 落ちて着いて僕の《どうやって》《告白しに行こうか》《一緒に考えて》だから違う！》」

騒がしい教室内のざわめきに明久の声が打ち消される。
結局、この騒ぎは鉄人が怒鳴りこんでくるまで続いた。

第22問 明久らの覗きがFクラスを巻き込んで！ (初) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございます。

第22問 明久らの覗きがFクラスを巻き込んで！ (終)

そんなこんなで地獄のような勉強時間や天国のような夕食タイムも終わって、いよいよ入浴の時間。僕らは割り当てられた部屋で顔を突き合わせて話し合いをしていた。

「僕は工藤さんが犯人だと思っただけど」

「その可能性は高いだろうな」

雄二が僕の意見に頷く。昼間の録音機の使い方を見る限り、彼女は怪しい。

「それじゃ、工藤さんを一気に取り押さえる？」

それで証拠を押さえれば万事解決だ

「……………それはやめた方がいい」

というのに、珍しくムツツリー二が否定的な意見を述べてきた。

「やめた方がいいって、何か問題でもあるの？」

「……………チャンスは一度きり。失敗したら」

S I D E 天宮龍人

俺と強介は明久らの話し合いに参加せずにぶらぶらしていた。

「なあ、須川を呼ばないか？」

「そうだね……………須川なら乗ってくれるよな。それとラバーカップ」

「そうだな。じゃ、早速電話するか」

俺は須川の携帯番号を呼び出した。

《もしもし？》

「須川。話があるんだがいいか？」

《別にいいが……………話ってなんだ？》

「お前は夕食の時に明久達と一緒に覗きをしないかって誘われてるよな？」

《ああ。誘われているぞ》

「その覗きのことなんだがな。一緒に明久達をとめないか？」

《……………》

「……………」

会話が一旦切れる。しばらくしてから、須川が叫ぶ。

《はああああああああ！　なんでだ！　なんで阻止しなければならぬ!?》

「落ち着け。覗きをするには鉄人などの邪魔が入るよな？」

《それはそうだが》

「だったら、明久達を阻止して女子からの好感度アップを狙った方が効率がいいとは思わないか？」

《た、確かに。よしっ！　わかった。俺は龍人らに協力しようっ！》

「ああ、ありがとうな」

《つで、俺はどうしたらいい?》

「お前はその後、明久達の部屋に行き、状況がどうなっているのか伝えてほしい。最後の日までお前は覗きにも行かなければ、覗きを阻止しなくてもいい。だが、最後の日だけはお前も阻止側に回ってくれ。まあ、簡単に言くとスパイだな」

《わかった。これから丁度、明久達の部屋に行くところだったから、俺は行くぞ》

「ああ。よろしく頼む」

《任せておけ。それじゃーな》

プツッ！　プープープープー。

須川の声がしなくなり、代わりに電子音だけが聞こえてくる。どうやら電話を切ったらしい。

俺は強介に向き直りながら言う。

「強介行こうぜっ！　俺は遊びに。お前は好感度アップにな！」

「オーケー。僕の好感度アップのためにもやってやるよ！」

俺らは歩き出した。面白い事をするために。

俺と強介が階段を下り、廊下を進んでいるとしばらくしてから前の方から会話が聞こえてきた。

『み、美波。今は入浴中じゃ……？』

『忘れたの？ ウチと姫路はFクラスだから後半組なのよ。』

もつとも、前半組のAクラスからも参加している人がいるみたいだけどね』

おーやってるやってる。須川は作戦通りいないみたいだな。

「いつちよ、遊んでやるか」

「だね」

俺らはFクラスメンバーを掻きわけながら前に進み、明久の隣に出た。

「龍人、強介！ いいところに来てくれたねっ！」

明久が俺らの姿を確認して叫ぶ。

『皆！ 天宮と桐谷が来てくれたぞっ！ これで安心だっ！』

『おおー救世主様だ！』

『天宮！ 桐谷！ サイコー』

明久に釣られるようにしてFクラスメンバーも騒ぎだす。

「天宮！ あんたはこういうことをしないとと思ってたのっ！？」

島田が俺に叫ぶ。

「ふんっ。悪いな」

「ごめん」

俺と強介は身構えている女子多数の前にまで行くと、Fクラスメンバーの方へ振り返る。

「あれ？ どうしたの？」

明久が尋ねる。俺と強介は不敵な笑みを浮かべた。

「悪いな明久。今日、俺と強介は女子の方につかせてもらっぜっ

！」

「「「はあああああああ！」「」」

「この場に居た全員が絶叫する。」

「ど、どうしてさ龍人に強介！」

『そうです。どうして我らではなくて女子にっ!?!?』

『答えてください!』

俺と強介はそれらの問いに笑みを浮かべながら言う。

「そんなこと決まってるだろ? 俺は面白ければそれでいいんだ

よ。今日は阻止側に回った方が面白そうだったってただけだ」

「そして僕は、好感度アップを狙うためさ」

「そ、そんな! 僕たちは友達じゃなかったの?」

明久が泣きそうな目で訴えてくる。

「だから、『今日は』って言ってるだろうが。気分によっては明

日は明久らの方についてやるよ!」

「そんな。わかったよ。龍人たちがそう来るなら……全員、龍人

と強介を取り押さえて!」

『『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』』

Fクラスメンバーが俺と強介に跳びかかってくる。

数分後

Fクラスメンバーは廊下に沈んでいた。

『か、勝てる気がしねえ』

『ま、まっただ』

『こいつらは化け物か!?!?』

『二人とも片手だけで相手をするとは……』

Fクラスメンバーは廊下に沈んだ状態で何かを口走っていた。

「ふう。島田、これでいいか?」

俺は島田に向き直りながら尋ねる。

「え、ええ」

「そうか。ならよかった。皆、どうか入浴を続けてくれ! こい

つらは責任を持って片付けておくから」

『ほ、本当？ なら、入りに行こうか』

『そうね』

女子多数は一人を残して入浴に向かった。そう、工藤を残して。

「どうしたんだ？ 何か用か？」

「いや、用ってほどの事でもないんだけどね……」

工藤は俺に近付いて一言。

「まだ脱衣所には見つからないカメラが一台残ってるよ？」

「……っ！ どういうことだ？」

「そのまんまの意味だよ。まあ、ボクが仕掛けたわけではないんだけどね。それじゃ、それだけだから」

工藤は言い捨てるが入浴に行こうとするが、途中で足を止めて俺と強介を見ながら言った。

「二人ともありがとうね。龍人君のことは優子にも話しておくよ
それじゃ」

工藤は入浴に行った。

「一体、どういうことだ？ つま、今はそれよりもこっちを片付ける方が先か」

「そうだね」

俺と強介は廊下に沈んでいるFクラスメンバーをずるずると引き摺り、各部屋に連れて行った。

こうして強化合宿二日目も幕を閉じたのだった。

第22問 明久らの覗きがFクラスを巻き込んで！ (終) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございます。感想やアドバイスなどを
待っています。

第23問 面白おかしくメンバー集め（初）

強化合宿三日目の日誌を書きなさい。

土屋康太の日誌

『前略。』（坂本雄二に続く）』

教師のコメント

今度はリレー形式ですか。次から次へとよく思いつくものです。

坂本雄二の日誌

『そして翔子が俺の前で浴衣の帯を緩めようとした。俺は慌ててその手を押さえつけ、思い止まるように説得した。ところが、隣では島田が明久に迫っていて妙な雰囲気になっており』（吉井明久に続く）』

教師のコメント

君たちに一体何があったのですか？ 土屋君が略した部分がとても気になります。

吉井明久の日誌

『後略』

教師のコメント

ここでその引きはないでしょう。

天宮龍人の日誌

- 『1、雄二が助けを求めていた
2、明久が島田に殺されるかと思ひ恐怖していた
3、ムツリ二と強介が秀吉の寝顔を撮っていた
上の三つが同時に起きていた。俺は面白くなると思ひ、助けは無視して傍観していた』

教師のコメント

無視しないであげてください。

桐谷強介の日誌

『モテナインデスケドドウシタライイデスカ?』

教師のコメント

知りません。自分で考えてください。それと読みにくかったです。

翌朝。

『とにかく雄二！ 起きろコラあつ！』という言葉に俺は起こされることになった。

「るっせーよっ！ こっちはまだ寝てんだぞっ！」

俺は起き上がり、明久に言う。

「あ、ごめん」

「わかったならそれでいい。二度寝するから起こすなよな」

俺は再び布団に入り込んだ。だが、しばらくしてから再び明久が殴る！ コイツの耳からドス黒い血が出るまで殴り続ける！』と
という言葉に起こされた。

「だからつるせーよっ！」

俺は布団から飛び出て明久に言う。

「一番うるさいのはお前だ龍人！ オレまで目が覚めちまっただろっがっ！」と俺と同じように布団から飛び出てきた強介。こいつ、睡眠を邪魔されんのが嫌いなんだっけ。

「二人ともうるさい！ 僕はこれから雄二を仕留めなきゃいけないだっ！」

「だったら、俺はそれよりも早くお前らを仕留めてやるっ！」

「だったら、オレもそれより先に二人を仕留めてやるっ！」

ガチャツ

「おいお前ら！ 起床時間だ ぞ……？」

「死ね龍人、雄二、強介！」

「死ぬのは明久、雄二、強介だっ！」

「違うっ！ 死ぬのはオレではなくて、お前らだっ！」

「なんだ！？ 朝からいきなり明久、龍人、強介がキまっている

ぞ！？ 持病か！？」

「ええい落ち着くのじゃ三人とも！ 西村先生、済まぬがこやつらを取り押さえるのを手伝って頂きたい！」

「……………！（コクコク）」

「……………お前らは朝から何をやってるんだ」

皆に邪魔をされてしまい、残念ながら三人を仕留めることが出来なかった。

「あ、そうだ雄二に明久。昨夜妙なことを言われたぞ」

「ん？ なんだ？」

「なに？」

寝起きのドタバタも終えて朝食中。俺は斜め前に座る雄二と横に座る明久に声をかけた。

「工藤に『脱衣所にまだ見つかってないカメラが一台残っている』って」

「なんだと？」

「それって本当っ!？」

忙しく動いていた雄二と明久の箸の動きが止まる。

「それ怪しいよね。そんなことを知ってるなんて、やっぱり彼女が犯人じゃないかな？」

「いや、犯人ではないと思うぞ。犯人のことを知ってる可能性はあるがな。第一、犯人なら怪しまれることは言わないだろ？」

「あ、そうか」

それから少し話したところで、最初のカメラはカモフラージュの可能性が高くなった。

「けど、それならお風呂の時間を避けてカメラを取りにいけば解決ってことだね」

不意に明久が言う。

「……………それは無理」

ムツツリー二が言う。

「え？　なんで？」

「……………時間外だと脱衣所は嚴重に施錠されている」

それもそうだよな。初日にカメラが設置されていたんだからな。

「諦めて今までどおりの方法を買ってことか……………」

「そのようじゃな」

まあ、警備を突破しなければいけないという状況は変わらないが。

「そこで昨日の反省だ。明久、昨日の敗因はなんだと思う？」

「敗因？　うーん、向こうが女子の半分防衛に回してきたことと、なにより龍人と強介が防衛に回ったことじゃないの？」

この場にいる全員の視線が俺と強介に向いた。そんな目で見るなよな。

「そうだ。昨日の敗因は龍人たちが防衛に回ったことが大きいだろ。まあ、Aクラスを含め、敵の戦力が大幅に増強されていたから龍人たちが防衛に回っていなくてもやられてただろうがな」

まあ、雄二の言う通り、俺と強介が防衛に回って無くても雄二達に勝ち目はなかったろうな。

「そこで、こちらも更に戦力を増強しようと思う。Fクラスだけではなく他のクラスも味方につけて対抗するんだ」

いつものように雄二が作戦を提案して、しばらくはその作戦について話し合った。戦力増強は自分たちの保身だからだそう。そんなこんなで俺と強介も強制的に人集めを手伝う破目になった。

初めはAクラスを仲間にする事になったのだった。

第23問 面白おかしくメンバー集め (初) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございます。

第23問 面白おかしくメンバー集め (中)

「っで、何の用だ？」

俺は明久がAクラスを説得する為に久保のところに行っている傍らで、工藤と木下姉に呼ばれたので二人のところまで歩み寄っていた。

「いや、勉強教えてもらおうかなあって思ったただけよ」と木下

「そうそう。勉強教えてもらおうかなって思ったただけだよ」と工藤

「なんでFクラスの俺がAクラスのお前らに勉強を教えなければならぬんだよ?!」

俺は二人に言う。当然だ。AクラスにFクラスの俺が教えられることなどない。

「っつう!」「」

二人が言葉に詰まる。

「もしも、仮に俺がAクラスだったとしても、だ。勉強を教えるほしいなら霧島か姫路に頼めよな」

「そ、それもそうなんだけど……ダメ？」

「ダメ、かな？」

二人が俺を上目遣いで見上げてくる。ふん。俺はそんなのできめいたりしねーよ。つつか、する意味が分からない。

「ダメとかじゃなくて、教えることがないって言ってるんだよっ!」

「「本当に?」「」

まだ上目づかいを止める気が無いらしい。どうせ、強介の姿がさつきまで見当たらなかったから、あいつが面白がって教えたんだろうな。この二人もきつと、面白い事をしないかって誘われたんだろう。ここまできると明久以外グルかもな。何て悪趣味な奴らだ。

「お前ら作戦はもうばればれだつての。どうせ、俺があたふたする様を見たいんだろう?」だが、甘かったな。俺は上目遣いなんか

では何とも思わないんだよね」

「……ってなわけで、俺は雄二達のところに戻るからな。お前らもこんなことしてないで、勉強してろよな」

俺はそう言い捨てるとその場を離れた。

S I D E 桐谷強介

僕たちは明久と龍人のことを見ていた。

「……龍人って、明久といい勝負してるな」

不意に横にいた雄二が言う。

「本当じゃのう。龍人も明久に負けておらんのじゃ」

「……………（コクコク）」

「あ、あはははははははは」

僕は苦笑していた。本当に龍人は明久といい勝負してるなあ。

「なんで二人はあんなに鈍感なんだか？」

「本当、鈍感だよな」

「そうじゃな」

「……………二人とも“超”がつくほど鈍感」

皆が思い思いに口にする。本当、鈍感過ぎる。

そんな事を話している間に龍人と明久が戻ってきた。

S I D E 天宮龍人

「はあ、お前らは何て事を吹き込んでるんだよ？」

「吹き込んだなんて人聞きが悪いつての！ 僕はただ、上目遣いをすればいいつて つて、痛い。」

俺は強介の右腕の関節を外した。あ、いけねっ。自然に体が動い
ちまった。

「まあ、いいか」

「いいのかよっ！ 少しは心配しないのっ！」

強介が何やら騒いでいる。うるさいヤツだな。

「それよりも明久。どうだった？」

「って、僕のことは無視ですかっ!？」

本当に強介はうるさい。

「ごめん。失敗だったよ」

「明久も僕のことを無視するなよッ！」

「そうか。まあ、無事で何よりだ」

「っへ？ 誘ってきた雄二までもが無視ツすか!？」

「いや、そんな危ないことはしてないんだけど」

まあ、確かにそんな危ないことはしてないよな。雄二も心配するなら別の時にすればいいのにな。

「しかし、そうなるると他のクラスとの交渉を迅速に進める必要があるな」

「それはそうだけど、今は一応授業中だよ？」

「そうだよな。どうするんだ？」

自習中と言っても監視の目が無いわけじゃない。今も勉強しているフリをしていなければ監視の先生に注意を受けるだろう。つま、俺的には注意を受けても関係ないが。

「それはわかってる。だが、全クラスに声をかけるとなると休み時間程度では全然足りないからな。なんとしても抜け出すしかない」

雄二が鋭い目つきで鉄人の隙を窺っている。するとそんな様子を見て、俺らに近付いてくる人影があった。

「こらっ。アンタたち、また何か悪巧みしてるでしょ」

少し離れていた席で自習していた島田美波だ。割と静かにしているのに目ざといな。

そして彼女の言った『悪巧み』という単語に遠くで鉄人がピクツと反応している。しょうがねえな。

「島田。そういえばさっき、木下姉が相談があるって言ってたぞ」
まあ。全くのウソだが。

「つへ？ ウチに？」

「ああ。なんでも大事な話だとか」

「へえ〜。なにかしら？ ちょっと行ってくるわ」

「おう。行って来い」

島田はすたすたと木下姉の方へ歩いて行った。

「ナイスだ龍人。次は鉄人をどうするかだな？」

「そつちも任せておけ」

俺はムツツリー二に関節を治してもらっている強介に近付き言う。

「強介。廊下でお前のことを好きで好きでしようがない女子が待っているぞ」

「ま、マジツすか！ マジなんすか！？ いやっほおおおおおおおっ！ 待っててね、今から行くからっ！」

強介は廊下に向かって走り出した。廊下に行く途中で鉄人に足止めされた。

「桐谷。何処に行くんだ？」

「離してくださいっ！ 僕には大事な用事があるんですっ！」

「それは勉強よりも大事なことなのか？」

「当然ですっ！ 勉強なんてクソつまらないものよりは大事に決まっていますっ！」

「ほほう。クソつまらないか。そんなに退屈させていたとはすまなかつたな。お前だけ特別に俺が勉強を見てやるっ！」

「ひええええええええええええええええええええええええっ！ お助けをおおおおおおおおおおっ！ 精神と肉体が壊されるっつうっつうっつうっ！」

鉄人は強介の首根っこを掴み、そのままずるずると部屋の隅の方へ引き摺って行った。

「よしっ。今のうちだ。行くぞ」

俺らは鉄人が戻ってくる前に音もなく廊下へと出た。まあ、あの様子じゃ、当分は戻ってこないだろうっけど。

第23問 面白おかしくメンバー集め (中) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございます。

だんだん強介が春原に似てきたような気がします……。

第23問 面白おかしくメンバー集め (終)

「……やっぱりこっちにも監督の先生がいるね」

「当たり前だろ」

「当然だな」

廊下をこそそと歩くこと数分。僕らはDクラスとEクラスの合
同学習室の前で中の様子を窺うかがっていた。

「して、どうするのじゃ？ このままでは交渉を進められんが」

「……………侵入も難しい」

よりよってここの監督の先生は出入り口の前に陣取っていた。

これではこっそり中に入って話をするなんて不可能だな。

「簡単だろ。つな、雄二」

「だな。一人がおとりになって教師を引きつけければいい」

「断る」

言うより早く、明久が断った。

「やれやれ。それなら、ゲームで決めようぜ」

「だよな。明久、それなら文句ないだろ？」

雄二も同意する。

「ゲームって、何？」

「あっち向いてほいで負けた明久が交渉に行こうZE ゲーム

っ！」

「っへ？ 何それ？ 僕以外の人を負けたらどうなるの？」

明久がごちゃごちゃ言いだす前に終わらせよう。

「よし、じゃー行くぞ。ジャンケンポイ」

「っへ？ ポイ」

俺はグー。明久はパー。

「よしっ！ 僕の」

ツチ。それならっ！ 明久が言い終わる前にやってやる。

「それ、あっち向いてほい！」

そのままグーで明久を殴る。明久は尻餅をつき、俺のことを見上げる。その瞬間、人差し指を上に向ける。

「よし、俺の勝ちだな！」

「ちよ、絶対におかしいよねっ!?!」

「おいおい。言いがかりはよせよ。みつともない」

「そうだぞ明久。みつともないぞ」

「……………（コクコク）」

「みつともないのじゃ」

皆、俺に同意してくれる。

「ちよ、皆はおかしいと思わないのっ!?!」

「はあ、まだ言うのか明久。しょうがないな。今度は俺が相手をしてやるよ。まあ、じゃんけんでだがな」

雄二が一步前に出る。

「いいだろ。今度こそ僕が勝つ！」

「じゃー行くぞ。じゃんけん、どーん！」

雄二がいきなり明久を殴り飛ばす。明久は又もや尻餅をつく。

「ちよ、今度は出してすらいらないよねっ! こんなの勝負じゃないよッ！」

「おい、明久。あんまり大声を出すと」

ガラッ

瞬間、俺らは隠れる。

『廊下で騒いでるのは誰ですか！ 今は自習中のはずですよ！』

『うわっ！ 布施先生だ！ 龍人、どうする って誰もいな

い!?! いつの間に!?!』

『吉井君、そこを動かないように』

『やっぱりこうなるのかっ!』

『こらっ！ 待ちなさい!』

結局明久が布施先生を引きつれて逃げ回るのか…………。

「はあっ、はあっ、はあっ……。なんとか、撒いた、かな……」
「明久、ご苦労だったな」

「苦労、したよ、途中から、大島先生が、出てきて……」
「そうか。おかげでD・Eクラスの協力を取り付けることができた。良くやってくれた」

とりあえず胸に手を当てて呼吸を整える。ふう……。
「それは良かったよ。これで戦力は一気に増えたね」

「ああ。次はBクラスとCクラスだな。もう一度頼むぞ明久」
「頼んだぞ明久」

まるでそれが当然のように告げる雄二と龍人。でも、そうは問屋とみやが卸おろさない！

「そう簡単に引き受けるわけにはいかないよ。さっきの勝負も納得がいつてないし、もう一度勝負だ！」

「別にいいけど……：時間の無駄だよな雄二？」
「ああ。時間の無駄だな」

「ふふっ。そうかな？ 僕をさっきまでの僕だとは思わない方がいいよ」

さつき散々逃げ回りながらどうやって勝つかを考えたのさ。結局考え付かなかつたけど、ただではやられないさ。

「誰が僕のじゃんけんの相手をしてくれるの？」
「後悔するなよ明久」

「やっぱり龍人か。今回は負けないよ」
「ぬかせ。そら、行くぞ。じゃん、どーん」

今度は龍人も出さずに殴りかかってくる。そんなのお見通しだよッ！

僕はしゃがむことによつて回避した。

「ほう。やるじゃないか明久。今回は勝負がつきそうにないな。違うゲームをしようぜ？」

「いいよ。どんなゲーム？」

「簡単さ。しりとりだよ、しりとり」

それなら僕も勝てるかもしれない。

「よし、乗った」

「じゃー俺から行くぞ。りんご」

明久「ゴリラ」

龍人「ラクダ」

明久「だるま」

龍人「マント」

明久「トマト」

龍人「トルコ」

明久「コック」

龍人「クリスマス」

明久「スイカ」

龍人「かるた」

明久「タコ」

龍人「コーヒー」

明久「ひだよね？」

龍人「ああ。普通なら『い』だが『ひ』でもいいぞ」

明久「それなら『ひ』にさせてもらうよ。では気を取り直して、

ひ《姫路さん》」

「龍人の勝ちだな」

雄二が龍人の手を掲げる。おかしい。今のはおかしい。絶対におかしい。

「ちよ、ムツツリーニだな！　こんな卑怯な手を使うなんてっ！

キミたちは人間なのっ!？」

「はあ、わかったよ。今度は雄二と勝負しろ。明久が勝ったらなしにしてやるよ」

龍人が言う。当たり前だ。あんなので負けにされたんじゃ嫌だからね。

「じゃー今度は僕から行くよ」

「好きにしる」

「じゃー最初はリンパセン！ ……あっ！」

「待ちなさい吉井君！ どうしてキミは授業中に歩いているのですか！」

「すみません！ 色々事情があるんです！」

五十嵐先生は意外と足が速いということがわかった。

第23問 面白おかしくメンバー集め (終) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございます。

第24問 手違いメールで大騒ぎ (初)

問題 以下の英文を訳しなさい

『 Although Jhon tried to take
the airplane for Japan with his
wife's handmake lunch, he noticed
that he forgot the passport
on the way. 』

姫路瑞希の答え

『 ジョンは妻の手作りの弁当を持って日本行きの飛行機に乗ろうとしていたが、途中でパスポートを忘れていることに気がついた』

教師のコメント

正解です。

土屋康太の答え

『 ジョンは

』

教師のコメント

ジョンです。

吉井明久の答え

『 ジョンは手作りのパスポートで日本行きの飛行機に乗った』

教師のコメント

手作りパスポートという言葉の意味をもう一度よく考えてみて下さい。

天宮龍人の答え

『ジヨンは妻の手作りの弁当を持って日本行き of 飛行機に乗ろうとしていたが、途中でパスポートを忘れていることに気がついた…：こんなのはどうでもいいとして、ジヨンはきちんと酔い止め薬を持ちましたか？』

教師のコメント

どうでもよくありません。ちゃんと訳せていますが×にします。

桐谷強介の答え

『ジヨンは妻の手作りの弁当を持って日本行きの飛行機に乗ろうとしていたが、途中で拳銃とパスポートを持っていないことに気がついた』

教師のコメント

ジヨンは一体何をやりにくつもりなんですかつ！？

そんなわけで、恒例の出撃前ブリーフィング。龍人と強介はもちろんいない。

「結局、手を貸してくれたのはD・Eクラスだけじゃったな」

「仕方ないだろう。Bクラスは代表が代表だけにましまりがないし、Cクラスは代表が小山だからな。男子連中がしり込みするのにも無理はない」

「けど、D・Eクラスが協力してくれるだけでも昨日よりずっと状況が良くなったよ」

「まあそうじゃな。女子側とて入浴の為に最大でも半数しか出てこれんじやろうし、教師と龍人らを抑えることができればなんとかなるじやろ」

昨日以上の戦力を向こうは保有していないはずだから、今日こそはなんとかなるはずだ。鉄人、龍人、強介を抑えられたらの話だけだ。

「でも、ここまで大きな騒ぎにすると女子の入浴自体が中止になつたりしないかな？」

「それはないだろ。教師側にもプライドがあるからな。『覗きを阻止できないかもしれないので入浴は控えてください』なんて言うと思うか？」

「ああ、そつか」
確かに先生たちとしても意地があるだろう。召喚獣を使った勝負で生徒に防衛線ぼうえいせんを抜かれるようなことがあってはいけないのだから。

「それとこれは憶測だが……教師側はこの事態を好ましく思っている可能性もあるな」

「え？ 僕らの覗きを？」

「ああ。あくまでこの合宿の目的は『生徒の学習意欲の向上』だからな。目的がなんであれ、召喚獣を使って戦闘を行う以上勉強せざるを得ない。女子側も同様だ。防衛の為に召喚獣ふかけつが不可欠だからな」

雄二がもつともらしく説明している。なるほどね。道理でこの間に僕らを部屋しやんぐに拘束なんて手段をとつてこないと思つたら、そういう理由があるわけか。先生たちも絶対に抜かせない自信があるからって大胆な行動に出るなあ。

「さてムツツリー二。作戦開始時刻と集合場所は両クラスに通達してきたか？」

「……………問題ない」
作戦開始時刻は二〇一〇時、集合場所は一階にある大食堂。前半組が脱衣を終えて入浴し始めている頃を狙って総攻撃を仕掛ける手筈だ。

「よし。それじゃ、そろそろ出るか」
「そうだね。他のクラスが」

S I D E 天宮龍人

《……………吉井たちが動き始めた》
「そうか。ありがとな須川。これからもよろしく頼むぜ」
《わかった。それじゃ、電話を切る》
「おう」

プツ。プープ。プー。

俺は携帯電話をたたむとポケットに入れた。

「動き出したぞ。俺らも行くか」

「そうだね。僕らも行くこうか」

俺らは強介の原作の知識で明久らが現れる場所を知っている。なので俺らは、明久らがそこへ行ったところを見計らい、明久らと同じ経路を辿る。

すると、当然のように挟み撃ちになるのだが、すでに工藤が挟み撃ちをしていたのに気づいた。

俺らは工藤の近くに近寄り、こつちを見ていた明久に手を挙げる。

「よう。頑張ってるな明久」

「っ！ 天宮君！」

隣に来た俺に工藤が驚いている。そこまで驚かれると、俺でも流石に傷つくのだが……………。

「さあって、明久。どうする？」

俺はにやにやと笑いながら言う。

「どうするかだって？ そんなの決まってるじゃないか。皆！

最後まで諦めずに戦うんだ！ 試獣召喚！」

明久が召喚獣を呼び、戦闘の構えを取らせる。ほほう。俺と強介、それに教師と戦おうってか。いい度胸だな。

「行くぞ強介！」

「オーケー」

「「試獣召喚！」」

俺らの召喚獣と高橋先生の召喚獣に明久の召喚獣が挟まれる。

『学年主任 高橋洋子&天宮龍人&桐谷強介 VS

Fクラス 吉井明久

総合科目 7791点 & 4821点 & 4659点

VS 902点 『

全員の点数が明らかになる。今回は微妙にしか勉強してないからなあ。せつかく、神からスキルをもらったのに。

ちなみに俺の召喚獣の装備にはマントがついている。内側が赤く外側が黒いマントだ。武器は双剣そうけんで右の方は赤く、左の方が黒い。腰には手榴弾や拳銃もあり、腕輪もある。

『な、なんだあの天宮と桐谷の点数は！？』

『つ、強すぎる！ 高橋先生はわかるが、あの二人はなんなんだ！？ 本当に俺らと同じFクラスか！？』

明久と一緒にいる連中がそんな事を言い始める。その中で上司令は告げた。

「仕方がない。こうなったからには、各自の判断で行動しろ」

『『『おうつ！ 任せておけっ！』』』

さーて。どうやってこの場を逃れようとするのか、じっくりと見せてもらおう！

『……………』 (土下座)

『……………』 (土下座)

『……………』 (土下座)

バカばっかりだ。

「流石に明久と雄二はやらないようだな」

「それはそうだよ。だってねえ」

「だってなあ」

「「どうせ、土下座しても許してもらえないんだからさ（よ）！」

その後、明久は島田と姫路に、雄二は霧島にオシオキされることになった。

許してもらえないってわかっているんだったらやらない方がいいのにな。

第24問 手違いメールで大騒ぎ (初) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございます。

第24問 手違いメールで大騒ぎ (終) (前書き)

結構原作にある部分を省略していますが、楽しんで読んでもらえれば幸いです。

第24問 手違いメールで大騒ぎ (終)

俺らはその後部屋に戻り、明久らは部屋に戻るなり再び覗きのことを話し始めた。この光景を両親が見たらどう思うんだろうか？

……まあ。俺と強介にはこっちの世界の両親は居ないんだが。

話し合った結果、苦しい勝負をしていることが分かる。どうやら覗きに行くには鉄人と大島先生（保健体育教師）と高橋先生（学年主任）のいる場所は絶対に通らなければならぬらしい。ちなみに俺と強介は突然現れるから逆の意味で要注意らしい。本人がいる前でそんな事を言っているのか？

雄二は明久を鉄人のいるところにまで無傷で連れて行きたいらしい。大島先生はムツツリーニがどうにかしてくれるが、高橋女史や他の先生などをどうにかするしかないそうだ。

その為、今俺の横では秀吉が浴衣に着替えている。ムツツリーニと強介はデジタルカメラを念入りに磨いている。拭いているが正しいか？

何故秀吉が着替えているのかと言うと、AとCの野郎どもの劣情を煽る為だとか。つうか、秀吉は男だろうが。

「……何故にワシなのじゃ？」

着替え終わった秀吉が不満そうに言う。

「安心しろ。秀吉だけじゃない。姫路、島田、工藤、木下姉にも着てもらおう」

「いや、秀吉は一人できるのが不満なんじゃないと思うぞ」

「龍人の言う通りじゃ。ワシは一人できるのに不満があるわけじゃないのじゃ」

本当にこの学校の男子は何を考えているんだ？

「それじゃ、明久。姫路と島田に連絡を取ってくれ。龍人は工藤と木下姉に連絡を取ってくれ。ムツツリーニと強介はカメラの準備を」

「おい、待て。なんで俺が工藤と木下姉に連絡しなきゃいけないんだ？ 雄二がすれればいいだろうがっ！」

「そうだ。雄二が連絡を取れよ。」

「それはダメだ」

「なんでだよ？」

「翔子に殺される」

「……………すまない」

「いや、いいんだ」

雄二が俺の肩にそつと手を置く。

「じゃー明久がしろ」

俺は明久に向き直り言う。

「僕、二人のメアド知らないよ」

「だったら、俺も知らないぞ」

「……………」

しばしの沈黙。まあ、本当は知っているが。言ったらめんどくさい役が回ってきてそうなので言わないでおく。

「そうか。なら今回は姫路と島田だけにするか。明久頼む」

「オーケー」

明久が携帯電話を取り出し、カチカチとメールの文章を作成する。俺は後ろからメールの内容を覗き見する。

【ちよつと話があるんだけど、僕らの部屋に来てもらってもいいかな？】

P i P i P i P i P i

明久が送信ボタンを押して数分もしないうちに返信が来た。ふむ。姫路からだな。

【わかりました。お菓子とか持って、遊びに行きますね】

お菓子、ねえ。手作りじゃなきゃいいが。

P i P i P i P i P i

明久がメールを閉じると、一分もしないうちにもう一度メール着信音が響いた。今度は美波からか？

【別にいいけど、こんな時間にどうしたの？】

少し警戒してるみたいだな。それもそうだな。明久も同じことを思ったのか、島田を納得させる文章を考えているようだ。

不意に明久の携帯電話がメールの着信を通知してきた。

「ん？ 誰からだ明久？」

「さあ？ 誰だろう」

明久がメールを開ける。着信者は スパイの須川からだ。一体どうしたんだ？

【気になったんだけど、お前はなんで覗きにそこまで必死なんだ？ そもそも本当に女が好きなのか？ 坂本や木下、久保が好きだって言っていた気がするんだけど】

須川のメールを読んで笑いそうになるのを堪える。

「つぶ、ぶつぶぶ」

明久は誤解を取り消そうと勢いよく携帯電話のボタンを押して文章作成する。

【勿論好きだからに決まってるじゃないか！ 雄二なんかとは比べ物にならないよ！】

なんかおかしい部分があるが、誤解を解くには充分だろ。明久が熱くなりながらも送信ボタンを押す。

【メール送信中…… 島田美波】

あれ？

ダメだ。俺は疲れているらしいな。でも、目を擦ってきちんと送り先表示を見直せば普通に須川宛になってるだろう。

【メール送信完了…… 島田美波】

「ぶ、ぶはははははははははははは。腹いてえ」

俺は腹を押さえながら大笑いをする。なに？ 俺の見間違いじゃなかったのかよ。これは傑作だわ。

「ねえ龍人。そんなに危険なメールじゃなかったよな？」

笑っている俺に明久が問う。

俺は明久が送ったメールの内容を思い出す。内容は

【勿論好きだからに決まってるじゃないか！ 雄二なんかとは比べ物にならないよ！】

「 完璧アウトだな」

「バカあつ！ 僕のバカあつ！ ある意味自分の才能にビックリだよ畜生！」

明久が叫ぶ。それもそうだ。いつも明久のことをウジ虫かサンドバツクとしか考えていない島田にあんなメールを送ったんじゃない。

「どうした明久？ さっき何か悲鳴が聞こえたが」

雄二が気になったのか尋ねてくる。

「色々大変なことになっちゃったんだ！ 今は僕の邪魔をしな
いで」

「大変なこと？ それは っとと」

ツルン（雄二がバナナの皮で滑る音）

ドタツ（雄二が明久を巻き込んで倒れる音）

バキツ（雄二が明久の携帯電話を踏み潰す音）

「明久。大変なこととは何だ？」

「 たった今キサマが作った状況だ」

明久の携帯電話は、今や複数の電子パーツへと分解されて見るも無残な状態になっている。メールや電話での弁明なんて明らかに不

可能だ。

「ん？ これはお前の携帯電話か。すまん。今度修理して返す」
それじゃー遅いと思う。

「いや、今はそんなことどうでもいいから、とりあえず雄二の携帯電話貸して！」

「あ、ああ。別に構わんが」

いかにも雄二が好みそうなシンプル形状の携帯電話を受け取り、すぐに島田の電話番号を探し始める明久。俺は後ろから覗き見る。

坂本雄二のアドレス帳登録……一件

『霧島翔子』

「む。翔子のヤツ、また勝手に俺の携帯を弄りやがったか。機械オンのクセに……。これでまた家でアドレス帳を入力し直さないとならないじゃないか」

「……………」

当然明久は島田の番号やメアドを暗記しているわけもない。明久は大丈夫か？

「明久。そんなに深刻そうな顔をしてどうしたんだ？ まるで間違えて島田に告白とも取れるようなメールを送ってしまったて弁明しようとしたところで俺に携帯電話を壊されてなにもできなくなってしまうた、なんて顔をしているぞ？」

それってどんな顔だ？ 雄二はエスパーか？

「あははっ。何を言っているのさ雄二。そんなことあるわけないじゃないか」

「そうだよな。そんなことになっていたら流石に携帯電話を壊した俺が極悪人（じくあくにん）みたいだもんな」

その通りだぞ雄二。お前は極悪人だ。

「まったくだよ。あはははははっ」

カチカチカチ。送信……っと。

【To：霧島翔子 From：坂本雄二】
もう一度きちんとプロポーズをしたい。今夜浴衣を着て俺の部屋まで来てくれ】

「ぷ、ぷ。ぷ。ぷ。ぷ。ぷ。ぷ。ぷ。」

俺は必死に笑いを堪える。

「うん？ 龍人どうした？ 明久は俺の携帯で誰に何を送信し

ゴふっ。 ななななんてことをしてくれるんだキサマ！」

「黙れ！ キサマも僕と同じように色々なものを失え！ どりゃ

ああ っ！」

「おわあっ！ 俺の携帯をお茶の中に突っ込みやがったな！？

これじゃ壊れて弁明もできないだろうがクス野郎！」

「そう！ その気持ち！ それが今僕が雄二に抱いている気持ちだよ！」

「何をわけのわからんことを！ と、とにかく今は弁明しなければ！ 龍人携帯電話を貸してくれっ！」

「そ、そうだ！ 龍人携帯電話を貸して！」

明久と雄二が俺に掴みかかりそんな勢いで言う。

「あ、ああ。別にい」

俺はふと思った。さっき俺は工藤達のメアドを知らないって言った。なのにアドレス帳登録のところにあの二人の名前があると知られたら、面倒事が俺のところに来てくるよな？ それは勘弁だっ！

「ほれ、貸してやるよって、手が滑った」

俺はわざとらしくお茶の中に携帯電話を落とす。

「な、なんてことを！ と、とにかく今は翔子の部屋に行って誤解を解いてこないと大変なことに」

ガラッ（雄二が廊下へと続くドアを開ける音）

ドゴッ（廊下にいた鉄人が雄二に拳を叩き込む音）

グシャベキグチャツ（雄二がテーブルを巻き込んで壁に激突する音）

「部屋を出るな」

「了解です」

ピクリとも動かない雄二の代わりに俺と明久が返事をする。この部屋に対する教師側の警戒態勢は万全だな。

「ちなみに秀吉とムツリーニはまだ携帯買ってないの？」

強介の名前が挙がらなかったが良しとしよう。つつか、強介自体カメラに夢中で気付いていないし。

「うむ。特に必要ないからの」

「……………いざというとき鳴り出すと困る」

最近の高校生としては珍しいと思うぞ。片方の理由は特にな。

「ところで、この部屋は片付けないとまずいのではないのか？」

これでは布団も敷けぬぞ」

「そうだね。とりあえず片付けて秀吉の撮影を始めようか」

「そうだな。秀吉の撮影はいつでもいいが、布団を敷けないのは困るからな」

倒れたテーブルを起こし、床に散らばったものを拾い、ゴミはゴミで一か所に集めておく。荷物などは右（ドサツ）、割れた花瓶やガラスの破片は左（ポイツ）、気絶している雄二は

「明久。雄二はどうする？」

「ゴミでいいんじゃないの」

「わかった」

雄二はゴミでいいらしいから左一（ポイツ）　　ザク

「ぐああつ！　せ、背中にガラスの破片がつ！」

「あ、雄二。起きたなら手伝つてよ」

明久が雄二に告げる。雄二、痛いたそうだなあ。

「待て！　お前には俺の背中の傷が見えないのか!？」

「大丈夫。致命傷ではなさそうだから」

「そう思うならお前にも、こうだっ！」

雄二は良く普通に動いてられるな。痛くないのか？

「ああっ！ 僕の着替えがガラスの破片まみれに！？」

「お前もこの痛みを味わえ！」

「それなら浴衣を着るからいいさ！ 秀吉とペアルックだしね！」

「……………羨ましい」

だったら、ムツツリー二も着ればいいのにな。

「お主ら……………、ワシの性別を完全に忘れておらんか？」

なんてことをやっているうちに時間が過ぎて、その後姫路が来て、ムツツリー二が血の海に沈んだ為に若干時間はかかったものの、無事に秀吉と姫路の撮影が終わった。

写真を撮り終えて姫路が自分の部屋に戻ると、昨夜は遅くまで鉄人のシゴキに遭っていたせい、俺らの部屋は電気を消してスグに寝息が聞こえ始めた。俺と強介は鉄人にシゴかれたくないが、眠かったので眠りについた。

俺はしばらくしてから目を覚ました。目の前には大変面白い光景が広がった。

明久の上には髪をおろしている島田美波が居て、雄二の方には浴衣姿で雄二のふと運に侵入しようとしている霧島。強介とムツツリー二は静かにシャッターを切っていた。撮っている物は秀吉の寝顔や島田、霧島姿だ。

俺はそんな光景をにやにやと笑いながら傍観ぼっかんしていた。明久と雄二が途中、『助けてくれ！』『こ、殺されるっ！ 誰か助けて！』などと言ってきたが無視。

しばらくしてから清水美春が島田を探すために入ってきて、色々とおかしなことを言い出し、ムツツリー二が布団を血で染め、秀吉が起き、明久が大声を出したことにより、鉄人がやってきて、三人の女子を逃がすために雄二と明久が囮になったのだ。

明久と雄二は戻ってこなかったので、鉄人に捕まったと見ていい

だろう。

部屋に残った俺らは眠りについた。

第24問 手違いメールで大騒ぎ (終) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございます。

第25問 悪友なのに手足を縛るってどういことだあああああっ！

タイトルがこの頃おかしいのレベルを超えてきたような気がします……。

第25問 悪友なのに手足を縛るってどういことだああああああっ！

この強化合宿全体についてのまとめを書きなさい。

姫路瑞希のまとめ

『他のクラスの人と勉強する事で良い刺激が得られました。伸び悩んでいた科目についての学習方法や使い易い参考書についても教えて貰うことが出来たので、今後もさらに頑張っていきたいと思います。夜はいつものように騒ぎがありました。これはこれで私達の学校らしいと思います。ある人から内緒で素敵な写真も貰えて大満足です』

教師のコメント

姫路さんは全体的にそつなくこなしている様子だったので伸び悩んでいる科目があったと言うことには驚きました。本来なら先生が気付くべきなので申し訳ないです。ですが、無事に解決できそうなので何よりです。やはり姫路さんにはAクラスで学習する方が良い影響がありそうですね。次回の振り分け試験ではぜひともがんばってください。それと、バカ騒ぎについては悪影響を受けないように気を付けてください。

島田美波のまとめ

『三日目の夜のことが忘れられない。ウチはどうしたらいいんだろ。こんなことは誰にも相談できないし、アイツとはあれ以来話ができないし……。瑞希の気持ちを知っているのに、これって裏切りになっちゃうのかな……。？ けど、ウチのは去年からの気持ちだ

から、こっちの方が先で……。ああもう！ どうしていいのかわからない！』

教師のコメント

一体何があったのでしょうか？ 友達にも相談できないというのは尋常ではありませんね。良かったら先生に話してみてください。一応あなた方よりも長く生きているので少しは力になれるはずですが、ただ、気持ちと書いてあるということは恋愛の話でしょうか？

それなら先生から言えることは一つです。自分が後から思い出して後悔することのないように行動するのが一番です。色々悩んで立派な大人になるのが学生の仕事ですよ。

吉井明久のまとめ

『あまりに多くのトラブルがあって驚いた。初日はいきなり意識を失って宿泊所に運ばれたので記憶がない。その後は覗き犯の疑いをかけられて、自分に対する周りの目について悩まされた。勉強についても、女子風呂を覗く為に頑張ろうと思ったけれども今のやり方でいいか不安が残るし、色々と考えさせられる強化合宿になったと思う』

教師のコメント

そうですね。

天宮龍人のまとめ

『色々と言いたいことはあるが、一言だけ言うならば勉強をした記憶がない』

教師のコメント

あなたは何をしに強化合宿に参加したのですか？

桐谷強介のまとめ

『なんで、なんで、彼女が出来ないんだ！？ 僕はこんなに頑張っているっていうのに！ 頑張つてそれとラバーカップも言っていたのに！ しかも、龍人には嘘をつかれまくるし！ 何で明久と雄二ばかり良い目に遭っているんだっ！？ 僕にはなんで彼女ができないんだああああああああっ！！』

教師のコメント

知りません。

翌朝。俺は早めに起きていた。明久らはまだ寝ている。もちろん強介も眠っている。さて、強介を起こしてやるかな。

「おい、強介」

俺は強介の体を揺すりながら名前を呼ぶ。

「ん？ なに？ こんな朝早くに？」

「実はな。昨日、お前のことが好きで好きでたまらない女子がいるって言ったろ？ その女子が朝早くにお前に会いに来てるんだよ」

「ま、マジツすかつ！？ 嘘じゃないですよねっ！？」

先程まで眠たそうにしていた強介は、俺の一言で覚醒した。目にはとてつもない輝きを宿している。

「本当だぞ。早く行ってやれよ」

「いやっほおおおおおっ！ 待っててねマイスイーツハニー」
それを言うなら『マイスイートハニー』なんだがな。

ガチャッ（強介が勢いよく部屋を飛び出す音）

ドゴツ！（廊下にたまたまいた鉄人が強介に拳を叩き込む音）

ゴロゴロゴロドガンッ！（強介が転がりながら壁に激突する音）

「こんな朝早くに部屋を出るんじゃないっ！」

「よく言い聞かせておきます」

ピクピクと手足を昆虫のように動かしている強介の代わりに返事を
をする。

その後、騒ぎによって明久らも起きてしまった。先程帰ってきた
みたいだから流石に悪い事をしたと思う。

「あんた、最低ですね」

朝食をとっている時に強介が俺を睨みつけながら言う。

「ん？ そうか？ 良い目覚めだったろ？」

「あれのどこが良い目覚めなんだよッ！？ 女子がいると思って
出て行ったら代わりに鉄人がいていきなり殴られたんだぞっ！」

「あ、あははははははは。強介、大変だったみたいだね」

強介の叫びに対して明久が苦笑している。

「それよりも、眠いね」

「そうだな」

「僕は完璧に目が覚めたけど……と思ったけど、やっぱり眠い
からから寝るわ」

朝食を一足先に食べ終わった強介がテーブルに突っ伏す。

「それにしても、明久達は大変だったみたいだね」

「本当に大変だったよ ふわああああ〜」

明久が再び欠伸を漏らす。

「俺もダメだ……。全然気合いが入ら ふおおおっ！？」

「ど、どうしたんだ雄二！？」

ダルそうにしていた雄二が、何かを見た瞬間一気に覚醒した。な
んだ？ 何を見たんだ？

「……………効果は抜群」

「お、ムツツリーニ」

「あ、ムツツリーニ。おはよう」

俺らの後ろの出入り口からムツツリーニがやってきた。手に何かを持っているみたいだな。

「ムツツリーニ。今しがた雄二に見せたのは何じゃ？ えらく興奮しておるように見えるのじゃが？」

「……………魔法の写真。皆も見ればいい」

ムツツリーニが写真を俺らに手渡してくる。

一枚目の写真は、昨夜撮影した姫路と秀吉の浴衣姿だった。

姫路と秀吉が恥ずかしそうに上目遣いで浴衣姿のツーショットで色っぽくて少し胸元が覗いていて……………うん。それだけで変わったところはなにもない。

「龍人。二枚目は何が写っておるのじゃ？」

「えつと……………」

渡された写真を捲^{めく}る。

すると今度は浴衣姿で迫る霧島の姿とハーフパンツ姿の島田のツーショットが出てくる。

「す、凄いつ！ これも凄いやムツツリーニ！ 今僕はキミを心から尊敬している！」

「まあ、明久と雄二が写らないように撮ってあるのは確かに凄いな。だが、それだけじゃないか？」

俺はついつい本音を口にしてしまった。

「何を言ってるのさ龍人！ キミにはこの写真の凄さが分からないのっ！？ あまり女の子に興味を示さない雄二ですら覚醒したんだよ！ 普通の男子が見たら興奮は間違いないじゃないか！」

「わ、悪い」

明久の力強い熱弁に負ける。あれ？ 熱弁だったか？

「わかつてくれればいいんだよ。っで、三枚目は？」

俺は更に写真を捲る。すると、そこに写っていたのは

セー

ラー服姿の明久。

「何だこれは？」

「……………綺麗に撮れたので印刷してみた」

「放して秀吉！ このバカの頭をカチ割ってやるんだ！」

「落ち着くのじゃ明久！ よく撮れておるではないか！」

秀吉が明久を羽交締めにする。今のお前が感じている気持ちがい
つも秀吉が感じている気持ちに近いと思うぞ。いや、そのまんまか
もしれないな。

「驚いたぞムツツリーニ。まさかここまで凄い写真を撮るとは」

目に輝きを取り戻した雄二がムツツリーニを労っていた。本当に
この写真は凄いらしいが、何処がどう凄いんだ？

「これで増援も期待できるといいうわけじゃな」

「そういうものなのか？ ようわからん。」

「……………これ、他の皆にも見せないとダメかな？」

明久がおかしなことを口走る。

「明久。俺たちの目的を忘れるな。大局を見誤る人間に成功はな
いぞ」

雄二が妙に厳しい目をして明久に告げる。

「う……………。それはそうだけど……………」

目的、ねえ。その目的が覗きじゃなければいいのにな。

「ごめん。確かに間違えていた。この写真は目的の為の手段だし、
そんな未練は断ち切る。後でムツツリーニに1グロスほど焼き増し
してもらっただけで我慢するよ」

「1グラスは多すぎだろ」

「未練タラタラじゃな」

本当、未練タラタラだな。

「よし。それじゃ早速」

雄二がどこからかペンを取り出し、写真の裏に荒々しく何かを書
き殴った。

『この写真を全男子に回すこと。女子及び教師に見つからないよ

う注意！ 尚、パクったヤツは坂本雄二の名の下に死刑を執行する』
なるほどな。確かにそうやって注意書きをしておかないと一瞬で盗まれてしまいそうだ。

「おい須川。コレを男子に順番に回してくれ」

近くで食事をしていた須川に写真を渡す。須川は疑問符を浮かべながらも受け取って、

「ふおおおおおお　　っ！」

覚醒していた。それと同時に俺の携帯もとい、強介から奪って置いた携帯が振動する。メールみたいだ。

俺はポケットから携帯電話を取り出し、メールを開く。

【悪い。写真を見て俺は思った。高感度よりも大事なものがある
と。俺は今この時より、覗きに参加する】

俺は静かに携帯電話を閉じ、ポケットにしまった。

まあ、こうなるとは思っていたがな。だが、2人だけではきついな。なんせ、明久らの気力はここにきて最高潮に達しているんだから。

第25問 悪友なのに手足を縛るってどうしていいんだああああああっ！

読んでくれた方ありがとうございます。

第25問 悪友なのに手足を縛るってどういうことだああああああっ！

カチツ カチツ

時計の針の音が妙に大きく聞こえる。そんな中、俺と強介は手足を縛られ、しかも口にはガムテープが張られている。

「んん！ んんんん！（こんなことしてただで済むと思うなよっ！）」

「ん！ んんん！ んんんん！（そうだ！ 僕と龍人にこんなことしてただで済むと思わないことだねっ！）」

「雄二、龍人たちが何か言ってるよ？」

「ん？ ほっとけほっとけ」

「でも、ものすごく怖いんだけど。本当にここまでする意味があったの？」

明久が雄二に言う。ナイスだ明久。お前はいい奴

「ああ。龍人たちは一番邪魔になるからな」

「そっか。なら仕方ないね」

じゃなかった。全然いい奴じゃない。つつか、悪友なかまを縛ってる時点でもいい奴って事はないな。

その後も明久たちは何かを話し合っていたが、こっちはそれどころではない。早く手足の縄を解かなくては。

俺と強介が必死に手足の縄を解こうとしていると、

ピピッ

どこかで電子音が聞こえた。これは八時を告げる特報。戦闘開始の法螺貝ほらがいだ。

「……よし。てめえら、気合は入ってるか！」

「ん！ んんん！（そんなもんどうでもいいから解きやがれっ！）」

「んんん！ んんんん！（そうだ！ 解きやがれってんだっ！）」
「おうつ！」「おうつ！」

「んんんんん！ んんんんん！（無視するんじゃねええええええええつ！）」

「女子も教師も、AクラスもFクラスも関係ねえ！ 男の底力、とくと見せてやろうじゃねえか！」

「おうつ！」「おうつ！」

もう、ダメだ。話を聞く気すらねえな。

「これがラストチャンスだ！ 俺たち六人から始まったこの騒ぎ、勝利で幕を閉じる以外の結果はありえねえ！」

どさくさに俺と強介を当たり前のように入れんじゃねえ。

「当然だっ！」「当然だっ！」

「強化合宿第四夜・最終決戦、出陣^でるぞっ！」

「よつしやあ　　っ！」「よつしやあ　　っ！」「よつしやあ　　っ！」

強化合宿四日目二〇〇〇時。今、覗きを巡る最後の勝負が始まる
うとしていた

「んんんんんんんんん！（どうでもいいから解いて行けええええええええええつ！）」

俺の叫びもむなしく、全員この場から出て行ってしまった。

約25分後。ようやく縄を解くことに成功した。

「畜生！ 明久に雄二目よくもやってくれたなッ！」

「本当。これは仕返ししなきゃね」

「ああ。これは仕返ししないわけにはいかないだろ。行くぞ強介
！」

「オーケー」

「明久あああああああ！」と龍人。

後ろからは『や、やられたっ!』と雄二の声が聞こえてきたが無視。

階段を降り切ったその先には、ムツツリーニ、工藤、大島先生の姿が確認できた。

丁度召喚獣を召喚したところなのか、点数は高得点のまま映し出されていた。

『体育教師 大島武 & Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス 土屋康太』

保健体育 501点 383点 VS
774点』

「あ、天宮君と桐谷君」

「あ、天宮に桐谷!」

こつち側を見ていた工藤と大島先生が俺らの存在に気付き、名前を呼ぶ。だが、イマハソンナコトドウドモイイ。

「どけええええええ! 試獣^{サモン}召喚!」

俺と強介の召喚獣はあらわれたと同時に、三人に攻撃を叩き込んだ。三人の召喚獣は一撃でノックアウト。今更ながら俺と強介の点数が表示される。

『Fクラス 天宮龍人 & Fクラス 桐谷強介
保健体育 400点 886点』

俺らは三人を倒すと足を止めずに走り続けた。後ろから『なに、あの桐谷君の点数?』『……………お、俺が保健体育で負けるだど』

『つ、強すぎる』などと聞こえてきたが当然無視。

しばらく走り続けると、二人の人物の姿が確認できる。鉄人と明久だ。

「……………な、キサマらも来たのかっ!」

扉の前に立つ鉄人が俺らの存在にいち早く気付き、口を開く。その言葉に明久はビクツと肩を震わせながら俺らの方に振り返る。

「りゅ、龍人に強介! もうあの縄を解いてきたのっ!?!」

「ああ。お前をぶちのめす為にな!」

「そうさ。お前をブチ倒す為に復活したんだっ！」

「お前らは何を言っているんだ？」

こうして、長かった強化合宿の最終決戦が開幕した。

第25問 悪友なのに手足を縛るってどうしていいんだあああああああ！！

読んでくれた方ありがとうございます。

第26問 強化合宿最悪の終わり方(前書き)

今回、バカテスはありません。

第26問 強化合宿最悪の終わり方

「まさか、天宮までもが覗き行為に参加しているとはなっ！」
鉄人がいきなり俺に言う。

酷い誤解の仕方だ。俺は覗きをするために来たわけではないのにな。だが、邪魔をするのならば鉄人もぶつとばす。

「鉄人っ！ 邪魔をしないでくれっ！」

「龍人。忠告する必要はないだろうっ！ 鉄人は言うことを聞かないんだからさ。ってことで、死ねくされやああああっ！」

ダツ！（強介が鉄人に走り出す音）

ドゴツ！（鉄人の拳が強介の顔面に突き刺さる音）

ゴロゴロゴロゴロドガツ！（強介が廊下を転がり、壁に激突する音）

「っふ。いいだろう。相手になってやる」

鉄人は笑みを浮かべながら告げる。

「クツ！ 流石は鉄人だな。明久！ 一時休戦だっ！ 鉄人をぶつ潰すぞっ！」

「オーケー。今だけは組んであげるよ」

「ぬかせ。邪魔だけはするなよ」

「そっちこそっ！」

俺は召喚獣を操り、鉄人に向かって走らせる。明久も同じように召喚獣を操作し、鉄人に向かわせる。

「くたばれええええええっ！」

ドガツ！（明久の召喚獣が振り上げた木刀に俺の召喚獣が激突す

る音)

ドゴツ！(俺の召喚獣がそのまま鉄人に殴られる音)

バゴツ！(俺の召喚獣が廊下に顔面から強打する音)

ゴロゴロゴロツ！(俺がフィードバックの痛みへのたうち回る音)

「いてえええええええつ！ 尋常じゃないほどいてええええええつ！」

「よくもやつてくれたな鉄人！」

明久が鉄人に叫ぶ。いや、原因はお前だろうが。

「俺はなにもやつていないのだが」

それはない。確かに原因が明久にあるうとも、それはない。実際にお前は俺の召喚獣を殴つただろうが。

「こうなつたら、戦死した龍人の為にも僕がやるしかない！ 二重^{ダブル}召喚つ！」

呼び声に応じて現れた分身に指示を出す明久。おい待てコラ。まだ死んでねえぞっ！

「ぐうっ！ 吉井、貴様あ……！」

突然現れたもう一体の召喚獣の攻撃をなんとか防ぎ、鉄人は慌てて距離をとつた。

「白銀の腕輪か。学園長も余計なことをしてくれたものだ」

鉄人の表情から余裕が消えた。

どうやらこの前の大会で手に入れた商品みたいだ。確か明久の方が二重召喚で、雄二の方は召喚フィールドを作ることができるんだつたな。

「先生、勝負はこれからです」

明久が二体の召喚獣に構えを取らせ、挟み込むように移動させる。主^{メイン}獣は右から、副^{サブ}獣は左からそれぞれ木刀を繰り出した。

「ぬっ、くうっ……！ それならば」

ガシッ！（鉄人が俺の召喚獣を掴む音）

バゴッ！（俺の召喚獣が盾にされ、主獣の攻撃を受ける音）

ザッ！（鉄人が副獣の攻撃をかわす音）

ゴロゴロッ！（俺がフィードバックの痛みに転がる音）

「ふっ。甘かったな吉井っ！」

「く、流石は鉄人。やるじゃないか」

こいつら、マジで殺りてえっ！

「でも、だからと言って簡単に負けるわけにはいかないんだよ！
明久が主獣の木刀を振るわせ、副獣は右拳を突き出す。木刀を避け、拳を受けた鉄人は膝を放つ。その目標は副獣。じゃなくて主獣だ。両腕を交差させてガード。するのかと思ったら、明久は自分の召喚獣で俺の召喚獣を掴み、盾にする。」

バゴッ！（見事と言っていいほど綺麗にみぞおちに決まる音）

ポイツ！（明久の召喚獣が俺の召喚獣を投げ捨てる音）

ゴロゴロッ！（俺がフィードバックの痛みに転げ回る音）

「よくもやってくれたな鉄人っ！」

テメエのせいだろうが。

「吉井、貴様も盾を使うとはな」

誰が盾だっつうの！俺はテメエらの盾じゃ

何か意識がも

うろつとしてきたな。もう、ダメかも。

俺の強化合宿はおかしな形で幕を下ろしたのだった。

蛇足になるが、俺と強介も処分を受けることとなった。暴走して教師たちを打つ潰したのがいけなかったのかもしれない。

第26問 強化合宿最悪の終わり方（後書き）

字数が少なくて申し訳ありません。

読んでくれた方ありがとうございました。

第27問 観察処分者にめでたく認定されました (初) (前書き)

今回から数話は前の話や間の話になります。

これからは時系列を気にして投稿して行こうと思います。

第27問 観察処分者にめでたく認定されました (初)

以下の()にあてはまる歴史上の人物を答えなさい。

楽市楽座や関所の撤廃を行い、商工業や経済の発展を促したのは
() ()である。

姫路瑞希の答え

『織田信長』

教師のコメント

正解です

島田美波の答え

『ちよんまげ』

教師のコメント

日本にはもう慣れましたか？

この回答を見て先生は少し不安になりました。

吉井明久の答え

『ノブ』

教師のコメント

ちよっと慣れ慣れしいと思います。

天宮龍人の答え

『つるつるぴかぴか。きゅきゅ、ピカーンッ!』

教師のコメント

……………職員室に来てください。西村先生を交えてみっちり
と話し合いますよ。

「全員動くな! 鞆を机の上に置いて、中身が見えるように開け
!」

朝のHRが始まるや否や、いきなり担任の鉄人がそんなことを告
げた。

つま、俺には関係ないかな。音楽の続きでものんびりと聞こう。
俺は再びMP3プレーヤーから伸びているイヤホンを耳につけ、音
楽を再生する。

「ふふふふん。ふん。ふふん。ふん。ふふふふん。ふふん。ふふ
ふふふふん。ふふん。ふふふふん」

俺が鼻歌をしていると、不意に鉄人の声が響く。
「言っておくが、逃げようなんて考えるなよ?」

誰も逃げないって。逃げきれないんだから。

「よし、それじゃあ見て回るぞ。授業に関係のないものは全て没
収するからな」

廊下側の最前列から順に鞆を覗き込んでいく鉄人。トランプや雑
誌といった小物が次々と没収されていく。

「坂本、お前はポケットの中も見せる」

そんな中、とある一人の生徒は鞆の中だけではなく、ポケットの
中までチェックされていた。

「……………くそっ」

悔しげに毒づいたのは坂本雄二。俺の悪友だ。

言われた通りに渋々ポケットを裏返すと、そこからはMP3プレイヤーが出てきた。

「やはりな。これは没収だ」

雄二のMP3プレイヤーを没収品袋の中に仕舞い込む鉄人。まさかポケットの中までチェックされるとは思ってもみなかった雄二は忌々しそうに鉄人を睨みつけていた。

（雄二、災難だったね）

小声で雄二に話しかけているのは吉井明久。俺の悪友だ。

（本当に災難だ。普通ポケットまで確認するか？ しかも、そこまでやられたのは俺だけだぞ？）

（仕方ないだろ。雄二は日頃の行いが悪いんだからよ）

俺も会話に参加する。

（お前にだけは言われたくねえよ。現在進行形で音楽を聴いている奴にはな）

（本当、龍人は怖いもの知らずだよ）

（ほっとけ）

見ていると、相手次第でチェックのレベルが違うことがわかる。品行方正な生徒には鞆の中を軽く開けさせるだけで、そうでない生徒は鞆の奥までチェックしている。

「次はお前だ、天宮龍人」

「ん？ 俺ですか？」

鉄人が俺の前に来た。まさか俺まで雄二と同じようにポケットの中をチェックされるのか？

「お前はとりあえずイヤホンを外せ」

「あ、はい。了解」

俺は言われるがままにイヤホンを外す。

「よし、そのMP3をこっちに渡せ」

「っは？ 嫌ですっ！ これは暇な授業の時に

「暇な授業の時に何だ？」

「ごうぞ」

俺はMP3を鉄人に手渡しして席に座る。

「次はお前だ、吉井明久」

「あ、はい」

今度は俺の後ろの席に座っている明久の番だ。明久はどうやって調べられるんだ？

「お前は制服を全部脱いでジャージに着替える」

「え！？ それ警戒しすぎじゃない！？」

想像をはるかに上回るとんでもない信頼関係だ。

「あの、西村先生。女子も見ている前で着替えるのはちょっと…」

「ダメだ。お前はズボンの中にすら何かを隠し持っているおそれ虞がある。ここで着替える」

「そんな！ いくら僕でもそこまではしなないです！ 少しは僕を

信頼

と先生に詰め寄った明久が拍子に、ガシヤツと音をたてて明久のズボンの裾（両方）から何かが落ちる。

「おい。明久DSが落ちたぞ」と雄二。

「おい、明久PSPが落ちたぞ」と俺。

「ん？ ああ。ありがとう」

明久が拾った俺と雄二にお礼を言って携帯ゲーム機を受け取り、再び先生に向き直る。

「先生、少しは僕を信頼してください！」

「お前はジャージだけでなく、下着すら着るな」

それってつまり、スッポンポンってことだよな？ 警察に捕まるぞ。

「それにしても、ゲームソフト、マンガ、小説、DVD……。お前は学校をなんだと思っているんだ？」

没収品袋を引っさげて鉄人が教壇に戻る。これで明久はお宝たちと再び会えることはないだろうな。

「さて、持ち物検査に時間を取られたのでHRは省略する。一時

間目はいよいよ『試験召喚実習』だからな。全員速やかに体育館に移動するように」

締めの一言を告げ、鉄人は皆のお宝を抱えて教室から出て行った。

『
試^{サモン}獣召喚っ！』

既に試験召喚実習を終えている俺が体育館内に響く声を聞きしていると、不意に声が掛けられた。

「……朝からついてないよね」

「本当、ついてねえな」

「まったくだ。よりによって先月買ったばかりのMP3プレイヤーが没収されるとは。くそっ」

「なんだ。あれ買ったばかりだったのかよ。それはついてねえな」

「高かったんだぞ畜生」

野性味溢れる顔を歪め、悔しげに呻く雄二。その気持ち、俺にもわかるぞ。俺が没収されたMP3も先々月買ったものだからな。

「明久はゲーム機とかだったよな。それも、かなりの量を」

「うん……。総額で軽く三万はいったと思う」

「うわぁ。マジかよ」

それは可哀想過ぎる。三万とか……。つつか、眠くなってきた。寝よ。

「俺は寝るから、終わったら起こしてくれよ明久」

「ん？ わかったよ」

俺は頭の後ろに両手を持っていき、目を瞑る。徐々に俺の意識は闇に吞まれ、最終的には完全に眠りについた。

俺は放課後、いつものメンバーとグチらず、先に学校を出ていた。
「龍人！」

俺が30分ほど商店街をうろろろしていると、不意に後ろから声が掛けられた。俺は声の主の方へ振り返る。そこには明久が居た。

「なんだ明久か。お前、雄二たちとグチってたんじゃないのか？」

「うん。グチってたけど、途中で邪魔が入ってたね」

「ふん。なるほどな　　つと、あの店に入ってたのは姫路じゃないか？」

「つへ？　どこどこ？　どこの店？」

「あそこだよ」

俺は姫路が入った店を指さす。

「どうする？　俺らもあの店に行くか？」

「うん。そうしようか」

俺らは姫路が入った店へと足を運ぶ。なんだか随分ぬいぐるみが多い店だな。まるでファンシーショップみたいだな　　つてこの店、本当にファンシーショップじゃねえか！

「か、帰るか明久？」

「そ、そうだね。この店は僕らに場違いだよな」

俺と明久は出口に向かって早足で歩き出す。一刻も早くここを出たい。

『葉月一生のお願いです、おじさんっ！』

『そうは言っても、うちも商売だしねえ………』

と、出口付近でそんな口論が聞こえた。どうやらレジの傍で店員と話をしている女の子がいるみたいだな。随分必死そうな口調だが、どうしたんだらうか？

気になった俺と明久は声の元へ向かってみる。すると、そこには予想通り店員らしきおっちゃんと小学生と思われる女の子がいた。

「どうしても、このノイちゃんが欲しいんです。お願いですつ」
「そんなにお願いされても……。ホラ、お譲ちゃんだけにオマケしちゃうと、皆にもしてあげないと不公平だろう？ お店の人はそんな不公平をしちゃいけないんだよ」

「それでもお願いですつ」

「うう……。弱つたなあ……」

やり難そうに頬をかいている店員のおっちゃんに、女の子は一生懸命頭を下げていた。こんなに小さな女の子が困っていると助けられずにはいられないんだよな。俺の妹と被って見えてよ……。

「ねえキミ。どうしてそんなにそのぬいぐるみが欲しいの？」

俺と同じことを考えたのか、明久が女の子に言う。

「実は。さ、最近 (事情説明中) 」
「なるほどな」

どうやら、この女の子には姉がいて、この子の家族はドイツから日越してきたばかりで、その姉は日本語がうまく話せないせいでの頃元気がないから前から欲しがっていたぬいぐるみをプレゼントしようと思ったのだけれど、お金が足りなくて買えないのか。金貸してあげたいけど、今は2000円しか持ってないしな。

「それなのに、お姉ちゃんはいつもいないパパやママの代わりにお掃除とかお洗濯とかして、葉月と遊んでくれたりもして……」

話しているうちに感極まってきたのか、葉月ちゃんは大きな目を潤ませ始めていた。

「わわっ！ な、泣かないで！ お兄ちゃんたちがなんとかしてあげるから！」

「そ、そうだ。お兄ちゃんたちがなんとかしてやるから！」

「……本当？」

「うん、本当」

「ああ、本当だ」

「……お兄ちゃんたち、ありがとう！」

涙を拭って、嬉しそうに笑う葉月ちゃん。

「それで、このぬいぐるみはいくらですか？」

明久が店員に尋ねる。葉月ちゃんが抱えているぬいぐるみは1メートルぐらいだ。5000円は覚悟しておいた方がいいだろう。

「税込みで24800円になります」

「ごめん。お兄ちゃん　うわっ！」

「早すぎだっ！」

俺はギブアップしようとしていた明久の肩を掴む。

「そ、そうだね。早すぎだね。ちなみに葉月ちゃんはいくら持ってるの？」

「10000円しか持ってないの……」

「おい、明久。お前いくら持ってる？」

「1699円だよ。龍人は？」

「2000円だ」

「……………」

……俺と明久のを合計しても13699円。24800円には遠く及ばない。

「明久。いいアイデアないか？」

「あるといえばあるけど……」

「ほ、本当かつ！？　それはどんな方法だ？」

「ん？　今から見せてあげるよ」

明久は俺にそう告げると店員に向き直る。

「ところで13699円だと、だいたい半額ですよね？」

「ああ」

「葉月ちゃんはぬいぐるみが欲しくて、おっちゃんも売ってあげたい。でも、いくらなんでも半額じゃ売れない。そこで、僕からの提案です」

「ふむ。なんだね？」

「ぬいぐるみを半分に裂いて右半身だけを売ってもらえば」

「お、それはいい考えだな」

「でしょ。もっと僕を褒めてよ」

「ああ、えらいぞ明久。お前は天才だつて　　なんで二人はバ
力を見るような目で俺らを見ているんだ？」

「……キミたちは本当に高校生かね？」

「……バカなお兄ちゃん」

ノリで明久の提案に乗つたら物凄く罵倒された。今度から明久の
考えにノリで乗るのは止めにするかな。

「オマケはできないけど、少しの間売りに出さないでおいといて
あげるから、その間にお父さんやお母さんに相談しておいで」

結局おつちゃんがそう結んで、この交渉は終了となり、その後明
久と話し合った結果、明日再びこの時間帯に葉月ちゃんと公園で合
うことになった。

俺と明久は明日、鉄人に没収された物を取り返すことになったの
である。

第27問 観察処分者にめでたく認定されました (初) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございました。

第27問 観察処分者にめでたく認定されました (終)

次の日の放課後。

俺と明久は鉄人から没収品を奪い返すべく、色々と朝から準備をしてきた。

朝いつもの三人に相談を持ちかけ、三人と協力してくれることになり、まずはどこに没収品をしまっているのかを確認する為に鉄人が出席確認をしている時に明久の携帯電話を鳴らし、鉄人がその携帯を取り上げてどこに隠しているかをムツツリー二が調べ、なおかつ鉄人はズボンの左後ろのポケットに鍵をしまっていることもわかった。

「二人とも準備はいいか？」

雄二が俺と明久に尋ねる。

「ああ。俺は良いぞ」

「僕もいいけど、やっぱり僕がペンキをぶっかける方には納得できない」

俺らの作戦はこうだ。明久が初めにバケツいっぱいに入ったペンキを鉄人にぶっかけ、その後に俺がバケツ一杯に入った水をぶっかけ、鉄人がびしょびしょになったところへ雄二があたかも通りかかり、鉄人にジャージに着替えさせる。そして、こっそりと鉄人の服から鍵を取るといふものだ。

「お、鉄人が来たぞ。二人ともがんばれよ」

「ああ。任せとけて。明久！」

「わかったよ」

明久が階段を昇って来ている鉄人に攻撃を開始した。

「ああっと！ 足が滑ったあつ！」

モップを右手に持ち、躓いたかのようによろけて、左手のバケツを階段の踊り場に立つ鉄人目掛けて放り投げる明久。

「！ むっつ！」

バ、バカな！？ 流石は鉄人だ！ 突然の事態にも瞬時に反応して回避行動を取るとは！ けど

「逃がすかあつ！」

明久はモップを叩きつけて、鉄人が回避した方向にバケツを飛ばす。

バツシヤアアア

カラカラカラ（鉄人にペンキがかかる音&

バケツが落ちる音）

「もういっちょよ！ うわっ！ 俺も手が滑ったあつ！」

バツシヤアアア

カラカラカラ（鉄人に水がかかる音&バケ

ツが落ちる音）

俺と明久は足元の水とペンキを踏まないように気をつけながら、散らばったバケツとモップを拾い上げ、立ちつくしている鉄人に告げる。

「すみません。足が滑り あがあつ！ 先生（鉄人）！

百科事典は鈍器として作られてはいないはずですよ（はずだ）！」

「『逃がすかあつ！』や『もういっちょよ！』と、聞こえたんだが？」

「空耳です」

「真顔で嘘をつくな。歯を食い縛れ」

「せ、先生（鉄人）、百科事典の角だけはっ！」

雄二たち、早く来いよツ！ このままじゃ俺と明久の顔が變形するぞ！

「やれやれ、明久に龍人。やらかしたな」

どこからともなく現れる雄二たち。助かったな。

「あれほど先生にペンキをブチ撒けてから水をブチ撒けるなんてやめておけ」と忠告したのに……」

「い、痛いっ！ 先生（鉄人）！ 本当にわざとじゃありませんから！」

雄二の野郎。いつもの仕返しと言わんばかりにハメやがったな！

「先生。明久と龍人の処刑は後にして、とりあえず着替えた方が

いいつすよ。俺のジャージで良ければ貸しますけど」

「そうだな。濟まないが貸してもらおう。吉井と天宮は床をきちんと拭いておけよ」

そう告げて、鉄人は濡れ鼠状態なずみで雄二たちと教室の中に消えていった。

「……ハメられた」

「……貧乏くじだ」

とりあえず言われた通りに床を拭く。掃除用具は手元にあるし。

そうやって明久と一緒に後始末をしていると、教室の中から秀吉が出てきて俺らの所に来た。

「明久に龍人。鍵をゲットしたぞい」

「そつか。それなら後は職員室に殴りこみに行くだけだな」

「いや、龍人。殴りこみじゃなくて侵入だからね」

「うむ。どちらにせよ鉄人に気づかれないうちに素早く済ませるのじゃ」

「了解」

モップを壁に立てかけ、職員室に向かう俺と明久と秀吉。

「それれじゃ、ちよつくら行ってくるわ」

秀吉から鍵を受け取り、俺は職員室の扉に手をかけた。

「大丈夫かの？」

「心配要ねえよ。目立たないように職員室に入って、目的の物を回収するだけだからな」

「そうだよ。心配要らないよ」

一応、俺は不良として多少は教師に目をつけられていると思うが、いざって時は明久に行ってもらえばいいしな。

「そうか。ならば、ワシはここで待機していよう」

「ああ。そうしてくれ。それじゃ、行くぞ明久！」

「オーケー」

「それじゃ 失礼しまゝす」

そつと職員室の扉を開ける。大丈夫。この俺と明久が目立つワケ

がない。

「吉井と天宮か！ ちょっとこっちに來なさい！」

「なんで！？ どうして僕と龍人がいきなり目をつけられてるの！？」

入った瞬間、俺と明久はいきなり古典の教師に捕まった。なんでこうなるんだ？

「この前の宿題の『徒然草の現代語訳』について、お前らの言い訳を聞きたい」

「あれ？ その宿題はきちんと提出したはずですけど」

「俺もだ。その宿題はきちんと提出したと思うが」

「その語調が何故ラップ調なのかを教えてください」

「え？ だって、現代語って言われたから、最近の日本語を」

「俺は面白そうだからそうやって書いただけなんだが」

「あ、吉井君に天宮君。そっちの話が終わったら私のところにも来るようにね」

「吉井に天宮。この前提出してもらった科学のレポートだが、あれはないだろう。ちょっと後で話を聞かせなさい」

いつの間にか教師方に取り囲まれた。なんてことだ。これじゃ、作戦がうまくいかないぞ。

「失礼します……」

そんなことを考えていると、職員室の中に新たなちんごゆいしや闖入者が。ん？ あれは秀吉か？

「おお、木下か。一体どうした？」

「きゅ、急に……具合が悪く……。保健の先生も……いなくて……」

口元を押さえている秀吉。流石だな。顔色まで悪くできるなんてな。

「秀吉、だいじょうぶ」

俺は明久が駆け寄り寄ろうとするのを止めた。すると、明久もどうい

やっぱり姫路だった。あれ？何かおかしくないか？『よ、吉井君っ！？』……って、俺は空気ですかっ！？それは明久の方が付き合いは長いと思うが、空気扱いされるのはあれだよな……。

「あの〜。龍人もいるんだけど」

「あ、ごめんなさい。見えていませんでした」

「いや、謝らなくてもいいんだがな」

「あ、そうですよね。ごめんなさい」

「「「」

「……昨日、職員室で盗難が発生した」

「お、俺は行くわ。明久に姫路。じゃーな」

俺はこの場から去った。逃げだした訳じゃないぞ？ただ、何かあの場にいたくなかっただけで……。あ、そういやー何で姫路はあんなどころにいたんだ？

「……昨日、職員室で盗難が発生した」

翌朝のHR。開口一番鉄人がそんなことを言い出した。これは間違いない。俺らが奪還した没収品のことだ

「これは大変嘆かわしい事態だと思わないか、吉井に天宮？」

何故か俺と明久に話が振られる。きつと鉄人のことだ。俺らが実行犯だと目星をつけてカマをかけていやがるに違いない。誰が動じるかよ。

「そうだな。全く嘆かわしいことだと思いますね」

「僕も嘆かわしいことだと思います」

自然にさらりと受け流す。余裕だったの。

「そうか。ところで、その犯人である二人は私物の本を盗んでいったんだが」

ん？私物の本？それってあの古本の事か？やはり鉄人のだったか。

「度胸のあることに、窃盗の犯人は身分証明書を提示して、堂々とその本を売り捌いたようだ」

「そうですね。それはまた豪胆ですねえ」

「全くだな明久。先生、その犯人は豪胆だなあ」

「全くだ。はっはっは」

「あっはっは」

三人でからからと気持ちよく笑い合う。心の底から楽しげに、大口を開けて。本当に、目以外は楽しそうに。

「吉井いつ！ 天宮あつ！ 歯を食い縛れえっ！」

「す、すみませんでしたっ！ まさか先生の私物だとは」

「思わなかったと言っのかっ！」

「いえ、ちよつとは思ったけど、『鉄人だし、まあいつか』と思つて痛いっ！ 先生！ 頭蓋骨が陥没しそうです！」

「天宮！ 貴様はどうなんだ！？」

俺に来るのかよ……。

「俺は鉄人のだと思いましたが。だから、逆に売りさばきたくなつて痛いっ！ 先生！ 頭蓋骨が陥没しそうですよ！」

「やはりキサマらにはバカの疑いがあるな。今後は充分気をつけて視ていく必要がある」

「先生！ これ以上目をつける余地があるとは思えないのです
が！」

「いや、あるだろう？ とつておきの、キサマらにぴつたりの栄
誉ある肩書きが」

「え？ それって……」

「ま、さか……」

「今朝の職員会議で、満場一致で可決した。受け取れ。先生から
お前らへの贈り物だ」

いつの間にか鉄人が手にしていた紙には、飾り気の無い淡白な文章が一行だけ書いてあった。

吉井明久、天宮龍人。上記の者を文月学園指定《観察処分者》として認定する

第28問 無理矢理如月ハイランドに連れてこられて (初)

「明久」

「ん？ なに、雄二？」

「そういえば、例のチケットはどうした？」

「例のチケットって 如月ハイランドのプレミアムチケットのこと？」

「ああ。確か今週末がプレオープンの日のはずだが、姫路を誘って行ってみたりはしないのか？」

「な、何を言っているのさ雄二！ だって、あのチケットを使って入場したら、如月グループの力で一緒に行った人との結婚を強要されちゃうんでしょ？ そんなことになったら姫路さんが可哀想じゃないか」

「そりゃ、向こうも『如月ハイランドを訪れたカップルは幸せになれる』なんてジंकスを作り上げようと必死だからな。来園するカップルが結ばれるように色々な手出しをしてくるだろうが」

「うんうん。そうだよな」

「だが、姫路も満更じゃないと思うぞ」

「……ほえ？」

「いいじゃないか。勇気を出して誘ってみたら。意外とすんなりOKをもらえるかもしれないぞ」

「あ、あはは。またまた雄二ってば、冗談ばかり。僕なんか姫路さんと結婚なんて、そんなのあるわけないじゃないか」

「ふむ。まあ、お前がそう言うならそれはそれで構わないが。けどそれなら、チケットはどうしたんだ？」

「丁度身近に結婚を考えている人がいたからね。その人にあげたよ」

「そうか。そんなヤツがいるなら都合が良いな。そのままうまく結婚になれば、如月グループも喜ぶだろうしな」

「そうだね。うまくいけば全員が幸せだもんね」
「その連中、うまくいきそうなのか？」
「うん。あとは時間ときっかけの問題だと思うんだ」
「そうか。うまくいくといいな」
「大丈夫。きつとうまくいくよ」

とある休日の朝。

カーテンの隙間から差し込む陽の光と雀すずめの鳴き声で目を覚ますと、
「……雄二、おはよう」
俺のベッド脇に翔子がいた。

「……今日はいい天気」
シャツとカーテンを開く翔子。陽光が更に強く部屋の中に差し込んできた。

「ん？ ああ、そうみたいだな」
強い光に目を細めながら、まじまじと幼なじみの姿を見る。

今日は休日だからか、いつもの制服姿ではないようだ。上は白い長袖ながそでのガーディガンで、その下に薄いピンクのカットソーを着ている。下は薄手の膝上程度のスカートで、下着が透けない為のインナーが中に見える。ペチコートとかいうヤツだったか？ いつもはTシャツにジーンズやデニムのミニを合わせている格好なので、今日はこいつにしては随分と気合の入っている格好だと言えるだろう。

なんて、柄にもなくファッション観察をしている自分に驚く。寝惚けているのかもしれない。

眠気を振り払うように頭を大きく振って、翔子に向き直る。

「改めて、おはよう。翔子」

「……うん。おはよう雄二」

「よいしょ、っと」

布団を押し分け、ベッドから出る。

そういえば、どうして翔子が俺の部屋にいるんだ？ 今日のコイツと何かの約束をしていたっけ？

寝起きのため本調子には程遠い頭で記憶を掘り起こす。ダメだ。覚えがない。

覚えがないのなら、約束ではないのだろう。だとすると……。他の理由を少し考えて、一つの結論に辿り着く。そうか、そういうことか。

「悪い翔子。俺の携帯を取ってくれ」

「……電話でもするの？」

「ああ、そうだ」

翔子が渡してくれた携帯を操作し、番号をプッシュする。

コイツがここにいること。それは

「ああもしもし？ 警察ですか？」

不法侵入だ。

時刻のコンビニ
SIDE 天宮龍人／雄二が起きる頃とほぼ同

俺は大抵朝飯はコンビニの物で済ませる。今日は何をしようか？ サンドウィッチ？ スパゲティ？ おにぎり？ それとも、弁当？ さてさて何にしようか？

「うん。昨日はサンドウィッチだったしなあ。今日は米を食いたい様な気もしなくもないが、麺類も捨てがたいな。さて、どうする？」

何度目かの独り言を呟く。うん。よし、これにするか！

俺は『スーパーデリシャス牛カルビ弁当』と書かれている弁当を手を取った。どの辺がスーパーデリシャスなのだろうか？ それは食べてみなければわからないことだ。今から食べるのが楽しみになっってくるな。

俺は先に選んでいた飲み物と一緒に弁当をレジにまで持っていく。

「750円になります」

「はい」

俺はきつちり750円を渡すとレジ袋を肩に担ぎ、店を後にした。

俺は自分の家の前まで来るとドアノブを握った。

「あ、そういえば鍵をかけていたよな？」

ここでようやく違和感に気づく。確かに俺は家を出るときに鍵をかけた。なのに、かぎがかかっているのだ。これは怪し過ぎる。

俺はそーっと少しだけ扉を開き、中を覗いてみた。少し先にあるリビングに見慣れた奴の姿がいくつかあることに気づく。明久達だ。

「なんだ。明久か。って、ちょっと待て。俺は誰にも合鍵を渡していないはずだぞ。なのになんで、入れているんだ？ これは、怪しいな」

俺は一人呟く。

俺は考えていても仕方ないと思い、扉を開けて家の中に入る。俺は迷うことなく明久達の要るリビングに向かう。

「おい、お前ら何やってるんだよ？」

「あ、龍人おかえり」と明久

「おかえりなのじゃ」と秀吉

「……………おかえり」とムツツリー二

「お、龍人。遊びに来てやったZE」と強介

俺に気づいた計四人が口々に言う。つうか、最後の誰だ？ 強介か？ 随分と浮かれてるな。まあ。とりあえず

俺はポケットから携帯電話を取り出し、操作をして番号をプッシュする。

「ああもしもし？ 警察ですか？」

不法侵入って事で捕まえてもらおう。

「つで、どういうことだ？」

俺は警察に言うのを止め、その代わり四人に正座させた状態で言う。

「どういうことって？　ただ遊びに来た　　（ビュンッ！）」

「ただ遊びに何だ？」

「　　すいやせんした！　ちよつとふざけ過ぎましたっ！」

明久の頬にカッターが当たるか当たらないかの所に投げただけでの効きめ。流石だな。

「最初はムツツリーニに聞く。目的は何だ？」

「……………それはむ　　（チラッ）」

「　　りだ（チラッ）」

「ムツツリーニ。エロ本を探してるようだが、俺の家にはそんなものないぞ」

「……………そんな物探していない」

目が泳いでいるのだが言わない方がいいんだろうな。

「ムツツリーニは喋りそうにないので秀吉　　」

「それは無　　」

「　　と思ったが、強介。目的を言え」

どうせ秀吉は喋らないだろうからパス。聞くだけ時間の無駄だ。

「な、なんでじゃ！　何故ワシには聞かぬのじゃ！」

「時間の無駄だから」

俺はきっぱりと言い捨てる。

「つで、強介。目的は何だ？」

「そ、それは　　」

「それは？」

「　　全員！　龍人を取り押さえろおおおおおお！」

「つて、まてやコラあああああ！　話のながらがおかしいだろつて、明久、テメエ！　手を縛るんじゃないやねえ！　む、ムツツリーニ！　お前は何を嗅がせようと　　ガクンッ」

俺の意識はここで途切れたのだった。今度見かけたら絶対に殺し

しめる。

第28問 無理矢理如月ハイランドに連れてこられて (初) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございます。

第28問 無理矢理如月ハイランドに連れてこられて (中)

「……おい、ここはどこだ？　そして、何故お前らがいる？　監視か？　監視なのか？」

「ん？　ボクも優子も遊びたいだけなんだけどなあ」と隣にいる工藤。

「アタシたちは遊びたいだけなのよ？」と隣にいる木下姉。

絶対に監視役だろ。はあ。本当なんてこうなったんだろう……。なんでこうなったかは俺にもわからない。目を覚ましたらいつの間にか如月ハイランドの前にいたのだ。

「分かった。そこまで遊びたいなら　二人で行って来い」
回れ右をする俺。つが、両肩を掴まれた。

「天宮君。何処に行くの？」

工藤と木下姉が言う。この頃思うが、この二人の俺に対する扱いは酷いと思う。口調やキャラも所々変わってるし。俺、何か悪い事でもしたか？

「な、なあ。帰らせてくれないか？」

「ダメ」

うおおおおおおおおいっ！　即答かよおおおおおおおおおおっ！

本当、この頃俺への扱いが酷過ぎると思う。マジで俺、なんかしたか？

「……俺は……無力だ……」

俺がそんな事を考えていると聞き慣れた声が横から聞こえてきた。俺は声の主の方を見る。雄二だった。隣には霧島もいるな。

「雄二。お前、何やってるんだ？」

「龍人！　お前こそ何やってるんだ？」

「明久達にハメられたんだよ。まったく、何を考えてるんだかつ！」

「お前もなのか？」

「つへ、てことは雄二も八メられたのか？」

「まあな。俺は明久だけにだが」

「そうか。お前も苦労してるんだな」

俺はポンポンと雄二の肩をたたく。本当、お互い大変だな。雄二にこれほどの親近感を持つとは思わなかった。

なんか向こうでは工藤と木下姉。それから木下が何かを話している。

「あ、そうだ。なあ雄二」

「ん？ なんだ？」

「俺、工藤と木下姉になにかしたか？ この頃俺の扱いだけ酷いような気がするんだが。つつか、監視役を引き受ける時点であれだと思っただが……」

「龍人って明久と同じぐらいあれだよ……」

「ん？ どういう意味だ？」

「そういう意味だよ」

いや、どういう意味だか分からないんだが。

『……雄二。とにかく、入ろう』

そんな事を考えていると不意に霧島がやって来ていた。しかも、一瞬で雄二の左腕に関節技を決めていた。痛そうだなあ。

「はっはっは。翔子、俺の肘関節はそっち側には曲がらないぞ？」

雄二のヤツ脂汗を流しているが大丈夫なのか？ まあ。雄二なら平気だろ。じゃ、俺は

『ボクたちも行くぞうか』

『そうね、天み』

「さて、俺は帰るかな。じゃ、雄二。俺は帰るわって痛いっ！

木下姉。俺の肘関節もそっち側には曲がらないぞっ！」

一瞬にして関節技をかけられた。

「木下姉。放してくれ」

「だって放したら天宮君帰っちゃうじゃないの」

「そつだよ。天宮君は帰ろうとするでしょ？」
いくら監視役を頼まれてるからって、やり過ぎじゃないか？ 正
直もの凄く痛い。」

「じゃ、代表。とりあえず入ろうか？」

「そつだね。とりあえず入ろうか？」

「……………（こくこく）」

「おい、そこの三人。俺と雄二に拒否権はないのか？」

「そ、そつだ！ 俺らに拒否権はないのか!？」

「「「ない」「」」

即答された。本当、扱いが酷過ぎると思う。

「……………とにかく、入る」

「そつだね。とにかく入ろうか？」

「そつしようか？」

「「ぐあつ！ せめて関節技を解いてから歩いてくれ！ 本当に
肘が逆方向を向いてしまう!」」

俺らの叫びをちっとも気にとめない女子三人は俺らの腕を人質に
取った状態で入場ゲートへと連行する。プレオープンという限定的
な期間である為か、特に待つこともなく係員の青年の前に進むこと
ができた。

「いらっしやいませ！ 如月ハイランドへようこそ!」

その男は日本人ではないのか、若干訛りじゃっかぢまの混じった口調で俺たち
に笑顔を振りまいた。顔立ちはアジア系っぽいので日本人かどうか
はよくわからないが。

「本日はプレオープンなのですが、チケットはお持ちですか？」

「……………はい」

「お願いします」

霧島と木下姉がポケットからチケットを取り出す。

「拝見しマース」

係員は二人のチケットを受け取ると、雄二たちの方を見て笑顔の
まま一瞬固まった。

「……そのチケット、使えないの……？」

霧島がそんな係員の様子を見て不安そうに表情を曇らせる。

「イエイエ、そんなコトはないデスよ？ デスが、ちよつとお待ちくだサーイ」

係員はポケットから携帯電話を取り出し、俺たちに背を向けてどこかに電話をし始める。

「私だ。例の連中が来た。ウエディングシフトの用意を始める。確実に仕留める」

「おいコラ。なんだその不穏当な会話は」

雄二は本当に大変なんだなあ。つうか、係員の目の色が急に変わったんだが。

「……ウエディングシフト？」

霧島が首を傾げている。まあ、如月グループのたくらみを知らないんだから無理はないか。俺も聞いたただけだけ。

「気にしないでくだサーイ。コッチの話デース」

取り繕ったように元の雰囲気に戻る係員。怪し過ぎる。

「アンタ、さっき電話で流暢に日本語を話してなかったか？」

「オーウ。ニホンゴむつかしくてワカリませーン」

雄二が係員の事を『こいつムカつく』って顔で睨んでやがる。

「ところで、そのウエディングソフトやらは必要ないぞ。入場だけさせてくれたらあとは放っておいてくれていい」

雄二も潔いとも言えるネーミングのおかげでむこうのやるうとしていることはよくわかってるみたいだな。

「そんなコト言わずニ、お世話させてくだサーイ。トツテモ豪華なおもてナシさせていただきマース」

「不要だ」

「そこをナントカお願いしマース」

「ダメだ」

「この通りデース」

「却下だ」

「断ればアナタの実家に腐ったザリガニを送りマース」

「やめろっ！ そんなことをされたら我が家は食中毒で大変なことになるてしまうっ！」

この遣り取り見てて面白いな。

「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」

「……記念写真？」

「ハイ。サイコーにお似合いのお二人の愛のメモリーを残しマース」

「……雄二と、お似合い……（ポツ）」

「……いいなあ……」

霧島が頬を赤らめている傍らで工藤と木下姉が呟いていた。やっぱり女子ってこういうことに憧れるんだなあ。監視役なんて引き受けないで彼氏でも探せばいいのになあ。

「お待たせしました。カメラです」

そんな事を考えていると、そこに帽子をかぶったスタッフがカメラを片手に現れた。

こいつ、見覚えがあるぞ。帽子で顔を隠しているのが怪しい。

「アナタが持ってきてくれたのデスか。わざわざありがとございマス。助かりマース」

係員が礼を言いながらカメラを受け取る。やはり妙だ。そこらのコンビニならともかく、こういった場所のスタッフが客の前で同僚に丁寧な例を言うだろうか？

「悪いがちよつと電話させてくれ」

「わかりませタ」

俺と同じことを考えたのか、雄二は携帯を取り出し、どこかに電話をかける。まあ、明久にだろうけどな。

P r r r r r P r r r r r

「ああ、すいません。僕の携帯ですね」

すると、先ほどカメラを持ってきたスタッフの尻ポケットから電子音が響きだした。

ビンゴみたいだな。

「……いよう明久。テメエ、面白いことしてるじゃねえか……！」
「人違い　うわっ！」

俺は逃げだそうとした明久の前に立ち、行く手を阻んだ。雄二は向こうで捕まっているからな。俺が雄二の分も含めてやってやるう。
「おい明久。本当に面白いことしてるようだなあ。俺も混ぜてくれよ」

にやにや笑みを浮かべながら言う。目は笑っていないが。

「お、おはようございます。私はココのスタッフのアキ・ヒツサと申します」

「殴りたいか？」

俺は拳と首をポキポキ鳴らしながら明久に歩み寄る。

「ぼ、暴力はいけないんですよ！　話し合いましょー！」

「今朝はなしている途中にいきなり襲いかかってきたのはどこのどいつだ？　アア？　どうせ、強介とかも来てんだろお？」

「……（タラタラ）」

明久が嫌な汗を流しているが気にしない。とりあえず10回殴るか。

「明久。死にさせええええええええええ！」

「お客様。暴力はいけないこと　」

俺の拳が止められる。この声、強介だな。

「強介。お前も殴りたいか？」

「　だと思いましたが、このスタッフだけは殴ることを許可しますぞダンナっ！」

ちよつと脅しただけで明久を殴る許可が下りた。つうか、ダンナつてなあ……。

「ちよ、きよ……変態タイさん。許可しないでよッ！」

「誰が変態タイだっ！」

「反応してる時点でお前じゃないか？　つうか、強介の『きよ』まで出てたしな」

『天宮君。 回ろつよ』

『そうだよ。 折角来たんだから』

俺がバカ×2を殴る前に工藤と木下姉が着てそう告げた。

「まあ、それもそうだな。 折角来たんだし明久の命にかかわることを言いながら回るのもいいかもな」

「ちよ、それは止めてっ！」

「何であんたが止めるんだ？ アキ・ヒツサさんよお」

「うっ！」

明久が言葉に詰まる。

「じゃー工藤に木下姉。 行くか」

「いいの！？」

「本当に！？」

二人は俺の返事が意外だったのが驚いている。 ああ、せっかくここまで来て帰るのはあれだからな。

「じゃ、行こうぜ二人とも」

「ああ、うん」

俺らは最新アトラクションが沢山り、3Dの体感アトラクションから絶叫マシン、コーヒーカップやメリーゴーランドなど、知っているアトラクションは全て揃っている園内を回り始めた。

第28問 無理矢理如月ハイランドに連れてこられて (中) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございます。

第28問 無理矢理如月ハイランドに連れてこられて (終) (前書き)

もの凄く字数が少なくなってしまうましたが、楽しく読んでいただければ幸いです。

第28問 無理矢理如月ハイランドに連れてこられて (終)

「……………はあ。疲れた」

俺は今、ベンチに座り、背もたれに背中を預けている。あの後い
るんなどころを回ったせいで疲れたのだ。

他の二人はと言うと、何かを買いに行ったみたいだ。二人とも元
気だなあ。

「天宮君。これ、一緒に食べようよ」

一足先に戻ってきた工藤がクレープを差し出してくる。何故に一
つなんだろうか？ 工藤は自分の分買ってきてないのか？ 俺のた
めに先に買ってきてくれたとか？

「なあ、工藤」

「ん？」

「自分の分はどうしたんだ？」

「……………」

俺が訊ねるなり工藤が笑顔のまま固まってしまった。

「工藤。どうしたんだ？」

訊ねるが反応がない。

「おゝい。工藤さ〜ん。どうしました〜」

俺が工藤の前で手を上下に振っても反応がない。困ったな〜。ど
うすっか？ 木下姉が来るのを待つか？ それが一番だよな。

「愛子。抜け駆けはダメって言ったでしょうが」

「っ！ ゆ、優子？」

数分としないうちに木下姉が戻って来て工藤の意識を戻してくれ
た。抜け駆けってなんのことだろうか？ 先に戻ってきたことか？
さっぱりわかんねーや。

「これ、天宮君の分だから食べていいよ。っで、愛子はこっち」

木下姉は工藤が持っていたクレープを取ると俺の方に差し出して
きた。工藤には自分が持っていた二つのクレープのうち一つを差し

出す。

「ああ。サンキュー」

俺はクレープを受け取ると礼を言い、クレープを食べ始めた。

「隣座らせてもらおうよ」

「あ、ボクも」

工藤と木下姉は二人とも俺の隣に座り、クレープを食べ始めた。

その後もしばらくは三人ともクレープに夢中だった。

俺が食べ終わり、数分としないうちに工藤と木下姉も食べ終わる。

木下姉が口元をハンカチで拭くなり、訊ねてきた。

「ねえ天宮君。天宮君の家族ってどんな感じなの？」

その言葉を聞いた瞬間、俺の体に電気が走ったような感覚を覚えた。

「あ、ボクも聞きたいかも」

工藤も会話に参加する。

龍人は記憶の中にある家族の事を思い出そうとしたが、途中で止めた。思い出すのが嫌だったのだ。

「そ、そんなことより、もうこんな時間だ。さー暗くならないうちに帰ろうか」

龍人は逃げるようにしてこの場を去った。

その後、二人も帰ることに賛成してくれた。つが、電車の中での空気は最悪だった。二人も何かを感じたのか話しかけてこないし。

龍人は家に帰るまで気を落ちつけることができなかったのだった。

龍人は家に帰ると、シャワーを浴び、ベッドに倒れていた。

「はあ」

龍人は天井を見ながら溜息をもらす。

「俺の家族、ねえ」

俺ははつきり言って家族の事を思い出すのが嫌いだ。それもそう

だ。だって、お袋は妹が死ぬなり
なるだけだ。

考えるのは止めよう。辛く

龍人は眠りについた。眠っていれば何も考えなくてすむのだから。

第28問 無理矢理如月ハイランドに連れてこられて (終) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございます。次の話からは強化合宿が
終わった後のお話になります。

過去断片へパーストピース 3 思い出したくないこと

停学一日目。つまり、強化合宿が終わった次の日の朝。龍人は夢を見ていた。転生する前の夢を。思い出したくない夢を。

「なあ、アンタ。そんなに仕事ばかりして楽しいか？」

龍人は電話の向こう側の相手

親父おやじに怒った口調で訊ねる。

《楽しいわけではないさ。でも、金は生きていく上で必要だろ？
だったら、多い事に超したことはないじゃないか》

「確かにそうだがよお。だが、金よりも大切なものってのもあるだろ！？」

《金よりも大切なものと言うと、命か？》

「そうだ。どんなに金があろうと、命を守るわけじゃねえだーが！？ あの時もそうだ。どんなに金があろうと守れなかったじゃねえか！」

龍人の口調が徐々に荒くなっていく。感情をそのまま言葉にするように。

だからか、文章が整っていない気がする。でも、そんなのを気にしていられるほど冷静じゃない。

「アンタはまだ分かってねえのか！？ 金は生きていく上で確かに必要だ。だが、金で全てを守れると思ってるんじゃないぞ！」

《……………》
電話の向こう側から返事が返ってこない。

「黙ってないでなんか言えよ！」

《……………》
龍人が怒鳴るが、それでも返事は返ってこない。

「何なんだよ！ アンタ！ 何か言えって言ってるだろっ！」

《……………》
「またもや、返事が返ってこない。」

「アンタ。いつつもそうだよな！？ いつつも立場が危うくなる
と黙りやがるっ！ お袋が妹が死んで、自殺した時もそうだ。アン
タはしばらくの間、俺がお袋の事を訊いても何も答えなかった。あ
の時は俺も小さかったから、あれだったがよお！ 今の俺の年齢で
あの時に戻れるなら、俺はアンタをぶん殴ってるぞっ！」

そう。俺のお袋は死んでいる。妹が死んだショックが大きかった
のだろう。自殺したのだから。

《……………》
ギリッ。

それでも無言の父親に俺はついにキレる。

「何なんだよっ！ アンタは仕事以外の事に関してはまるつきり
ダメだな！ 仕事以外にやるのがねえなら、生きてんじゃねえよ
ッ！ 他に大切なものを見いだせないなら、人間止めちまえよッ！
言ってはいけない事を言っているのは自分でも分かっている。だ
が、もう、一度高まった感情を抑えることができない。」

《……………》

「なんとか言えっの！ 何にも言い返せねエのかよ！ 本当、
ダメな人間だな！」

次々に言ってはいけないことが口に出る。

「俺はアンタが生きてる理由がわからねえよ！ 一体何が楽しく
て生きてるんだよッ！？」

《……………》

ここまで言っても無言の親父。

「マジで何なんだよッ！ 何も言うことはないのかよッ！」

《すまない》

親父はやつとの思いで口に出したのだろうが、逆にその言葉が俺
をキレさせる。

「アンタ、マジで最低だな。はっきり言うがな。俺はアンタの事
が大っ嫌いなんだよッ！」

とうとう、親子として一番言ってはいけないことが口に出る。

「アンタのその性格や生き方が大っ嫌いなんだよッ！ アンタは家族の為に何かをしたことがあったかッ！？ ねえよなあ！！ いつつも、いつつも、仕事仕事って言ってたもんな！」

《……………》

再び無言になる親父に俺はあることを口にしてしまった。多分、これが一番言っではいけないことだったのだと思う。

「アンタの

」

ガバッ！！

「はあ、はあ」

龍人は息を荒くしながら飛び起きた。

「畜生。なんつー夢を見ちまうんだよッ！ 思い出したくねエってのに！」

龍人は一人で叫ぶ。誰かが聞いてくれているわけでもない空間で、叫ぶ。

「……………親父はどうしてっかなあ？」

龍人はハツとなり、口を押さえた。

あんな奴がどうなたって知ったことじゃねえだろうが！ 考えるなよな！

心の中でそう叫ぶ。

「クソッ！」

がんツ！と、龍人は力強く壁を殴りつける。

「もう、考えるな。あんな奴の事は忘れるんだ」

その後も龍人は転生前の事ばかり考え、停学一日目は最悪の気分のまま終わりを迎えることになるのであった。

過去断片へパーストピース 3 思い出したくないこと（後書き）

読んでくれた方ありがとうございます。感想などがあれば待っています。

第29問 真っ白な空間で……

停学二日目の朝。俺が目を覚ますとそこは真っ白な空間だった。ここには見覚えがあった。神がいた空間だ。

「つつことは、神もどこかにいるのか？」

「正解」

俺の呟きに答えるように後ろから返答が聞こえてきた。俺は後ろを振り返る。そこにはやはり、神がいた。

「なんだ？ なんか用か？」

「まあ。用って言えば用かな。ちょっと、キミと話したいことがあるんだよ」

「話？」

「そうさ。キミの父親のね」

俺は神の言葉を聞いた瞬間、ごくりと唾を呑み込み警戒する。

「親父の、話だと？」

「そうさ。それよりも、警戒しなくてもいいんじゃないの？ ま

あ、警戒するのも無理はないかもしれないけどね」

「お前、親父の事を知っているのか？」

「まあ、神だしね」

「……………話って何だ？」

俺は警戒を解かず、神の事を睨みつけながら言う。

「はあ。警戒は解かないのかい？ まあいいけど。とりあえず、コレを見ておくれよ」

パチンと神が指と指とを弾くと、真っ白の空間に雲で出来たスクリーンが現れる。そしてそのスクリーンに映像を映し出す。

「っ！ な、何だよこれ？」

スクリーンに映し出された映像には親父が映っていた。親父はどこかの小汚い部屋に座っていた。玄関もすぐ近くにある、狭い部屋だ。

「おい！ これはな」

俺が訊ねようとすると神はしいーとやるように人差し指を口元に持つて行き、俺の言葉を止める。

「いいから黙って見てなよ」

「あ、ああ」

俺は神に言われるがままに再びスクリーンに目をやる。

『おい、ここを開けやがれっ！ (どんどんっ！)』

突如、玄関を叩いているような音と共に怒鳴り声が聞こえる。だが、親父は出ようとしない。それどころか、微動だにしない。

『居るのは分かってるんだよ！ とつと開けやがれっ！』

『そうだ！ 兄貴が怒る前にここを開けやがれっ！ さもないと、ここを蹴り破るぞっ！』

しばらく経つても親父はその場を動かさなかった。

『ツチ！ そうかよっ！ 望み通り蹴り破つてやるよっ！』

ドガツ！と音と共に扉が蹴り破られる。そこからは如何にも達の悪そうな男どもが入ってくる。そして入ってくると同時に親父の胸倉を掴んだ。

『おい、いつになったら借金を返してくれんだよっ！ アア！』

『……………』

『おい、なんとか言えや！ 利子の分だけでも返してもらわないとこっちも困るんだよ！』

『……………』

『ツチ！ てめーら！ 今日は一団帰んぞっ！』

『『『へい兄貴っ！』』』

男どもは来た時同様、去る時も嵐のように去っていった。そして、そこで映像が途切れる。

「なあ、あれはどういうことなんだ？」

俺は隣にいる神に訊ねる。

「見ての通りだよ。キミの父親はね、キミが死んだと同時に生きる気力を無くしてしまったんだよ。その為、仕事も失敗ばかりして

しまい、会社は倒産。借金だけが残る事になったんだ。キミはあれを見て何も思わないのかい？」

「あつははははは。俺が死んだと同時に生きる気力を無くしただど？ ありえねーな。あの人は俺が死んでもどうとも思わないぜ」「キミは本当にそう思っているのかい？」

「あたりめーだ！ あいつはお袋や妹が死んだ後も仕事ばかりしてるような奴だったんだぞ！ そんな奴が俺が死んだくらいで、生きる気力を失うはずがねーだろ！」

「はあ」

神は俺の言葉に呆れるようにして溜息を吐き、紡ぐ。

「まあ。キミがそう思ってるならいいか。でも、これだけは覚えておきなよ？ キミは間違っているからね」

「間違っている、だって？ なにが間違ってるって言うんだっ！」

「それは自分で考えることだよ。何でもかんでも、人に聞けばいいってもんじゃないよ。時には自分で考えなければいけないこともあるんだよ」

「なに言ってる」

「あ、そうそう。これも渡しておくよ。向こうに帰ったらじっくり読むことだね」

神は俺の言葉を遮るようにして手紙を渡してくる。

「これは？」

「手紙だよ。手紙。それよりも、そろそろキミを戻すから。じゃ、自分でじっくり考えることだね」

神が言った瞬間、俺の体は光に包まれた。徐々に意識も遠のいて行く。

「それじゃ、残りの時間」

神が何かを言っていたが、その時には俺の意識はすでに闇の中だった。

龍人の停学二日目はこうして終わったのであった。

第29問 真っ白な空間で……（後書き）

読んでくれた方ありがとうございました。

第30問 転生の意味するもの…… (初) (前書き)

桐谷強介のキャラを決めました。もしかしたらまたキャラ崩壊をするかもしれないので、その時は指摘お願いします。

それと、今回の話からオリ話になると思います。

では、本作をどうぞお楽しみください。

第30問 転生の意味するもの…… (初)

停学明けの初日、僕こと吉井明久は現在進行形で手足を縛られている。何故か？ 僕にもそんなこと分らないよ。いきなり美波がキスをしてきて、そしてその後いきなり須川君に殴られて、ついで、今の状況に至るのだ。

「ねえ雄二。どうにかならない？」

僕と同じように手足を縛られている雄二に訊ねる。

「無理だろうな。救世主でも来ないか」

ガラッ

雄二の言葉を遮るようにして教室の扉が開いた。教室に入ってきたのは龍人だった。

「きゅ、救世主が来たよ雄二」

「ほ、本当だな」

僕は助かることができるんだね。早速龍人を呼ぼう。

「ねー龍人ーっ！」

僕は教室に入ってきた龍人を呼ぶ。が、龍人は僕の声を見向きもせず自分の席に着いてしまった。

「ちよ、龍人っ！ 助けてよッ！」

僕は再び叫ぶ。まったく、友達なんだから助けてよね。

龍人は僕の声聞き、こちらを振り返った。

「ねえ、龍人。手足を縛っている縄を」

「黙れよ。俺に指図すんじゃないねえ。バカなことはお前らだけでやってる」

龍人はそう言い捨てると、この教室から出て行ってしまった。

「どうしたんだ龍人のヤツ？」

「本当、どうしたんだらうね。来たばかりなのに教室を出ていくなんで」

「そこじゃないだろっ！」

雄二が僕の言葉に突っ込む。あれ？ 僕なにか間違ってた？
ガラッ

再び教室の扉が開いた。今度は強介だ。

「きよ、強介助けて〜！」

僕は強介の姿を確認するなり助けを求める。

「アンタら、朝っぱらから何やってるの？」

強介が僕らの姿を確認するなり呆れている。

「呆れてないで助けてよぉ〜！」

「分かったよ。皆、何があつたか知らないけど、きっと誤解だと思つからよ〜。解放してあげるよな」

強介がFFF団に向かって言う。

『確かに、明久の事だからな。誤解だつてオチだろうな』

『だな。明久らに時間かけてるだけ無駄だだな』

『皆、撤退だ』

FFF団が強介の一言で散る。助かつた〜。

強介が僕らのところに近付いてきて縄を解いてくれる。

「ありがとう。助かつたよ」

「サンキュー助かつたぜ」

「停学明けから飽きないね〜」

強介がニヤニヤと笑いながら言う。つむ、失敬な。好きでやっているわけじゃないのに。

「ところで強介。最近龍人になつたことあつたか？」

雄二が強介に訊ねる。

「変わったところ？ 別になかつたと思つぜ。龍人がどうかしたのか？」

「それがよ (事情説明中)」

「……………」

強介が雄二から事情を聞いた瞬間、目を険しくさせて何かを考え始めた。

「どうした？」

「いや、何でもないが……明久。ちょっと来てくれる？」

「ん？ 別にいいよ」

「悪い雄二。ちょっと、明久と話があるんだ」

「ああ。分かった」

「僕は教室を出た。」

「つで、話つて？」

「ああ。龍人の事だ。お前には僕らが転生したって話をしたよな？」

「うん。したけど……それがどうかしたの？」

「実はな。転生前にも一度似たようなことがあったんだよな。あれは、あいつが家の都合で転校するって話が持ち上がった時だったよ。あいつは転校した時に悲しまないようにわざと仲の良かった生徒を拒絶し始めたんだ。初めは嫌われる程度の事を言って、その仲の良かった生徒が『なんなんだよ？』とかそういった感情が高まった時に一人で消えるといった方法を取ろうとしたんだよ。まあ、結局その時は転校の話が無くなって普通に帰ったけどね」

「それつてつまり、全部一人で背負おうとしてるってこと？」

「強介は静かに頷いた。」

「だから今度も、あいつは何らかの理由でこの学校に居られなくなったのかもしれないぜ？」

「そ、そんな！」

「僕は思わず声のボリュームを上げてしまった。」

「落ちつけよ明久。まだそうと決まった訳じゃないんだから」

「で、でも、もしも本当にそうだったとしたらどうするのさ！」

「それは」

『おい、吉井に桐谷。教室に入れっ！』

「強介の言葉を遮るように鉄人が怒鳴る。」

「あ、はい。今戻ります」

「僕らは教室に戻った。教室には当然龍人の姿はなかった。」

第30問 転生の意味するもの…… (初) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございました。

第30問 転生の意味するもの…… (終)

俺は教室を出た後、屋上に来て横になり、雲を眺めていた。

「雲はいいよなあ」

俺は手を空くもに伸ばす。掴めそうでいて掴めない雲。誰の指図さしずを受けることもなく自由に流れる雲。そんな雲を見ていると不意に一滴の涙が垂れ落ちる。

「ホント、雲は良いよな。なんで、俺は自由になれないんだろうか？」

俺は停学三日目に呼んだ神の手紙を思い出す。手紙は二枚は言っていた。

一枚目の内容は以下のものだ。

【突然だけど、キミたち人間は転生の意味を理解しているのかね？ 多分してないだろうね。転生した世界は卒業する為にあるんだよ。

元の世界で納得のいく生き方をできずに死んでしまった者、未練を残して死んだ者、大切なものを見出さなかった者、そういった者たちが卒業して行く場所なんだよ。転生後の世界ってのはね。

簡単に言うと転生ってのは『Angel Beats!』の死後の世界と同じようなものなんだよね。だから、転生した者は遅かれ早かれその世界から消えることになるんだよ。

まあ、桐谷君はボクが殺しちゃったから別だけどね】

そして、二枚目の内容は以下のものだ。

【一枚目は大体の説明だからね。本当に重要なのはここからだよ。キミはきつと停学三日目にコレを呼んでると思うから、停学三日目からの日数で言うよ。キミは大切なものを手に入れたから、後九日でその世界を消えなきゃいけないんだよ。

だから、それまでに別れなどを済ませておくんだね。キミがその世界にいた事を他の人の記憶から消すことはしないからね。正確に言っちゃえばできないから。『なんでできないんだよ?』とか思うかもしれないから言っておくけど、他の人の記憶からキミの事を消したら意味が無くなっちゃうんだよ。

未練などから卒業する為にも作られてるって言つたる? もしも、他の人の記憶から自分の記憶を消されることで未練を持たれちゃたまらないからね。

ついでに言っておくけど、『消されることで未練を持つ人もいるんじゃないのかよ?』などと思うかもしれないけど、それは我がままってものなんだよね。転生した者が誰しも通る道に未練を持つってのはね。

まあ、ボクが思うに他の人から記憶を消すことに対して未練を持つのも我がままだと思うんだけど、上の神共がそう決めちゃってるからしょうがない事なんだよね。ってなわけで、心の準備しておくことだね。それじゃまた会う時までさよなら

b y 神】

俺は自由に流れていく雲を見ながら呟く。

「なんで、こうなっただらうか? 俺の『大切なもの』ってなんなのだらうか?」

龍人は全く分からずにいた。

俺の『大切なもの』ってなんなんだ? 一体、何なんだよ!?

「はあ〜」

俺は溜息をもらしながら呟く。

「本当、雲はいいよな。なにものにも縛られることなく、この大空を自由に流れていけるんだからな」

俺は後、今日を入れて四日しかこの世界にいられないんだよな。

俺は再び手を空くもに伸ばす。

「もしも、雲になれたらどれだけいいだらうか? 雲になればこ

の大空を果てしなく旅することができのだから」

龍人は放課後になるまで延々とそんな事を考えるのであった。

放課後

俺は屋上を去り、Fクラスへ向かっている。

俺はFクラスの前に行くのとガラツと扉を開き、中へ入る。すると当然残っていたクラスメイトと合うことになる。だが、もうそんなのは関係ない。

俺は自分の席の卓袱台に置いてある鞆を肩に担ぎ、教室を後にしようとする。つが、俺の行く手を未だに残っていた明久が遮る。

「待つてよ龍人。何か困っている事があるなら相だ」

「うるせえよ。そこをどけ。俺は帰^{かえ}んだよ」

俺が明久の言葉を遮ると、

「そうわいかねえな。俺たちはなんせ仲間だからな」

「そういうことだよ」

不意に背後から声が聞こえてくる。俺は背後を振り返る。そこには雄二と強介がいた。

「お前らまでなんだよ？ 俺は帰んだよ」

「そんな悲しい事を言うでない」

「……………龍人がいなくなるとつまらない」

秀吉とムツツリー二までもが俺の行く手を阻んできた。

「お前らマジでめんどくせえしうぜえよ」

龍人は冷たく言い放つ。その言葉は感情が読み取れないほどに冷たかった。

だが、それでも明久らはどうこうとしない。

「ツチ。うぜえったらありやしねえ」

龍人は扉から出るのを諦め、窓へと歩み寄る。

龍人が窓に近寄ると、

「そうは行かないわよ」

「そうです。帰らせません」

姫路と島田までもが俺の邪魔をしてきた。

(何でこいつらはこんなにもおせっかいなんだよッ!?)
と、心の中で思いつつもそれを顔に出さないようにする。

「おい、姫路に島田。どけよ」

「そうは行きません! 私達のFクラスからは一人もかけちゃいけないんですからッ!」

「瑞希の言う通りよ」

「……………」

俺は姫路と島田の言葉を無視して、隣の隣にある窓に歩み寄り、いきなり飛び降りた。

龍人はスタツと、地面に静かに降り立った。

龍人は鞆の中に入れておいた外履きと上履きを履き替え、上履きを鞆の中に仕舞って方に鞆を担ぐと、そしてそのまま後ろを振り返らずに校門まで歩む。

つが、校門を出ようとしたところで再び邪魔が入ってしまう。

「話を聞かせてくれるまでボク達は退かないよ」

「そうよ。話を聞かせてくれるまで退かないわよ」

工藤と木下姉が校門の前に仁王立ちをしながら言う。

「ツチ。邪魔くせえ」

龍人は地面を力強く蹴る。すると、龍人の体は工藤と木下姉の頭上を飛び越える。

スタツ。先ほどと同じように静かに地面に降り立つ。そして、そのままこの場を去る為に歩こうとするが、

「「ちよつと待って!」」

工藤と木下姉が裾すそを引っ張ることによって止められる。

「ウゼエんだよ」

龍人は二人の手を振り解き、そのまま歩いて行く。

『「ちよ、天宮君っ! 待ってよッ!」』

後ろから二人が呼び止めようと名前を呼ぶが無視をして足を止め

ない。

龍人は家に帰ると真っ先に自分の部屋に行き、ベッドに横になっていた。

「あいつらは優し過ぎるんだよ。なんで、ムカつくようなことを言われているのにも関わらずにまだ友で居ようとするんだよ！これじゃ、俺がバカみたいじゃねえかよ！」

「……………いや、実際に俺はバカ、だよな。本当バカだよでも、それでも、誰も傷つかないのならば、俺は自分自身がどれだけ傷つこうと構わない。どうせ消えるのだし。そうと決まれば、明日からはもう学校に行かない方がいいかも…………。」

S I D E いつものメンバー／龍人が帰った後のFクラス

「話、聞けなかったね」

「まあ、そう気を落とすな明久。だが、本当に龍人はどうしちまつたんだ？」

「本当にどうしてしまっただんでしょうか？」

「ホント、どうしたんじやるか？」

「……………それよりも、強介・工藤愛子・木下優子がいなくなってる」

「あ、ホントね」

「いつの間になくなったのじゃ？」

「さ、さあ？」

「おい、お前ら。それよりも明日龍人が来たときの事を考えようぜ」

「そうだね」

この後、明久らは明日龍人が学校に来た時の事を話し合ったのだった。

第30問 転生の意味するもの…… (終) (後書き)

呼んでくれた方ありがとうございます。誤字脱字などがありましたら指摘お願いします。

第31問 転生世界での死（前書き）

先に謝ります。めちゃくちゃ急展開になってしまいました。

第31問 転生世界での死

次の日の放課後。Fクラスではいつものメンバーが集まっていた。だが、龍人の姿なく。

「結局龍人学校に来なかったね」

「ああ。もしかしてもう学校に来ない気なんじゃないか？」

「その可能性はありえるのう」

「……………」

「困りましたね」

「ホント、困ったわね」

今日、龍人は学校に来なかったのだ。何故かは知らない。でも、何か嫌な予感がする。

「ねえ、強介は何か知らないの？」

さつきから顎に手を当てて何かを考えている強介に言う。

「何も知らないが、ヤバイ事だけは確かだよな。もしかしたら、この学校から消える準備をしているのかもしれないぞ？」

強介はの口からはとんでもない事が言い出た。

「そう、なの？」

「まあ。仮説だからそうと決まったわけではないけどな」

そう言いつつも、強介は何かを心配しているようだった。

しばらくこの場の空気が重たくなる。

「よし。今日はここで終いだ！」

雄二が立ちあがりながら言う。

「そうだね。これ以上はあれだもんね」

僕も同意する。だってこれ以上話し合っても悪い方向にばかり話が進みそうだもん。

その後、僕らはそれぞれ家に帰った。

次の日の朝のFクラス。強介を除くいつものメンバーが集まって

いた。

「強介も来ないね……」

「ああ。一体あいつまでどうしちゃったんだ？」

今日は強介も来ていない。本当にどうしたんだろうか？

「そついえば姉上も今日は学校を休むと行っておったのう」

「えっ？ 秀吉のお姉さんも？」

「うむ。なんでかは分からんがな」

秀吉のお姉さんまで学校を休むなんて本当にどうしたんだろうか？

S I D E 天宮龍人

「んだよ？」

俺は今日の朝強介に呼び出されていた。場所は葉月ちゃんと合った公園だ。

「お前、本当にもう来ないつもりなのか？」

「そのつもりだが。それがどうした？」

「お前、一体何があったんだよ？ 一人で何でも背負いこもうとするなよな」

「はあ？ お前なに言ってるんだ？ 何にも背負いこんでなんかいないぞ？」

俺は強介の問いに嘘をつく。

「嘘だな」

だが、強介に一瞬で見破られる。俺は感情を顔に出すことなく言う。

「何が嘘なんだ？」

「何もかもだよ。お前、絶対に何か隠しているだろ？」

俺は一瞬後ずさりそつになるが踏み止まる。

「はあ？ お前マジでなに言ってるん」

「いい加減にしるよなッ！」

俺の言葉を遮るようにして強介が怒鳴る。そして、行き成り俺の

胸倉を掴んできた。

「お前こそ昔から変わってないのな！ お前は昔からそうだった！
いつも一人で全部を背負いこもつとする。少しは僕らを頼れよ
ッ！」

強介の言葉に俺はイラついた。こいつは俺の事を分かってないく
せに何を言ってるんだ？ 言ったところでどうすることもできない
くせにッ！

「お前、ウゼエよ」

だから言ってやった。俺の事を何にも分かってないのにえらそう
にしている強介に。

「お前に何が分かるんだよ！ 分かったところでどうすることも
できねえくせによッ！ そんなに知りたいなら教えてやるよッ！
俺は明後日にはこの世界を消えなきゃいけないんだよッ！」

「っは？」

強介は俺が何を言っているのか分からないのか口を半開きにして
固まってしまった。

「それ、本当なのかよ？」

強介は数分後やっとの思いで口を開いた。

「ああ。だから言っただろ。お前には分かったところでどうするこ
ともできないってなア！」

龍人がそう言い捨てた時、公園の出入り口付近からゴトツと言う
音が鳴り響いた。龍人と強介は当然そちらに振り返る。そこには靴
を落としている木下姉がいた。今の時間帯にここに何故いるのかは
不明だが。

S I D E 木下優子

昨日の桐谷君の様子はおかしかった。だから私は桐谷君の痕をつ
ければ何か分かるかと思っていた。けど、私は重大なことに気がつい
た。桐谷君の家を知らないという重大なことに。

「これじゃ、桐谷君のあとにはつけられないわよね？　しょうがない。学校に行こうつと」

あたしは朝。秀吉に学校を休むと言ったが、桐谷君のことをつけることが出来ないなら学校を休み理由が無くなってしまおう。だから、学校に行こうと考えた。

「急がなきゃマズいわね」

あたしは学校に向かって走っていた。と、そんな時に公園の方から声が聞こえてきた。あたしはなんだろうと思いついて入り口から公園を覗いてみた。そこには桐谷君と天宮君が立っていた。

そして、突然信じたくない言葉が飛び込んできた。

『お前に何が分かるんだよ！　分かったところでどうすることもできねえくせによッ！　そんなに知りたいなら教えてやるよッ！』

俺は明後日にはこの世界を消えなきゃいけないんだよッ！』

と、あたしはその言葉を聞いた拍子に思わず鞆を落としてしまった。そして、二人があたしの方へと振り返る。

ここであたしの意識は途切れてしまった。きつとショックを受け過ぎたのだと思う。だからこの後、天宮君があんなことになると思わなかった。

S I D E 天宮龍人

俺と強介が木下姉の方へ振り返るなり、木下姉が走りだした。俺と強介は聞かれては行かれないことを聴かれてしまい、反射的に木下姉を追いかける。

しばらく走っていると木下姉が横断歩道の方へと走っているのに気づく。

横断歩道まで後、10メートルもない。そして、ここでも俺はある事に気づく。信号が赤なのだ。

「木下！　ちよつと待てよ！」

俺と強介が名前を呼ぶが木下姉は反応してこない。というか、止まろうとしない。

ついに木下姉が横断歩道に出る。横からはちょうどタイミング悪くトラックが走って来ていた。

『ププー!』

木下姉が音のした方へと振り返り止まってしまった。

「畜生!」

俺は手を伸ばして木下姉の手を掴む。そして、木下姉の事を横断歩道から出すために思いっきり引っ張る。木下姉の体思うようにして横断歩道から出る。っが、俺の体は木下姉と入れ替わるようにして横断歩道へと飛び出てしまう。

次の瞬間、俺の意識はドガッと言う音と共に途切れた。

第31問 転生世界での死（後書き）

呼んでくれた方ありがとうございます。

第32問 父親（前書き）

今回で最終話となります（多分）。

第32問 父親

俺が目を覚ますとそこは真つ白な空間だった。

「はあ。全く。何も早く消えなくてもいいのに」

不意に後ろから声が掛けられる。俺は後ろに振り返る。そこには神がいた。

「早く消えるってどういうことだ？」

「そのまんまだよ。キミはあの世界から消えたんだよ。といって、死んだわけではないけど。植物状態になっただけだから。あ、でも、あと2日で意識を取り返すことは100%無理だから死んだことと同じかな」

神が不穏なことを言う。

「それ、マジかよ？」

「マジもマジ。大マジだよ」

「そう、か」

「あれ？ 妙に納得早いね？」

「だって、もうどうする事も出来ないんだろ？」

「まあね」

神が答える。本当の事を言うと俺は逆にあれでよかったと思っている。あれならば自然に消えることが出来るのだから。

「言っておくけど、今キミが思っている事は自己満足だよ」

「なんでだよ？」

心の中を読まれたことに關してはもう驚かない。

「だって、木下優子君の事をキミは考えていないからね。あの子は傷つくと思うよ。自分がキミを殺しちゃったことと変わりないんだからね」

「ッ！」

俺は神の言った事に対して素直に罪悪感を覚える。確かに神のいう通りだ。木下姉はこの後一生俺を殺してしまったという十字架を

背負っていくしかないのだから。

「おい、どうにかならないのかよっ！」

だから俺は神に訊ねる。

「どうにかならないこともないよ。禁断の方法だけだね」

「どんな方法だ？」

「キミの存在自体をなかったことにするんだよ。あの世界からね」

「ッ！」

「キミはそんなことを望んでいないだろう？ キミはだってすでに“自分の大切なもの”に気づいていいるはずだからね」

確かに神のいう通りだ。俺はその後、自分の大切なものに気づいてしまった。それは“居場所”だったんだ。自分の居場所。それは死んでも心の中で残り続ける場所だ。だが、存在したこと自体を消すのであれば別の話だ。心の中にも俺の存在が残らないのだから。でも

「でも、それでもいいですよ。誰かが傷つかないのであれば」

「そうかい。なら、キミの存在していたことそのものを消してもいいんだね？」

「ああ。だけどその前に、頼みがあるんだ」

「何かな？」

「元いた世界に、親父の前に俺の魂を現してほしいんだ」

俺は事故に遭い、その直前に思い出したことがある。そう、親父の事をだ。

「そうか。キミは気付くことが出来たんだね。分かったよ。行ってくるよ」といふ

神がそう告げると、俺の体が光に包まれた。

「ありがとうな」

俺が言うと同時に体はこの真っ白な空間から消え去った。そして、俺の体は親父の目の前に現れる。

私は龍人が死んでから全てのものを失った。生きる気力も何もかもを。

今日もいつものように部屋にこもっていた。そして、夜になるとそれは起きた。私の目の前に龍人が現れたのだ。

S I D E 天宮龍人

「りゅ、龍人なのか？」

俺が親父の目の前に現れるなり、親父が訊ねてきた。

「ああ。そうだ」

俺は答えた。そして、この後にこう紡いだ。

「言っておくが俺はもう死んでいるからな。親父の目の前にいる今の俺は魂だよ」

「そ、そうなのか？」

親父は俺の一言を聴くなり肩を落とす。

「俺、思い出したんだよ。小さい頃の事を。だから、今こうしてあんたの前に現れたんだ。お礼をする為に。謝る為にな」

俺は一度息を吐き、吸い込んだ。

「俺は妹やお袋が死んだ後、あんたが仕事ばかりしている事に腹を立てていた。まずはそのことに対して謝る。本当に悪かった。俺、何も覚えていなかったのにな」

俺は過去の事を振り返りながら口を開く。

「あんたは俺が小さい頃に事故った時、真っ先に病院に飛んできてくれたよな。あの時、俺は物凄く嬉しかった。なのに、忘れていたんだから笑い物だよな。あんたは一番に俺の事を考えていてくれた。そして、お袋が自殺した後もあんたは運動会などには毎回来てくれていたよな。俺は本当に忘れてはいけないことを忘れていたんだよな」

俺は一拍置いてから再び口を開く。

「本当にすまなかったと思っている。何もかも忘れていてさ。俺はもう、アンタの事を恨んじやいない。だからさ、自分を責めるのを止めて幸せになっしてくれよな」

俺の言葉に親父は言う。

「もう、いいのだろうか？ お前の妹や母さんが死に、そしてお前まで死んでしまったのに、私が幸せになっってしまった？」

俺はその一言を聞いた瞬間、目から一滴の涙が垂れ落ちるのが分かった。

次々に俺の目からは涙が垂れ落ちる。ここまで親父を苦しめていたなんて知らなかった。

「アンタはもう、充分に俺らの事を思い続けてくれたんだっ！

もう、いいんだよ。そもそも、アンタが自分を責める理由なんてなかったんだよだから、幸せになっしてくれよッ！ もう、楽になっしてくれよッ！ もう、自分を責めるのはよしてくれよッ！」

「そう、か。私はもう、自分を責めなくてもいいのだな」

「そうだよ！ だから約束してくれ！ もう、自分を責めないと」

「ああ」

「長生きすると」

「ああ」

「そして、絶対に幸せになると！」

「ああ。分かった。必ず幸せになる」

俺は親父の今までの人生、これから先の人生の事を思うと涙が止まらなくなっていた。

（そろそろ、良いかな？）

そんな俺の頭の中に不意に声が響いた。神の声だ。

（ああ。悪かったな。我がまま言って）

（いや、いいんだよ。じゃ、キミをこっちに戻すよ）

（頼む）

俺が言った瞬間、俺の体は光に包まれ、足から徐々に消え始めた。「それじゃあな。俺はもう、逝かなくっちゃいけない」

「りゅ、龍人！」

いつの間にか俺の体は首まで消えていた。だから、最後に親父に言い残した。

「ありがとう親父。今まで本当にありがとう。アンタが父親で本当に良かったよ」

瞬間、俺の体は綺麗に消え去った。

俺の体は真っ白な空間に戻された。

「それじゃ、キミの存在をバカテスの世界から消していいたんだね？」

俺が戻るなり神が言う。

「ああ。頼む」

だが、神は首を横に振る。そして、俺に赤いボタンを差し出してくる。

「これ、は？」

「消去スイッチさ。ボクの手で消すよりも、自分の手で消した方がいいと思ってる」

俺は神から消去スイッチを受け取り、ボタンを押そうとする。だが、押せない。明久達とバカをやっていたことを消したくなかったのだ。でも、消さなければいけない。

「手、震えているよ？」

不意に神が言う。

「本当は消えたくないんじゃないの？」

「そ、そんなことは」

「ないはずないよね？」

神が俺の言葉を遮り言う。当たり前だ。出来れば消えたくなんかない。でも、存在を消さなければ傷つく人が出てしまう。そんなのは嫌なんだ。

「だから、俺は自分の存在自体を消さなきゃいけないだっ！」
俺は勢いよくボタンを押す。

ポチッ。《存在のデリート完了いたしました》

押すと同時にそんな声が聞こえ、俺はボタンを落とす。

「くそっ！ くそっ おお おお おお おお おお！」

俺は泣きじゃくった。一生分の涙を流しつくしたと思うほどに泣いたのだ。神はそんな俺を無言で見下ろしていたのだった。

（これで良かったんだと思う。誰も傷つくことが無いのだから）

第32問 父親（後書き）

今まで読んでくれた方ありがとうございます。
おかしな終わり方ですいません。

OVAと言えないOVA 龍人と神(前書き)

次回予告(?) みたいな感じです。

OVAと言えないOVA 龍人と神

「おい、俺はこれからどうするんだよ？」

「キミ、何でまだ消えてないの？」

俺がいる事に驚く神。

「はあ？ 消えてないとおかしいのか？」

「当たり前だよ。あの消去スイッチを押して、少し後に君は本当は消えてるはずなんだからさ！」

「ふ〜ん。つで、俺は何をすればいいんだ？」

「いや、だからさ。消えてくれない？」

「いやだ。つうか、消えかた知らないし」

「はあ〜〜」

神はひときわ大きい溜息をもらす。

「しょうがない。キミにはこの後、」

「この後？」

「また世界に転生してもらおうよっ！」

「んだとおおおおおおおおおお！」

OVAと言えないOVA 龍人と神（後書き）

次回もこの龍人はどこかの世界に旅立ちます（多分）。再びバカテスの世界かもしれないし、違うかもしれない。

蛇足。これは間違っ^て最終話を二つUPしてしまったため、片方をどっにかしよう^と書いたものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5587n/>

不良とバカとテストと召喚獣

2010年11月25日15時11分発行